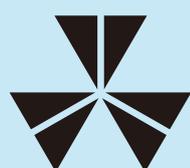


2018

研究紀要

第33号



秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校

巻 頭 言

秀光中等教育学校
仙台育英学園高等学校
校長 加藤 雄彦

平成29年度は学園創立112年の年でした。ここまで多くの皆様方から、本学を見守りご支援を賜りましたこと、改めて感謝申し上げる次第です。この感謝の念を忘れず、日々の教育活動にまい進していく所存です。

さて、この研究紀要には、そのような私たちの思いを形にすべく取り組んできた研究、実践が掲載されております。

まず、平成29年度の職員研修として、支援を必要とする生徒の理解とマネジメントについて、宮城教育大学教職大学院の関口博久先生に講演をしていただきました。現在、多くの高等学校では生徒の多様化と生徒一人一人への教育的な配慮について、きめ細かな工夫が求められております。これまでも、多くの機会をとらえて適切な対応法について研修を積み重ねてきているところですが、基本に立ち返る機会となりました。この問題は、生徒にとって、学校が安心して生活できる場になりうるかが問われている、きわめて今日的な課題です。これからも教職員の不断の自己研鑽が求められるところです。

ここで目を部活動に転ずれば、今年も、多くの部活動で素晴らしい実績を上げた一年でした。

体育会陸上競技部男女駅伝チーム、ラグビー部、サッカー部がそれぞれ都大路と花園、全国選手権の全国大会に出場しました。特に駅伝チームは、男子が全国第3位、女子は23年ぶりの全国優勝と「仙台育英」の復活を全国にとどろかせる偉業を成し遂げました。また、サッカー部は強豪高松商業に勝利するなど、その実力の高さを改めて示しました。

文化部では書道部が「書の甲子園」と称される国際高校生選抜書展において7年ぶりの全国準優勝と3年連続の東北地区団体優勝をなしとげました。

昨年度もこの場において部活動の実績を紹介申し上げましたが、平成29年12月15日付けの毎日新聞学園特集号では「四つ葉のクローバー」と題して次の一文を掲載いたしました。

「本校において、多くの部活動のこれらの成果を見るにつけ、生徒達の学園に寄せる熱い思いを感じ、胸が熱くなります。頂点に至るまでには、数え切れないほどの困難があったはずですが、しかし、頂を目指して歩み始めたら、逃げることはできません。仲間と励まし合うことはできても、自分の足で進むしかないのです。」この一歩先に、上に述べた「全国大会優勝」の輝かしい栄光が来ていたのでした。

さて、本校のもう一つの特徴であるIBについてお話します。国際バカロレア（IB）のディプロマプログラム（DP）については、昨年同様外国語コースの3年生2名が最終試験に合格しました。そのうち1名は、IBを活用した選抜入試で国立大学への合格を決めています。

これは昨年度に引き続き、東北唯一のIB認定校として誇るに足る快挙です。この取り組みは大学入試改革を含めた高等学校学習指導要領の改訂の方向性を先取りした成果と考えています。

高等学校における教育活動のありかたは、様々な変革を求められております。その変化に対応すべく取り組んだ本校教育活動の現況がこの研究紀要にまとめられています。ご高覧の上、本校のよりよい教育活動のために忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

研究紀要 33 号

巻 頭 言 加藤 雄彦

トピック

- 高等学校通信制教育の質の向上について 村上 淳 1
剣道部サイパン遠征・文化交流活動報告 加藤 裕之 5
IBにおける教科指導実践について Kerry Winter 12
Enabling and Disabling Factors in Implementing International Baccalaureate Programmes
in Japanese Secondary Schools: Curriculum, Pedagogy and Assessment

I 研究報告

- (1) Surface活用に向けた授業における取組について 情報科学コース 坂入 崇紀 20
日野 彰
(2) IB DP (国際バカロレア・ディプロマプログラム)
デュアルランゲージで行う TOK 授業 外国語コース 石田真理子 24
(3) 教科BU研修会について 教科教育センター 板垣 徳昭 27

II 平成29年度 研修報告

- (1) 秀光中等教育学校
カナダ研修報告 小保内陽大 36
(2) 情報科学コース
沖縄研修旅行報告 加藤 芳己 51
(3) フレックス・技能開発コース
沖縄研修報告 多賀 努 56
(4) 英進進学コース
沖縄研修報告 渡邊 光稀 63
韓国研修報告 狩野 常俊 71
(5) 外国語コース
ハワイ研修報告 岩渕 奈央 78
丹野まさよ
(6) 職員研修報告 雫石 利光 89

III その他

- (1) ILC沖縄校の状況報告 ILC沖縄所長 山内 一秀 97
(2) 演劇部の活動について 特別進学コース 赤間 ゆき 111

総目録 (第1～32号)

編 集 後 記

広域通信制課程における教育の質の確保・向上について

広域通信制課程 村上 淳

2015年、三重県に設置された通信制高校において補助金の不正受給、無免許教員による授業、学習指導要領違反並びに不適切指導といった問題が発覚し、同様の問題が他の通信制課程においても発覚したことから、表題の有識者会議が開かれた経緯がある。

この度、有識者会議における結論が取りまとめられ、各ILC（宮城・青森・沖縄）において研修を行う機会に恵まれたため、研修の様子や確認事項についてご報告申し上げます。

29年10月19日

午前10時より加藤雄彦理事長校長先生にもご出席賜り、ILC沖縄の常勤・非常勤職員全員を対象として実施。

29年11月15日

午後4時よりILC青森の常勤・非常勤職員全員を対象として実施。

29年12月3日

午後3時半よりILC宮城の常勤・非常勤職員全員を対象として実施。

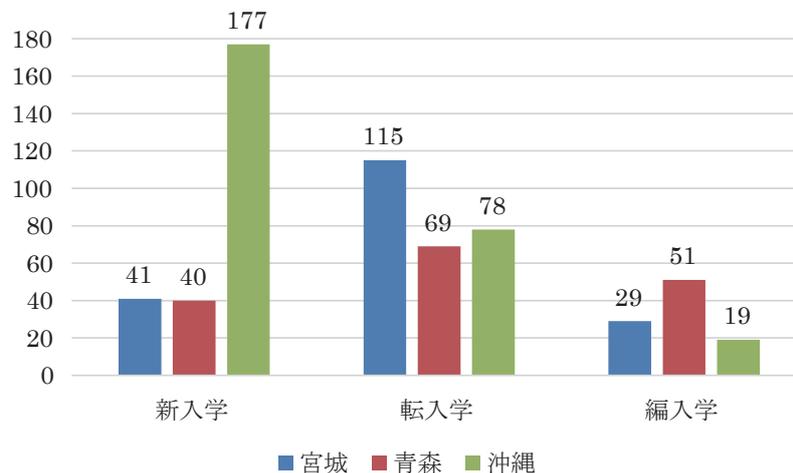
当研修会の一次資料として平成29年7月に示された広域通信制高等学校の質の確保・向上に関する調査研究協力者会議によって取りまとめられた「高等学校通信教育の質の確保・向上方策について（審議会のまとめ）」を用いた。

冒頭なぜこのような研修を持つに至ったのか、前述の三重県の通信制高校の実態を取り上げ、通信制課程全体が同様の実態があるのではないかと疑惑をもたれていることについて認識を新たにしていただいた。また、通信制課程が制度化された昭和23年と現在とでは対象となる生徒像や生徒個々の実情が大きく変化していることにも触れ、通信制に求められている役割についても実態に即した対応が必要であることをご理解いただくことができた。

通信制に入学した生徒の8割以上が10代であること、約51%の生徒が転・編入学であることについては、全日制に進学したものの何らかの事情により通学が困難になった生徒の存在を浮き彫りにしており、こうした実態を踏まえた上での関わり方が必要との認識を共有することができた。最も多い転編入理由としては人間関係でのトラブルが挙げられ、対人関係におけるトラウマや苦手意識を有している生徒が多い。また、通信制に進学する生徒には義務教育段階での不登校も多く、義務教育内容の定着についても疑問があることは職員間でも共有が図られており、それを補う取り組みとして、英語、数学についてはプレ科目を開設し、学び直しを図っているところである。

次に本校の通信制に在籍する生徒に焦点を当てると、在学生徒数は29年10月10日時点において619名、転編入学者数は361名であった。各ILCの詳細はグラフ1を参照されたい。各ILCにおいて最も多い入学形態がそれぞれ異なっており、それぞれの地において生徒の実態を踏まえた展開を行うことが求められている。

在学学生入学区別及び人数



グラフ1

半数以上の生徒が転編入学であり全国平均よりも高い値であるが、本校全日制からの受け入れ生徒数がILC宮城において在籍生徒数の約46%に達している事情にもご留意願いたい。

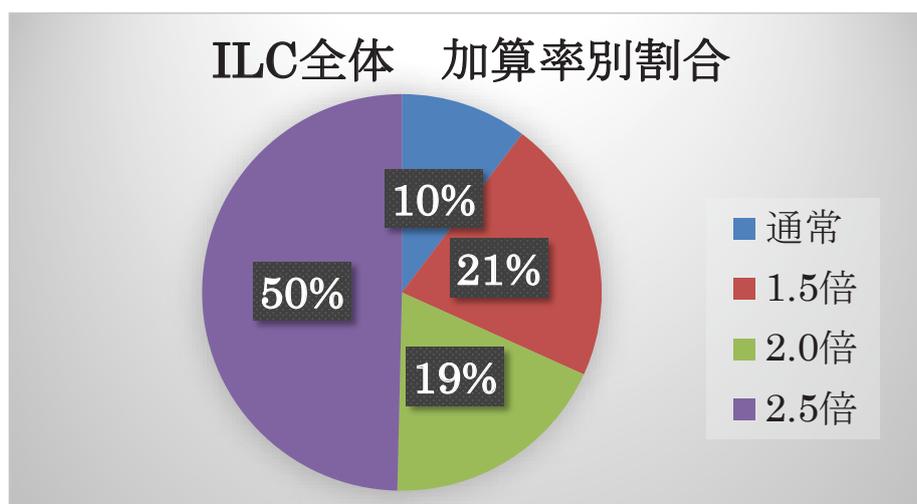
もっとも反響が大きかったのが、就学支援金の加算倍率に関してである。制度の概要は世帯の年収によって私立学校での授業料補助が支給されるものであるが、世帯年収によって支給額に差がある。支給基準並びに加算額は表1を参照されたい。この内、2.5倍加算となっている生徒は全国の全日制課程平均では30.8%、同通信制平均では45.6%と通信制に在学する生徒の方が経済的に厳しい状況にある事がうかがえる。

支給限度額	新制度における基準
所得制限（無支給）	年収910万円程度
通常支給	年収590～910万円未満程度
1.5倍加算	年収350～590万円未満程度
2.0倍加算	年収250～350万円未満程度
2.5倍加算	年収250万円未満程度

表1

出典：文部科学省 高等学校等就学支援金（新制度）Q&Aより作成

本校においても経済的に逼迫した事情は垣間見え、半数の生徒が2.5倍加算の支給を受けている。（グラフ2）



グラフ2 平成29年度 ILC 全体の支給割合

2.5倍加算の条件となる世帯年収250万円未満とは27年度の世帯平均年収約542万円と比較しても半額以下であり、中央値427万円と比較しても60%程度の額である。世帯人数にもよるが、昨今問題視されている相対的貧困にも該当する生徒が一定数在籍しているといえるだろう。本校の場合、1.5倍以上の加算が認められた場合1単位当たりの授業料は原則発生せず、9割の生徒は年間34700円での学習が可能であるが、残念ながらそうならない現実がある。一例を挙げると、履修単位を修得できず再履修した場合、申請が遅れ支援月数を減らした場合等が該当する。そのため、履修単位を落とさずに修得させることが最も重要であることは自明であるが、卒業生から教科書・学習書等の学用品を譲り受け費用負担が難しい生徒へ貸し出すなど、生徒の経済的な事情にも対応を考える必要がある。また、退学者の履修状況を見ると、最も多いのが10単位未満の単位修得状況であり、履修はしたが1単位も修得せず退学に至る生徒も多い。こうした実態は各ILCにおいても共通であり、履修単位の修得率を向上させることについては各ILC共に継続的に取り組むべき課題として共通認識を持つことができた。

学習について話を進めると、平成28年度よりインターネットスクーリングサイト通称Lネットが本格運用開始され、4月～9月における延べ視聴回数は4175回であった。平均では1人当たり6回程度視聴している計算となる。開設科目数及びレポート数からするとまだまだ低いと言わざるを得ない数字であり、より一層の利用促進が期待される。また、教科書・レポートの変更に合わせて内容も適宜改正が必要であり、早急な動画への反映と動画編集ノウハウの蓄積が課題として挙げられた。学び直しに関しては数学・英語に限らず他教科においても

復習問題を入れるなど、簡易的ではあるが対策が考えられるため、今後のレポート課題等への反映が期待される。

進学に関してであるが、全体的な傾向として、4年制大学への進学は少数である。例年各ILCそれぞれ若干名の進学実績があるが進学先の多くは専門学校となっている。就職についてはアルバイト先での登用、縁故採用が多い。ハローワークの高卒求人を紹介した就職も増えてきてはいるが、多くないのが現状である。進学・就職を合わせると約6割の生徒が進路を決定したうえで卒業しているが、残る4割について高校卒業をゴールとするのではなく、高校卒業をスタートと位置付けることができるよう個々人の意識を変える必要性を認識してはいるものの、具体的な取り組みにまでは至っていないのが現状である。

このような現状と有識者会議における提言を踏まえ、目指すべき方向性を

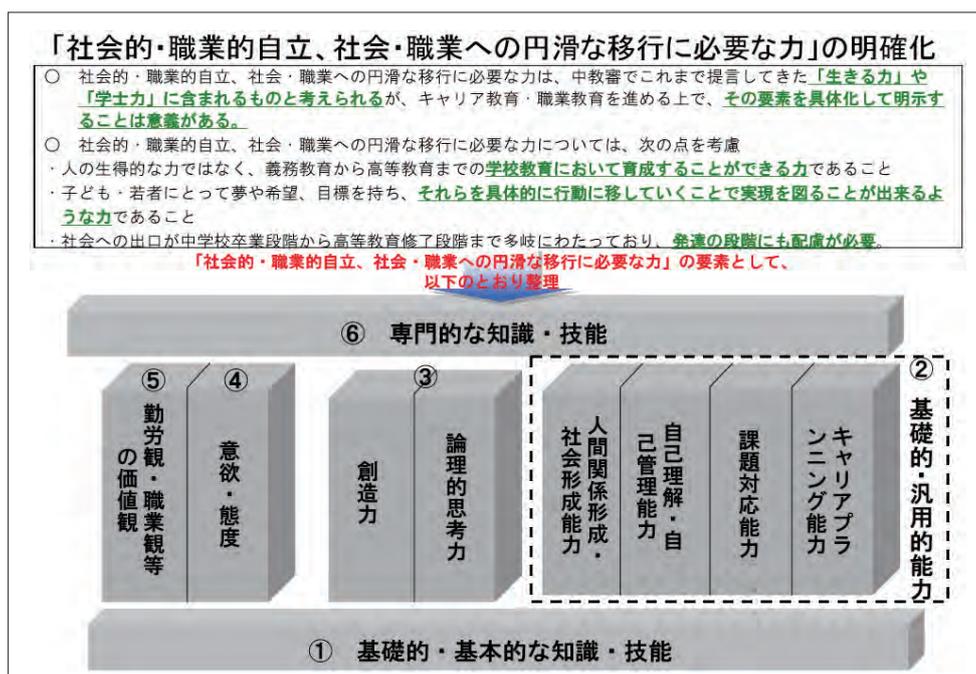
1. 学習指導要領及び関係法令の順守
2. 生徒の社会的自立に必要な力の涵養と教育の質の向上
3. 教育課程内外の活動の強化・深化

とした。1つ目に関しては言うまでもなく、高等学校卒業証明書を授与するということは定められた内容の学修を修めた証左であるため、レポート課題の内容や面接指導における適正化について再確認を図った。また、添削指導の在り方についても評価だけを記入するのではなく、継続的に取り組む意欲が育まれるよう簡単なコメントを記入し次に繋がる指導をお願いしたところである。ILC青森・沖縄においては平日でもスクーリングが実施され、多様な登校スタイルに対応が可能となっている。ILC宮城においては県内外に学習センターが整備され、宮城野学習センターでは平日でも教科担任の指導が受けられる等、学習環境は飛躍的に向上したといえる。こうした設備の充実を生かせるよう積極的な働きかけが求められるとともに不登校経験者等、従来の学校教育に適応できない生徒の受け皿として多様性を保持した取り組みを継続していきたい。また、全国的に問題となったサポート校での不適切な指導や無資格者による授業といった実態はなく、学習センターについても本校の職員が対応している。しかしこうした実態については外部から見えずらい部分であるため、SNSやHP等を活用した情報発信について、検討の余地がある。

2つ目について、社会的自立を考える上で具体的な要素として平成24年9月7日文部科学省生涯学習局政策課発行の『「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」について』3ページ（資料1）より

- ・人の生得的な力ではなく、義務教育から高等教育までの学校教育において育成できる力（後略）
- ・（前略）夢や希望、目標を持ち、それらを具体的に行動に移していくことで実現を図ることができるような力（後略）

という2つの観点から、通信制においては資料1内の②で示された基礎的・汎用的能力について重点的に取り組むべき必要があることを説明した。ここで挙げられている4つの要素はどれも社会生活を送るうえで欠くことのできない能力であり、とりわけ人間関係形成・社会形成能力については苦手とする生徒も多いのが実情であるが学内外の諸活動を通じて成長する様子は顕著である。同様に自己管理能力についてもレポートを出せずに単位を落とした生徒が次期には計画的な課題提出を行い単位修得を果たすといった例もあり教科科目だけではなく、学習を通じて種々の社会的な能力についても指導に注力したい。



資料1

出典：文部科学省 社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力

この内、キャリアプランニング能力については通信制課程における課題として取り上げられた。審議会においても総合的な学習の時間については形骸化が指摘されておりホームルーム活動や総合的な学習の時間など、より有効に活用できるよう各ILCにおいての検討課題とした。

3つ目の教育課程内外の活動については沖縄研修や山形蔵王スキースノーボード研修等を通じてILC間の交流を図りつつ、地域の特色について触れる機会としている。このほかにもそれぞれのILC毎に特色ある活動を展開しており、青森の種差ウォークラリーや沖縄の琉球神話の校外学習等を行っており、生徒にも好評である。地域文化への理解を深めることは地域の構成員としての自覚を促すとともに確固たるアイデンティティの形成にも寄与するため、継続して取り組んでいきたい。

まとめとして、通信制課程全体が疑惑の目を向けられているが通信制の活動は外部から見えずらいため、積極的な情報発信が必要であり、とりわけSNS等を活用したリアルタイムな情報が訴求力が高いこと。通信制課程への実地検査も検討されているため、書類の作成管理は適切に行う必要があること。生徒との関わりの中で教科指導だけではなく生活指導やキャリア教育にも目を向けなければならないことを再確認した。一つ一つは日常の業務の中で繰り返し行われていることであるが、それぞれの意味や役割を再確認する意味でも、有意義な研修であった。40ページ超にわたる内容を1時間の中で扱ったため、省いた点、説明が至らなかった点もあるが、出席して頂いた職員の皆様には熱心に耳を傾けていただいた事に感謝申し上げたい。また、今回の研修に関して、ILC青森・沖縄の職員2名から感想を寄せていただいたのでご紹介させていただきます。

ILC 青森職員

今回の研修会で、本校通信制の生徒の状況を改めて確認すると、勉学の指導以前に生徒の背景（家庭環境や不登校の状況等）に目を向け、生徒理解をするところから始めなければならないと強く感じた。生徒一人ひとりの状況に合った指導や励ましをすることで良い方向に大きく変化することがある。挨拶ができるようになった、会話ができるようになった、笑顔がみえるようになった等、100人いれば100通りの指導や励まし方がある。少しの変化にも気づくことができる教員でありたい、また、生徒に常に寄り添うことができるようになりたいと思った。

通信制高校に関しては、冒頭で取り上げられた就学支援金不正受給問題が発覚してから、通信制高校の実態や生徒の状況等がメディアにとりあげられる機会が多くなり、通信制高校全体に疑惑の目が向けられている中、やはり全日制高校よりも普段の取り組みが見えにくいいため、より一層の危機感を持つことと、SNSやHPを通じて情報を発信することで、通信制に関する安心感を生み出すことが必要だと感じた。

最後に、今回の講師の先生は現在ILC宮城の教員として勤務されているが、ILC青森卒業生でもある。通信制の生徒と教員の2つの立場を経験されている先生はとても貴重で有意義な研修会であったし、ILC青森職員全員の理解促進を図ることができて良かった。

通信制研修会を実施する機会を与えてくださった加藤理事長・校長先生に感謝申し上げます。

ILC 沖縄職員

平成29年10月18日にILC沖縄では村上淳先生を講師にお招きし、『高等学校通信教育の質の確保・向上方策』について職員研修を実施いたしました。研修を通じて、昨今の通信制高校を取り巻く社会の厳しい目や、私たちが果たすべき役割について認識を新たにすることが出来ました。特に学習指導要領や関係法令に基づいた適切な授業運営の実施については、学校職員として普段、当たり前に行っているつमりの業務であっても、適切な見直しが必要であると感じました。

研修の中であった、義務教育内容の確実な定着は、一年次のみならず、在学の3年間で継続的に取り組んでいくことが求められると思います。

沖縄では、基礎学力の不足に悩む生徒も多く、学習指導要領等が求める高等学校卒業程度の学力保証のため、これからも日々の教育活動に積極的に取り組んでいきたいと考えています。大変有意義な研修の機会を頂き、村上先生や校長先生を始め、諸先生方に改めて感謝申し上げます。

最後に、貴重な機会をご提供いただきました加藤雄彦理事長校長先生に厚く御礼申し上げますとともに、開催に向け準備等を行っていただきました各ILCの教頭先生、職員の皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

剣道部サイパン遠征・文化交流活動報告

情報科学コース 加藤 裕之

1. はじめに

歴史的に日本との深いつながりを持つ、北マリアナ連邦の一つサイパン島での4泊5日の本学園剣道部による遠征および文化交流活動について報告致します。

【地理】北緯15°15′ 東経145°45′で、面積は122km²、人口58,000人。サイパン島を含む北マリアナ諸島は、小笠原諸島の南方、世界で最も深いマリアナ海溝の近くに位置する。透き通った海水とサンゴ礁（ラグーン）に囲まれたリゾート地で、日本から最も近い英語圏である。付属島としてマニャガハ島がある。南にはサイパン海峡を挟んでテニアン島、ロタ島がある。島の最高所は、タポーチョ山の473m。

【歴史】北マリアナ連邦は他のミクロネシアの島々と同様に、東洋と西洋が出会う時にもたらす政治的、又、経済的な苦闘を反映した島です。歴史はマゼランの世界一周航海やスペインの商船の貿易に表わされるような叙事詩的な冒険を含有しています。何百年もの間の物質的な苦難、台風による荒廃、400年にわたる外部からの支配のもとに、このように繁栄していった誇り高き島の人々の歴史なのです。

マリアナ諸島は東南アジアからの航海者たちが初めて定住したといわれています。最初の西洋との関わりは1521年西洋人として初めての“観光客”マゼランが島々を発見した時でした。島はスペイン王フィリッパ4世の未亡人である、オーストリアのマリア・アンナ女王の名を取り、後にマリアナと名付けられました。ドイツがマリアナ諸島を購入した1899年まではスペインが島を支配していました。ドイツは第一次世界大戦が勃発した1914年に島を日本に奪われ、日本は国際連盟のもとに島を植民地にしました。

1944年には、島々に40,000人以上の日本人が住み、経済は日本の勝利に役立ち支えるために非常に発展しました。

準国策会社の南洋興発株式会社がサイパン島、ロタ島、テニアン島に製糖所を建設し、アジア最大の製糖産地として発展させました。会津若松出身で設立者の松江春次は、「砂糖王（シュガーキング）」と呼ばれ、彼の功績が称えられて、彩帆神社境内に「彩帆公園（現砂糖王公園）」が造園され、現職社長としては異例の寿像が建立されました。

サイパンは太平洋戦争での主な戦場となりました。最初の原子爆弾を積んでエノラゲイが広島に向かいテニアンから飛び立ちました。1947年、日本人は本国へ送還され、島々はアメリカ合衆国により管理された国連の信託統治領となりました。政治的な経過としては、1970年代に信託統治領の終了に伴いアメリカ合衆国と永久的に結合し、1980年代にアメリカ市民となった島の人々によって、ようやくスタートされました。

2. 期間

平成29年10月17日（火）～22日（日）

3. 行程

	日	時間	摘 要	食事
	10/17 (火)	21:30 22:00	多賀城校舎集合 学校バスにて成田空港へ出発 【車中泊】	夕：×
1	10/18 (水)	06:00 10:20 14:55 16:00 18:00	成田空港到着後、出国の手続き 航空機（DL298）にて、空路サイパンへ サイパン空港到着 日本領事館表敬訪問 領事館主催の歓迎夕食会 【サイパン島内 宿舎泊】	朝：× 昼：機 夕：○ (弁当)

	日	時間	摘 要	食事
2	10/19 (木)	09:00 11:00 17:00	メモリアルパーク 現地高校との交流 ストリートマーケット（剣道披露） 【サイパン島内 宿舎泊】	朝：○ (弁当) 昼：○ 夕：×
3	10/20 (金)	08:00 14:00 14:30 15:30 17:00 18:00 20:30	サイパン島内観光へ出発 サイパン市庁舎表敬訪問 マリアナ政府観光局表敬訪問 宿舎到着 ひまわり道場にて細田氏表敬訪問 道場にて交流開始 ひまわりレストランにて夕食 【サイパン島内 宿舎泊】	朝：○ (弁当) 昼：○ 夕：○
4	10/21 (土)	08:00 10:00 11:00 12:00 13:00 15:00 17:00 19:00 20:30	宿舎より徒歩にて、サイパン香取神社へ （神社境内の清掃ボランティア活動） 香取神社の例祭開始 日本人会秋祭り開始 ひまわり道場との合同剣道披露 日本人会商店の売り子のボランティア 祭り会場の清掃ボランティア活動 ガラパン散策 夕食 宿舎到着 【サイパン島内 宿舎泊】	朝：○ (弁当) 昼：×
5	10/22 (日)	09:00 13:30 14:00 16:15 19:00 20:00 22:00	マニャガハ島へ 宿舎より空港へ サイパン空港到着後、出国手続き 航空機（DL297）にて、空港成田へ 成田空港到着後、入国の手続き JRにて仙台へ 仙台駅到着 解散	朝：○ (弁当) 昼：×

4. 研修報告書

◇1日目（雨・曇：28℃）

成田空港から空路4時間、雨天の中、サイパン島に上陸しました。空港にはW.松本夫妻、PDI高橋氏にお出迎え頂き、その後、在サイパン領事館 篠田領事に表敬訪問致しました。領事はサイパンとの交流が積極的におこなわれてゆくことに大きな期待をされておられました。剣道部生徒たちも領事館事務所内に入り、領事に歓迎さ



在サイパン領事館



ガラパンの宿舎

れ感動しておりました。夕食はフェスタリゾートホテルにて森下副領事、ひまわり道場の細田氏などと会食しました。生徒たちは皆、元気でこちらの宿舎での生活を楽しんでいます。

◇2日目（晴・雨：30℃）

台風21号発生の影響を受け、本日予定していたマニャガハ島へのツアーは波のうねりが残り中止となりました。それでも日中は昨日とは異なり晴れて暑くなりました。予定を変更して松本夫人の案内で、グレースクリスチャンアカデミーへ訪問し短時間ですが現地の中・高校生たちと交流することができました。その後、アメリカメモリアルパークへ行き第二次世界大戦におけるサイパン島戦などの歴史を学ぶ時間をもちました。昼食は晴れたビーチのサーフクラブレストランにて食事をして、生徒たちはビーチで大喜びでした。夕刻はストリートマーケットで剣道を披露し、大成功でした。



グレースクリスチャンアカデミー



グレースクリスチャンアカデミー



宿舎での練習



ストリートマーケットでの披露

◇3日目（晴：32℃）

本日は朝方から快晴で、予定通りサイパン島内の見学を行いました。昨日アメリカメモリアルパークで観た第二次世界大戦サイパン戦の記録VTRで学習したバンザイクリフを始めとする元戦地を巡り生徒たちもかつての戦争のことを肌で感じる事ができたと思います。午後からW.松本氏のアレンジでサイパン市庁舎表敬訪問しサイパン市D.APATANG市長とお会いし、生徒たちと話しをする機会をもうけてくださいました。続いて、マリアナ政府観光局のC.Concepcion局長を訪問し、生徒一人一人に剣道による文化・スポーツ交流に対する感謝状を手渡し頂き、生徒は感激していました。夕刻より細田氏のひまわり道場にて、現地道場生との交流がおこなわれて生徒たちは大変充実していました。



バンザイクリフ



スーサイドクリフ付近



バードアイランド



サイパン市庁舎訪問



感謝状を受ける生徒



マリアナ政府観光局訪問



ひまわり道場での交流



レストランひまわり特製ケーキ

◇4日目（晴：33℃）、5日目（曇：32℃）

彩帆香取神社での日系コミュニティ（北マリアナ日本人会）主催の秋祭りに参加しました。10:00から神社の例祭が始まり、サイパン市長 篠田領事など日本人会、日系コミュニティの方々と一緒に会し、生徒たちもなかなか体験できないような祭りに参加することができました。午後から現地ひまわり道場の児童と共に本校剣道部の生徒たちも30分間の剣道披露を行い盛況のうち全てが終了し生徒たちも満足した様子でした。これで今回のサイパン遠征のプログラムは終わりましたが、明日は朝から2日目に行くことができなかったマニャガハ島の観光をし、予定の便で帰路に着きます。



彩帆香取神社



彩帆公園の松江春次像



秋祭りでの剣道披露



感謝状を受ける部員



サイパンの夕日



ひまわり道場生とのお別れ

5. 生徒研修報告

高嶋 清奎 (2T4組)

では先日まで行われたサイパン遠征を「親善」「戦争」「環境」という3つのテーマで振り返りたいと思います。まずは「親善」についてです。親善については、日本領事館等の表敬訪問や剣道披露、地元高校訪問がありましたが、強く感じるものがあつた「剣道披露」と「高校訪問」について報告させていただきます。

「剣道披露」では、ストリートマーケットと日本人会の秋祭りの二ヶ所で披露させていただきました。ストリートマーケットでは、自分が中心となって英語で剣道の成り立ちやルールについて説明し、実際の剣道を披露しました。地元や観光客の方々にも剣道を体験していただき、竹刀で打つという剣道の醍醐味を感じていただきました。秋祭りでは、炎天下の中、外で剣道をするという初めての体験をすることができました。さらに、屋台の手伝いもさせていただき、普段は客側からしか見ない屋台の様子を中から見ることができ、貴重な体験をすることができました。

「高校訪問」では、グレースクリスチャンアカデミー高校を訪問し、授業中のクラスの様子を見学させていただきました。日本とは違うアクティブラーニングの授業を肌で感じ、日本のような全員が同じ方向を向いて行う授業も良いですが、お互いで意見を言い合い、話し合う授業もこれから先、大事だと感じました。サイパンに行くと、現地の人の積極性を日本と違うと強く感じました。日本では間違えるのを怖がって自分の意見を言う人がなかなかいません。しかし、小さい頃からアクティブラーニングなどで自分の意見を言う習慣がついている海外の人は、自分の意見をバンバン言ってきます。これからは世界を股にかけた人材が必要とされる時代です。自分の意見をはっきりとすることができる人間になるとともに、日本の授業形態について考えさせられた体験でした。

次に「戦争」についてです。主に太平洋戦争について学びました。メモリアルパークでは、様々な展示品を見るとともに、アメリカ側から見た太平洋戦争についての映画を観ました。この映画ではバンザイクリフから飛び降りる女性の姿を見たり、日本では絶対に見ることのできない貴重な映像の数々を見ることができました。広島に原爆を落とした爆撃機が出発したのがテニアン島だということなどの初めて知ることも多くありました。日本の教育では日本から見た戦争しか学ばず、日本は美化されています。しかし、外国側から見てみると日本が行った残虐なことを生々しく見ることができました。映画を観ている途中、昔の日本を今の北朝鮮に重ねられる部分も多くありました。戦争跡地の見学でも、バンザイクリフやスーサイドクリフ・最後の司令部などの歴史の舞台となった場所を見学することができました。あちこちに空いた艦砲射撃の跡をみて、当時の激戦具合がよくわかりました。その一方で様々な技術をサイパン諸島に持ち込み、サイパンの発展に日本が貢献したことも知ることができました。そのためサイパンでは日本を毛嫌いな人がおらず、実際に私たちにもとても親切に優しく歓迎してもらいました。

最後に「環境」についてです。一番驚いたのは、水道水がまずいということです。日本では上下水の設備が整っていて、蛇口をひねれば美味しい水が出てきます。しかしサイパンでは、飲み水としては使えないので、ミネラルウォーターを買わなければいけません。剣道をするにしても大変なことは多くあります。剣道をするにあたって必需品である竹刀もサイパンでは購入することは難しく、日本から取り寄せたり日本に行った時にまとめ買いするのが普通だそうです。日本ではすぐ道具はそろえることができます。そんな恵まれた環境で剣道ができていることを感謝しなければならぬと感じました。この感謝の気持ちはサイパンに行ってみないと感じないことだと思います。しかし、サイパンの景色は日本では見るることのできない美しさがありました。マニヤガハ島という島の海の透明度やどこまでも続く海、雄大な自然の数々は心に残るものとなりました。

今回の遠征が私にとって、初めての海外となりました。今までは、英語を喋れなくてもいいだろうという気持ちが心のどこかにありましたが、サイパンに行くと、英語が喋れるようになりたいと強く思いました。そして今回学んだことを日本の仲間達に伝え、今後の学校生活に生かしていかなければならないとも思いました。

このような貴重な体験をすることができる機会を与えてくださった校長先生に感謝を申し上げます。

6. おわりに

剣道部監督 青木 康博

日頃より、剣道部に対しましてご高配を賜り厚く御礼を申し上げます。

また、この度サイパン親善交流に参加する機会を頂きましたこと、重ねて御礼を申し上げます。ありがとうございました。私も含め、生徒達が大変貴重な体験をさせて頂きました。

Managaha Island

Managaha Island lies less than a mile northwest of Micro Beach, and is a part of the Managaha Marine Conservation Area with some of Saipan's best snorkeling.
マニヤガハ島はマイクロ・ビーチから1マイル足らずの海上にあり、マニヤガハ島海中生物保護区の一部としてサイパンで最高のシュノーケリングの出発するマリンスポーツ基地である。

Photographer - Parke Gregg

Proudly Designed & Distributed in the USA • www.managahaphotographics.com
© IMPACT PHOTOGRAPHICS • Printed in China



8 02285 06745 3

仙台商英学園
加藤 裕之先生
青木 康博先生
高松島主将以下剣道部員の皆様

この度は、サイパン遠征にお疲れ様でした。
「秋祭り」では、炎天下の剣道披露、パフォーマンス、ありがとうございました。
限られた滞在時間でした。サイパンを満喫出来たでしょうか？

今後とも、日本とサイパンを繋ぐこと、北マリアナ諸島の深い歴史のかけ橋を大切にして、友好の「かけ橋」になって頂くのを願っています。
微力ではありますが、当地部員と並び、念力で日本と北マリアナ諸島の肉親強化に努める所存ですので、今後とも定にお願いを申し上げます。

平成29年10月23日
サイパン領事事務所
篠田 介二

THIS AREA FOR OFFICIAL POSTAL USE ONLY



AMERICAN MEMORIAL PARK
61295 46

【参考文献】

A Pictorial of Saipan and the Commonwealth of the Northern Mariana Islands

国際バカロレアを日本の中等教育学校に導入する際の 「促進要因」と「阻害要因」：カリキュラム、教授法と評価

モナッシュ大学／秀光中等教育学校 ケリー・ウインター

序論

日本は世界で最も厳格で、例外を許さないような、そして統一化されていると思われる教育制度を持っています。国際的なPISAの学習到達度テストでのその顕著な成績は日本の学習指導要領の厳格で、統一化された性質のおかげだと言うことができます (OECD, 2010a; OECD, 2010b)。能力主義と儒教的な文化的価値観は日本社会と文部科学省の学習指導要領の両方に見られるのですが、「カリキュラムは本質的にその社会の価値観と結びついている。」というスキーマの理論 (2004) を証明しております。これらの価値観は日本社会が生み出したいと思っている日本人の望ましいと資質であると思われるだけでなく、経済成長を続けるうえでそしてその社会を維持していくためには必要なものでもあるのです。最近、日本の教育制度を卒業した人々に考え・工夫や想像力、指導者としてのスキルが欠けているのではないかと心配されております。そしてそれはさらに絶え間なく変化し続ける世界情勢の中で競争力を維持しようと努力している日本経済に対して悪影響を及ぼすのではないかとというさらなる懸念を引き起こしております (Iwasaki, 2013)。

日本は今グローバルイゼーション、労働市場の改革、技術の発展、事前の解決手段が存在しない価値観の変化によって引き起こされる自己変革が必要な多くの課題に直面しております (OECD, 2016)。

経済的な将来を確保するためには日本政府は日本がグローバル人材を輩出しなければならないと認識しております。というのはそれらの人材は外国語でコミュニケーションする能力を持ち、課題解決のために批判的で独創的な考え方をし、デジタルリテラシーを持っているので、多様な文化的背景を持った市場で指導力を発揮できるからです (Iwasaki, 2013)。国際バカロレア (IB) はこの目標を達成しその経済的将来を確保するための枠組みであると証明されました。ゆえに、日本政府は2018年までに国内でIB校を200校まで増やそうという目標を発表しました (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009)。

現在その期限まであと1年を残すのみですが、日本には49校のIBワールドスクールが存在します (International Baccalaureate, 2017)。しかしながら、この大胆な目標の達成のためには日本の一条校にIBを導入するための教育的なそして実際の援助がほとんどありません。だから導入を計画している学校は明治時代からほとんど変わっていない教授方法を180度変えるという自己変革的な課題をどのように実現するか苦闘しているのです (Yamamoto, et al., 2016)。

学習結果ということになると、カリキュラム、教授法、そして評価が3つの本質的に関連があり相互依存している教育の問題であります。信頼すべきそして有機的な教授法と学習を生み出すためにはこれらの3つの問題に正しい方向性といったものがなければなりません (UENSCO-IBE, 2003; Smith, Stanley, & Shores, 1950)。この研究はカリキュラム、教授法、そして評価といったレンズをとおして、日本でIBを導入する際の「促進要因」と「阻害要因」に焦点を当てるつもりです。

カリキュラム、教授法、そして評価

現在のカリキュラム (学習指導要領) は21世紀を生き抜くための様々なスキルを生徒に身に付けさせる目的で開発されました。教育にバランスのとれた全人格的な指導方法を取り入れております (Iwasaki, 2013)。“生きる力”がグローバル人材の開発を支援するために2011年に日本の学習指導要領の中に導入にされました。生きる力は3つの領域に基づいています：1) 学力、この中には批判的思考と課題解決能力が含まれます。2) 豊かな人間性 この中には他社への思いやりや共感が含まれます。3) 身体的精神的な健全さ この中には健全な精神や身体の育成を奨励することが含まれます (文部科学省 2009)。

比較してみると、国際バカロレア機関 (IBO) はそのプログラムのためのカリキュラムは提供していません。その代わりに各学校の自主性を認めております。各教科の目的や目標はそれぞれの教科の指導書 (サブジェクトガイド) の中にはっきりと明示されております。それらの指導書はIBの使命を達成するために開発されたものなのです。「その使命とは多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりを富んだ若者の育成を目的としています (IBO 2017)」。これらの包括的なIBの目的、目標そして使命は、評価の基礎となるそれぞれの教科の指導書の中に示されたそのカリキュラの目標の中にはっきりと明示されています。日本とIBの両方のカリキュラムは国際的には学問的な厳格さで知られており

高く評価されております。IBのプログラムには提供しているカリキュラムといったものはないのですが、公式に文書化されたカリキュラムで比較してみると、文部科学省の学習指導要領とIBのカリキュラムにはいくつかの類似点があるのがわかります。

2つのカリキュラムの類似点は次のような要素が含まれますが、これらに限定されるわけではありません。

- ・積極的に社会に貢献したいという気持ち（地域社会と国際社会）；
- ・自律的に課題解決をしたり批判的に思考したりする能力；
- ・課題について自ら方向性を見出し、独創的に探究する能力；
- ・世界をより良い場所にしようとする考え方をを持った生徒の育成；
- ・社会的正義感や共感を育成；
- ・全人格的な生徒の育成；
- ・情報に通じ、知識がありそして独創的な生徒たちを生み出す；
- ・自国の文化に対する深い理解と尊敬の念の涵養；

(Winter, 2017; IBO, 2017a, 2017b; MEXT, 2009)

日本の教育では、学力は学習達成度の指標だけでなく人格の尺度でもありと考えられており、信念や決断力そして忍耐力の証でもあるのです (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001)。学力検査が認知された必要性となり、社会的な目標や倍率が上がった大学入試のために中等教育を支配するようになったのです。大学入試は最近まで試験の成績のみに基づいて実施されてきました (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001)。日本の大学入試度の総括的評価や試験に基づいた評価基準は高校時代の成績結果と必ずしも整合性を持っているわけではなく、学習指導要領と評価の間に断絶が生じることになりました。仲間や、家族や教員そして学校によるこの大きな社会的なそして文化的な目標を達成させたいという生徒たちに対する欲求や圧力は、それらの目標を達成すれば自分たちの経済的未来が保証されることもあり、2005年に改訂した学習指導要領に従わなければならないという義務を凌駕することになったのです。そして代わりに大学入試の基準達成するために必要な知識や技能の習得により多くの注意が払われるようになったのです。

対照的に、IBは「カリキュラム、教授法、評価」の評価や学習成果に関して明白です。IBの評価は総括的評価と形成的評価から成り立っており、焦点を成果だけではなく学習の過程にも充てております。総括的評価とは生徒の学習の証拠を与えるように設定されており生徒たちが自分の知識や技能を有意義なそして信頼のおける方法で証明できる様々なチャンスが与えられています。形成的評価は学習や教授の過程について生徒や教員にフィードバックし、グローバルな文脈に基づいた学習をおし批判的な思考力を育成し国際的視野や学習に対するポジティブな態度を育成する様々な機会が与えられています。

日本の典型的な授業ではわかりやすい授業が未だに顕著です。教員の認知されている役割は教科書の内容を伝え、必ず生徒たちが文部科学省によって定められている学習指導要領に沿って学習をするようにすることです。

授業には課題プロジェクトや探求型の学習はほとんどあるいは全く含まれません (Yamamotoら 2016)。様々な生徒たちが各クラスに大勢いるのでグループとして一緒に学習し、あまり違いのないようにすることに価値があるのです (OECD, 2010)。儒教の価値観である平等主義や謙虚さや自己主張をしないことを重んじる文化などがさらにこの種の教え方や学習を確たるものにし、知識を持っていることを証明する唯一の必要とされる方法は試験用紙上だけで、生徒たちはクラス内の議論やグループワークをおして自分たちの知識を「ひけらかし」「目立つ」必要がないので学習は個人的な活動だという考え方になってしまうのです (Yamamoto, et al., 2016)。目標が変わらないので日本の高等学校の教授法はカリキュラムの改訂にも関わらず旧態依然のままなのです。

IBは教授法の理念や基礎を提供しますが、しかしながらそれは授業実践の規範ではありません—それはカリキュラムにおいても同様であります。IBのプログラムの中には深い構成主義の理念が見られそして民主主義的な教室の雰囲気の中で探求型や生徒主導の学習を奨励し、学習をグローバルな文脈の中に適用し学習の幅を広げること集中します (What is an IB education?, 2013)。構成主義の理念は次のような考えに基づいております。つまり生徒たちは知識・理解の位置からスタートし、生徒たちは（そして教員も）意味を構築するため探求の過程を経ながら一緒に活動をします。構成主義者の教授方法では教員が議論、研究、グループワーク等々をおして学習を促さなければなりません。教員が授業に介入するのは指針となるような質問をしたりとか、必要と思われる時だけです (International Baccalaureate Organisation, 2014; Hattie, 2008)。IBは6つの教授法の見解を文書で提供していますが、それには探求型、概念主義、文脈化、協働、差別化、そして評価によって情報が伝えられること、などが含まれます (International Baccalaureate Organisation, 2014)。

促進要因

Yamamotoら (2016) はIBを導入する際の中等学校の事例研究でいくつかの「促進要因」を発見しました。それらはリーダーシップ、理念、カリキュラム開発に関する独創性の歴史とネットワークづくりです。教育の3つの本質的な要素、カリキュラム、教授法、そして評価の中でカリキュラムは日本の教育においてもIBにおい

でも最も促進力や統合力を持っていると考えられています。それらの発見はこのカリキュラムの統合力の「促進要因」はマクロ的に見ると政治的・経済的な要素であるということを示しています (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009)。

21世紀を生き抜くための様々なスキルを取り入れる目的でカリキュラム改革のためにオーバーホールを実践しないという選択をすれば、日本経済の前途を危機に陥れるという認識があったので2005年の文部科学省が学習指導要領の目標や目的の改訂を行い、引き続き2006年の生きる力の開発につながったのです。焦点が当てられている批判的な思考や課題解決能力そしてコミュニケーション能力は経済界そしてその次には教育界がグローバル人材を開発し、国際的な競争力をつけ日本経済を繁栄させていくために若者に身に付けさせたいと願っている能力です (Winter, 2017; Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (MEXT), 2009)。玉川大学のクインシー亀田氏は次のように断定しこの事実を確認しています。「国家が国際的な発展のペースに合わせていくためには心を開き、バランスがとれ、独創的だが信念を持ち、挑戦することを恐れない人材が必要なのです (Nitu, 2013)。」

IBと文部科学省の、批判的な独自の思考、研究や探求、国際理解に焦点を当てた生きる力の育成という目標が合致しているということもあったので文部科学省のIB支援が保証されたのです (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009)。

これらの両方の変化は生徒の批判的思考、課題解決能力、創造性そしてコミュニケーション能力の育成に一步近づいてといえます。これらの政治的な経済的な要因がカリキュラムの改訂に弾みを与えました。そしてそれらはIBプログラムと偶然に合致していたので日本の学校にIBを導入することができたのです。学校の理念の中に既にある価値観や概念に基づいてIBを導入するということは学校の伝統や文化的アイデンティティを失わないために大切なことです (Shibuya, 2013; Yamamoto, et al., 2016)。

阻害要因

Yamamotoらは日本でIBDPを導入した5つの学校の事例研究をしていくつかの「阻害要因」を確認しました。これらの要因の中には経済的な (教材、年会費、研修費)、構造的な (ICTなどを含む教育機器)、組織的 (少人数クラスに教員を割り当てること、日本の学校の卒用要件を満たすこと、試験の日程をIBに合致させること)、教授法上の (探求型授業、ICTの使用、評価基準に準じた評価、形成的評価に関する専門的知識・技術の欠如) そして言語的な課題 (日本語で書かれた教材が不十分で手に入りにくい) があります (Yamamoto, et al., 2016)。もうひとつの課題がロバート・ステム氏によって報告されました (as cited in Nitu, 2013)。

日本の私立学校のDPコーディネーターは、DPの大量の仕事を滞らせることなく部活動に従事することはIBを導入しようとする時には大変厳しい問題だと確認しました。(Nitu, 2013)。DPコーディネーターが語るさらなる課題にはコア科目であるTOK (知の理論) とCASに関する懸念が含まれます。というのは、それらは従来の日本の学習指導要領にうまく整合しないからです (Nitu, 2013)。

教授資料や機器の要因は別にして文献では教授方法と評価とカリキュラムの乖離が阻害要因であると指摘しています (Winter, 2017)。IB教育を通じて日本教育改革を実施することが公式に宣言されたのですが (Abe, 2013; Council on the Promotion of Human Resource for Globalization Development, 2011)、どのようにそれを日本の学校で遂行させるのかということに関して付随した実用的な支援がありません。IB教育の遂行にとっても重要で、生徒の学習を向上させるという観点において効果であることも証明されていますが、日本の教員には欠けているいくつかの重要な教育実践があります (Yamamoto, et al., 2016)。

文献はこれらのマクロ的「阻害要因」は日本の教育制度の能力主義的そして儒教的な理念なのだと指摘しています。日本の教育制度はまた仏教や神道の影響を深く受けているのですが、「努力」「忍耐」「自律心」や「勤勉」のような日本の社会的な価値観は日本の能力主義や儒教の直接的な影響だと言えます (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001)。学力は特に「忍耐」「自律心」や「勤勉」などの人格の物差しであるという考えは能力主義の結果です。生きる力に付随するスキルを開発しようとする政府の努力にも関わらず「共感」「チームワーク」「忍耐力」や「共有」などの明確に描かれた属性は学力の評価の中に今も見えません。

試験に基づく教育制度は能力主義や儒教の価値観の結果展開してきましたが大学関係にも影響を与え、入学生の受け入れ過程もまた試験に基づいています (Yamamoto, et al., 2016)。この問題を認識し、そして生きる力の教育改革で描かれた成果やグローバル人材を象徴するようなスキルが証明されることを願って文部科学省は2020年から批判的思考、ディベート、コミュニケーション能力を加えるようにするためセンター試験を変えるという第一歩を表明しました。しかし日程に関しては特に細かく明らかにされてはおりません (文部科学省2009)。

結論

政治的・経済的要因によって可能となる日本の中等学校の教授法や評価と比較してみると、学習指導要領は

IBを導入する際に最も促進力や統合力を持っていると証明されました (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009)。グローバル人材を開発することによって日本経済の将来を確保し、若者に批判的思考、コミュニケーション能力、研究、探究、課題解決能力などを身に付けさせ急速に変化する市場で成功を収めるために、これらの改革は、文部科学省が協働し、実業界や経済界によって主導されました (Winter, 2017; Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (MEXT), 2009)。生きる力はこれらの属性を養成する目的で2006年に日本の学習指導要領に取り入れられました。そしてそのことは真のIBプログラム導入するための強力な理念的基礎を提供したので、IBプログラムの導入にとってとても重要なことでした (Shibuya, 2013; Yamamoto, et al., 2016)。

日本の教育制度の中ではカリキュラム (学習指導要領) と教授法と評価の間には乖離が存在します。生きる力を含めた改訂学習指導要領は日本の高等学校では、入学試験がベースとなっている大学入試に合格するために生徒たちを対応させるということを重要視するためほとんど実践されておられません。この教育目標は評価にも影響を与えそしてそれはさらには教員中心の講義形式の教授法を必要とすることになり、カリキュラムとの乖離を引き起こすこととなります。次には日本の教育制度に国際的なカリキュラムを導入しようということになると、このギャップは日本の教育制度の能力主義や儒教の理念のようなマクロ的「阻害要因」に影響を受け、緊張を生み出します。「努力」「忍耐」「自律心」や「勤勉」は能力主義や儒教の影響を受けた社会的な価値観にすぎません (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001)。さらに、学力はこれらの属性の指標だと考えられています。そしてそれは社会においてその価値が高まり、評価において学力を際立たせることとなります (Yamamoto, et al., 2016)。これらの理念的な価値観は、ディスカッション、研究、グループワーク等とおして教員が学習を促すことが必要な、そして意味を構築するために探求の過程に基礎を置いている構成主義者の理念を妨げます (International Baccalaureate Organisation, 2014; Hattie, 2008)。IBの6つ教授法はこの理念から派生していますがそれは日本の高等学校の現在の授業実践と対立します。

日本におけるIBの導入は急速に変化する国際的市場に対抗するために日本経済や社会を強化してくれそうな期待が持てる枠組みです。国家的な体制のなかで国際的なプログラムを実践することは慎重に考慮されなければならない取り組みで、その豊かな文化遺産を失わないように時間をかけてそれぞれの価値観を検証した結果であるべきなのです (Shibuya, 2013; Hill, 2000)。IBの考え方では、どの文化であれ、導入に際しては批判的にその価値観や理念や実践を分析・検証するべきで、また一方では、同時に、たとえば日本のようにこれから導入しようとしている国の教育制度の価値観や内在する弱点を調査・研究すべきであると思っているのです (Shibuya, 2013)。

訳：高橋 郁夫

Enabling and Disabling Factors in Implementing International Baccalaureate Programmes in Japanese Secondary Schools: Curriculum, Pedagogy and Assessment

Kerry Winter

Monash University and Shukoh Middle School

Introduction

Japan has an education system that is considered to be among the most rigorous, thorough, and coherent in the world. Its outstanding performance based on international PISA benchmarks can be attributed to the stringent and thorough nature of its curriculum (OECD, 2010a; OECD, 2010b). The meritocratic and Confucian cultural values which are evident in both Japanese society and the national curriculum, support Suskie's (2004) theory that curriculum is inherently linked to societal values. Not only are these values desirable in the kinds of Japanese citizens its society hopes to produce, but are also necessary for continued economic growth and the preservation of its society. Recently, there have been concerns about the graduates of Japan's education system lacking innovation, creativity, and leadership skills which caused further concern about its effect on the Japanese economy which is striving to compete in a constantly changing global context (Iwasaki, 2013). Japan now faces a number of adaptive challenges caused by globalisation, labour market reforms, the development of technology, and changing cultural values for which there is no pre-existing means for a solution (OECD, 2016).

In order to secure its economic future, the Japanese government recognised that Japan must produce Global Human Resources (*gurobaru jinzai*) who possess skills to communicate in a foreign language, think critically and creatively to solve problems, be digitally literate, and lead in this culturally diverse global marketplace (Iwasaki, 2013). The IB was identified as a framework to achieve this goal and secure its economic future (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009). Accordingly, an initiative was announced in which IB programmes would be implemented in two hundred schools in Japan by the year 2018 (Council on the Promotion of Human Resource for Globalization Development, 2011). At time of writing, with one year remaining before this deadline, there are currently forty nine IB World Schools in Japan (International Baccalaureate, 2017).

However, this ambitious initiative has been accompanied with little pedagogical and practical support for implementation in Japanese article one schools, who have struggled to navigate the adaptive challenge of changing a pedagogy which has remained largely unchanged since the Meiji era (Yamamoto, et al., 2016).

Curriculum, pedagogy and assessment are three essential interconnected, and interdependent aspects of education when it comes to learning outcomes. In order for authentic and organic teaching and learning to take place, there must be an alignment between these three aspects (UENSCO-IBE, 2003; Smith, Stanley, & Shores, 1950). This investigation will focus on enabling and disabling factors of IB implementation in Japan through the lens of curriculum, pedagogy and assessment.

Curriculum, Pedagogy and Assessment

The current curriculum was developed with the aim of fostering students with twenty-first century skills, and incorporates a balanced holistic approach to education (Iwasaki, 2013). "Zest for Living" (*ikiru chikara*), was introduced into the Japanese curriculum in 2011 to support the development of global human resources. Zest for Living is based on three areas: i) academic ability, including critical thinking and problem solving skills, ii) a rich lifestyle, including care and empathy for others, and iii) physical and mental health, which includes the promotion of a healthy mind and body (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (MEXT), 2009).

In comparison, the International Baccalaureate Organisation (IBO) does not prescribe curriculum for its programmes, allowing instead for autonomy of the schools. The aims and objectives for each subject are clearly outlined in each subject guide, which are developed in order to fulfil the mission statement of the IB, which is to "develop inquiring, knowledgeable and caring young people who help to create a better and more peaceful

world through intercultural understanding and respect” (International Baccalaureate Organisation, 2017). These overarching aims, objectives, and mission of the IB are evident in its curricular goals outlined in subject guides, which form a basis for assessment.

The reputations of both the Japanese curriculum and the IB are internationally renowned for their academic rigor, and are highly regarded. While there is no prescribed curriculum in the IB programmes, a comparison of the objectives of the Japanese national curriculum with the IB demonstrate several similarities in the officially documented curricula. Elements of cohesion between the two curricula include, but are not limited to:

- A desire to positively contribute to society (local and global);
- Independent problem solving and critical thinking skills;
- Self-directed and creative exploration of subjects;
- Development of students with a mindset to make the world a better place;
- Fostering of a sense of social justice and empathy;
- Fostering of holistic students
- Producing informed, knowledgeable, and creative students;
- Development of a deep understanding and respect of one’s own culture

(Winter, 2017; International Baccalaureate Organisation, 2017a, 2017b; MEXT, 2009)

Gakuryoku (academic ability) is not only considered a measure of academic achievement in Japanese education, but also of character – demonstrating discipline, determination, and perseverance (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001). The measurement of academic ability (*gakuryoku*) became a perceived necessity, and came to dominate secondary education due to the societal goal and increasing competitiveness of university entrance, which until recently has been solely based on exam performance. The summative and test-based standards of assessment of the entrance system to Japanese universities does not reflect a cohesion with high school learning outcomes, resulting in a disconnect between curriculum and assessment. The desire and pressure for students, and by association, families, teachers and schools, to achieve this great societal and cultural goal, which can secure their economic future, outweighs the obligation to follow the 2005 amended curriculum, and instead greater attention is given to the acquisition knowledge and skills required to achieve the university entrance examination standards.

In contrast, the IB is most explicit in regards to assessment and learning outcomes out of curriculum, pedagogy and assessment. IB assessment is composed of summative assessment and formative assessment, which are focused not only on the product, but the process of learning. Summative assessment is designed to provide evidence of student learning, and consists of opportunities for students to demonstrate their knowledge and skills in a meaningful and authentic way. Formative assessment aims to provide feedback to students and teachers about the learning and teaching process, and provide opportunities for students to develop critical thinking skills through learning based on global contexts, develop international mindedness and a positive attitude towards learning.

Explicit instruction is still the prominent form of teaching in the typical Japanese classroom. The perceived role of the teacher is to deliver textbook content and ensure students follow the National Curriculum, as determined by MEXT. Classroom instruction contains little to no project work or inquiry-based learning (Yamamoto, et al., 2016). Due to the heterogeneous and large number of students in each class, there is value of learning together as a group, and little differentiation (OECD, 2010). Confucian values of egalitarianism and cultural values of humility and non-assertion of self, further consolidate this style of teaching and learning, as it offers a sense of privacy when the only required method of demonstration of knowledge is on a paper test, and doesn’t require students to ‘stand out’ or ‘flaunt’ their knowledge through class discussions or group work (Yamamoto, et al., 2016). Due to the goal remaining unchanged, the pedagogy in Japanese high schools has also remained unchanged, regardless of the curriculum reforms.

The IB provides a pedagogical philosophy and foundation, however it is not prescriptive in pedagogical practices – similarly to its curriculum. A deeply constructivist philosophy is present in all IB programmes, encouraging inquiry-based, and student-lead learning in democratic classrooms, focusing on applying learning to global contexts to further expand their learning (What is an IB education?, 2013). The constructivist philosophy is founded on the concept that students start from a position of knowledge and understanding, and that the students (and teacher) work together through a process of inquiry to construct meaning. A constructivist pedagogical approach requires the teacher to facilitate learning through discussion, research, group work etc. only intervening to ask guiding questions or correct when necessary (International

Baccalaureate Organisation, 2014; Hattie, 2008). The IB provides six documented aspects of a pedagogical approach which include inquiry-based, concept-driven, contextualized, collaborative, differentiated, and informed by assessment (International Baccalaureate Organisation, 2014).

Enablers

Yamamoto et al. (2016) discovered a number of enablers of IB implementation in a case study of five Japanese secondary schools, which were leadership and vision, history of creativity in regards to curriculum development, and networking. Of the three essential elements of education, curriculum, pedagogy, and assessment, curriculum is considered to be the most conducive and cohesive to both Japanese education and the IB. Findings suggest that the macro enablers for this curricular cohesion are economic and political factors (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009).

A realisation that not implementing a curricular overhaul to incorporate twenty-first century skills would jeopardise Japan's economic future led to a revision of the national curricular aims and objectives in 2005, and a subsequent development of *Zest for Living (ikiru chikara)* in 2006. A focus on critical thinking, problem solving skills, and communication are but some skills the economic and subsequently the education sector hopes to foster in young people in order to develop Global Human Resources (*gurobaru jinzai*) to be able to compete in a global workforce and keep the Japanese economy afloat (Winter, 2017; Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (MEXT), 2009). Quincy Kameda from Tamagawa University, Japan, confirms this by positing, "for the country to keep up with the global pace of development, they need people that are open-minded, well-balanced, creative but principled, and not afraid to take risks" (Nitu, 2013). The alignment of the IB with MEXT's goal of developing *Zest for Living (ikiru chikara)*, focused on critical and independent thinking, research and inquiry, and international mindedness also guaranteed the support of MEXT (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009).

Both of these changes are a step closer to developing critical thinking, problem solving, creativity and communication skills in students. These economic and political factors gave impetus to a curricular reform, which because of its incidental alignment to the IB programmes, enable the implementation of IB in Japanese schools. Implementing IB programmes based on values and concepts already present in the school philosophy is critical in order not to lose its traditions or cultural identity (Shibuya, 2013; Yamamoto, et al., 2016).

Disablers

Yamamoto et al. identified a number of disabling factors of five case study schools implementing the IB Diploma Programme in Japan. Among these factors were financial (resources, annual fees and training), structural (resources including ICT), organisational (staffing allocation for smaller classes, national curriculum requirements, alignment of examination timelines), pedagogical (lack of expertise in regards to inquiry-based learning, use of ICT, criterion-based assessment, and formative assessment), and linguistic challenges (insufficient resources available in Japanese) (Yamamoto, et al., 2016). An additional challenge was reported by Robert Stern (as cited in Nitu, 2013), Diploma Programme Coordinator at a private international school in Japan who identified involvement in extra-curricular activities while keeping up with a Diploma Programme workload as a challenge for IB implementation (Nitu, 2013). Further challenges expressed by DP Coordinators also include concerns about the core DP subjects of Theory of Knowledge (TOK) and Creativity, Activity, Service (CAS), which don't 'fit' into a traditional Japanese curriculum (Nitu, 2013).

Logistic factors aside, the literature suggests that the disconnect between pedagogy and assessment, and curriculum, are disabling factors (Winter, 2017). While there has been an official announcement of an initiative of education reform in Japan through the IB (Abe, 2013; Council on the Promotion of Human Resource for Globalization Development, 2011), there has been no accompanying practical support as to how to implement it in Japanese schools. There are a number of key pedagogical practices which are critical to the implementation of the IB, as well as proven to be effective in terms of enhancing student learning which are lacking in expertise of indigenous teachers (Yamamoto, et al., 2016).

The literature suggests these macro disablers are the meritocratic and Confucian philosophy of the Japanese education system. While Japan's education system is also deeply influenced by Buddhism and Shintoism the following Japanese societal values have been a direct influence of meritocracy and Confucian philosophy in

Japan: Effort, persistence, self-discipline, and hard work (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001). The concept that academic achievement, (*gakuryoku*), is an indicator of character (persistence, hard work, self-discipline) in particular, is an effect of meritocracy. Despite Japan's efforts to develop skills pertaining to *ikiru chikara* (Zest for Living), the explicitly outlined qualities such as empathy, teamwork, perseverance and sharing, are not present in its assessment of academic ability.

The test-based education system that has evolved as a result of meritocratic and Confucian values has also influenced the university sector, for which the university entrance admissions process is also test-based (Yamamoto, et al., 2016). In recognition of this conflict, and out of a desire for the outcomes outlined in the Zest for Living education reforms and skills representing Global Human Resources to be demonstrated, MEXT is has announced an initiative to change the Centre Exam (a national test required for entrance to national universities) from the year 2020 to include critical thinking, debate, and communication skills, though there has been nothing specific announced to date (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (MEXT), 2009).

Conclusion

Curriculum was identified as the most conducive and cohesive to implementation of IB in Japanese secondary schools, as compared to its counterparts of pedagogy and assessment, enabled by economic and political factors (Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan, 2009). These reforms were initiated by the business and economic sector, in collaboration with MEXT, in order to secure Japan's economic future by developing Global Human Resources (*gurobaru jinzai*) and develop young people with critical thinking, communication, research, inquiry, and problem solving skills to succeed in a rapidly changing global marketplace (Winter, 2017; Yamamoto, et al., 2016; Abe, 2013; Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Japan (MEXT), 2009). Zest for Living (*ikiru chikara*) was included in the Japanese curriculum in 2006 for the purposes of developing these attributes, which provides a strong philosophical foundation in order to authentically adopt IB programmes, which is critical in implementation of IB programmes (Shibuya, 2013; Yamamoto, et al., 2016).

A disconnect exists between the curriculum, pedagogy, and assessment in the Japanese education system. The curriculum (including *ikiru chikara*) is scarcely implemented in Japanese secondary schools because of the importance of preparing students to pass university entrance exams, which are test-based. This educational goal affects assessment, which in turn dictates a teacher-centered and didactic pedagogy, causing the disconnect with the curriculum. This disconnect in turn creates tension when it comes to implementing an international curriculum into the Japanese education system, affected by the macro disablers of meritocratic and Confucian philosophy of the Japanese education system. Effort, persistence, self-discipline and hard work are but some societal values influenced by the meritocracy and Confucianism (Inugai-Dixon, 2016; OECD, 2010; Hood, 2001). Furthermore, academic achievement (*gakuryoku*) is considered to be an indicator of these attributes, which increases its value in society, affecting its prominence in assessment (Yamamoto, et al., 2016). These philosophical values impede a constructivist philosophy which requires the teacher to facilitate learning through discussion, research, group work etc. and is founded on a process of inquiry in order to construct meaning (International Baccalaureate Organisation, 2014; Hattie, 2008). The IB's six approaches to teaching stem from this philosophy, which conflict with the current pedagogical practices in Japanese secondary schools.

IB implementation in Japan could be a promising framework through which to strengthen the Japanese economy and society to withstand the rapidly changing global marketplace. Implementing an international programme within a national system should be a result of a careful and considered approach, taking the time to examine the values of each, lest some of its rich cultural heritage be lost (Shibuya, 2013; Hill, 2000). In the spirit of the IB, it should be critically analysed and examined of its value, philosophy and practices prior to implementation in any culture, while at the same time examining and investigating the values and potential weaknesses of the education system of the host country, such as Japan (Shibuya, 2013).

I 研究報告

(1) Surface活用に向けた授業における取り組みについて

情報科学コース 坂入 崇紀
日野 彰

1. はじめに

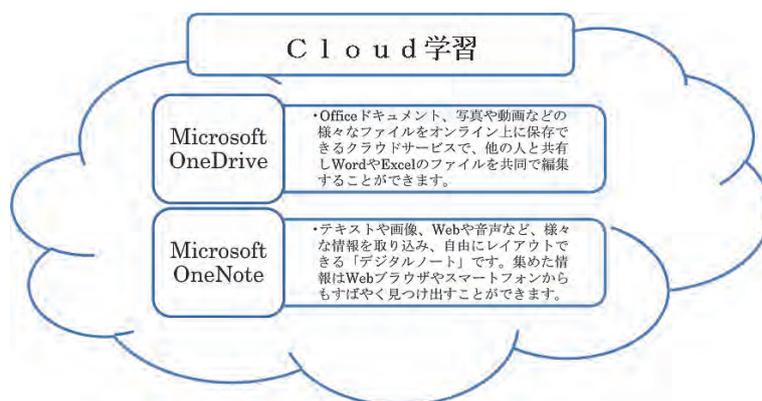
情報科学コースでは、設立から8年間「コミュニケーションツールとして自在に活用できるコンピュータ技術の習得」を目的としており、「デスクトップパソコン実習室での授業」さらに「1人1台のノートPC活用」と実習を重視した授業に力を入れてきました。そして、平成29年春からは、その「生徒1人1台」の態勢をさらに前進させ、「タッチペンが使えるキーボード付きタブレットPC『Surface』を使って授業を行う」というスタイルを導入しました。Surface導入の背景や実際の授業での活用例、今後の課題や展望について、以下の通り述べていきたいと思います。

2. Surface活用の背景について

平成26年から平成28年までは15型のノートPCを活用していました。平成29年の入学生にはSurfaceを導入して頂き、従来使用していたノートPCと比較しても半分ほどの重量で持運びに便利で、コンパクトなサイズながら12インチの液晶を搭載しており、バッテリーの持ちも良く、性能も高く、携行性と操作性に優れています。Surfaceは、タブレットによる閲覧用途とキーボードによる創作用ノートPC用途の高いレベルでの双方向型ツールで、生徒が社会人になった将来を考えた場合、パソコンやタブレット(2 in 1)デバイスを使用する機会が多くなることが予想され、導入して頂いております。また、情報科学コースでは「情報社会のエキスパートを養成する」という教育目標のもと、MOS試験の資格取得を目指す方針もあり、一般的にビジネスシーンではWindowsを利用することが圧倒的に多いため、OSはWindows、Officeを十分に活用できるSurfaceを導入して頂いております。宮城野校舎は、恵まれたWi-Fi無線LAN環境下で生徒はどこにいてもインターネットの利用が可能であり、特にタッチパネルやタッチペンでの入力可能なデバイスを導入することでOfficeやOneNote、OneDriveを中心にICT授業の推進を加速していきたいと考えます。また、全教室にプロジェクター、電子黒板が整備されており、教員のSurfaceと繋がっています。その教室にて、全Surfaceにリモート機能ソフトを挿入して、教員のPCで一括表示できる機能を採用し、生徒の画面を教員のPCからプロジェクターへ投影する仕組みを構築しており、積極的に生徒と教員双方のデバイスが活用されています。Surfaceを活用することでインターネット調べ学習を行い、探究型アクティブラーニングの授業展開として実施することが可能となりました。

3. Surface導入後の効果

生徒は一人1台貸与のSurface使用で、デバイスに触れる時間が多く、タッチパネルで操作が可能のため使用方法上手な生徒が増えています。教員へも1人1台でSurfaceを使用し、各教科必ず使用する方針としています。校内でインターネット環境を常に使用できるメリットを活かし積極的にソフトのインストールを行い、またSurface上で指導教材を作成し、そのまま授業で利用し、OneDriveによるグループ共同作業ができる探求型アクティブラーニングの授業として活用しています。教員は業務でもOneDriveを活用し共同作業する場合もあります。コースの1年普通教科(国語、数学、英語、理科、保健、家庭科)の多くの授業ではSurfaceを活用し、教科書、ノートと併用し活用しています。情報科目「社会と情報」「アプリケーション」「グローバルライセンス」の3教科はPC実習室で授業を行い、グローバルライセンスでは、MOS Excelの資格試験に合格するための対策を学んでいます。生徒感想として、授業では、教員がホワイトボードに書く文章を鉛筆でノートに写していく代わりに、キーボードで打って、できた文書をファイルに保存していく新しい授業のスタイルとして感激していました。国語の授業では、文学作品の作者についてレポート提出課題があり、生徒各自がWi-Fiでインターネットにアクセスして作者プロフィールや創作歴等を検索し、調べた結果をWordにまとめて共有のファイルに送信するというかたちでSurfaceを活用しています。英語の授業では、Surfaceで英語学習ツールを使ってリスニングドリルを解き、Surfaceにイヤホンをつないで1問ずつ発音される英語を聴いて、その単語や英文のスペルをキーボードに打ち込んでいき、正解になると、次の問題へと進んでいくドリル形式を行っています。同時通訳のように、耳から聴いた英語をキーボードで打つ速さと正確さが求められ、リスニングの力もアップしています。



授業で自分が作ったノートは、OneDrive ファイルに保存しています。Cloud上のOneDriveでのグループ学習やタッチペンを活用してのOffice、OneNoteでのノート作りは詳しく内容がまとめやすく、画質もきれいで新鮮な気持ちで積極的に楽しく授業で使用しています。OneDrive上でのグループ学習は、インターネットが繋がっていれば、家のパソコンやスマートフォンでも見ることができノートの中身を取り出して予習・復習ができるので便利です。

<導入事例1> One Driveを活用した探求型アクティブラーニング

科目：建学の精神

単元：本校の建学の精神である「至誠」「質実剛健」「自治進取」について研鑽する

ICT活用のねらい：

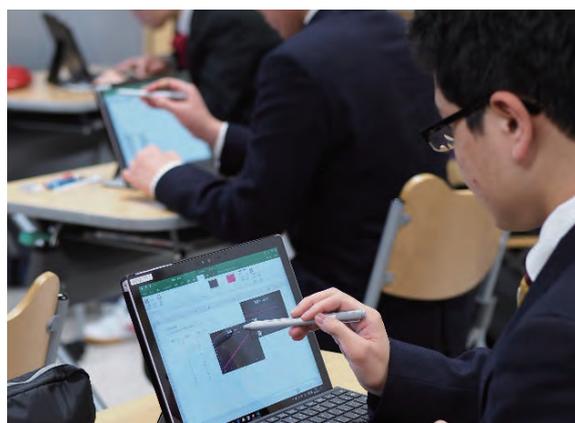
各グループの代表者がプロジェクターを使用して発表を行うことにより、学習成果の共有を円滑に行うことができる。また、グループで共同レポートを作成する際にOne Driveを活用することにより、複数人の同時進行で作業をすることによって効率化をはかり、リアルタイムで情報を共有することができる。

本時の展開（学習活動）

学習の流れ	主な学習活動	ICT機器コンテンツ
導入 (10分)	建学の精神である「至誠」「質実剛健」「自治進取」について、各自語句の意味をインターネットで調べ、その意義について考えをまとめさせる。	Surface
展開 (35分)	グループに分かれ、建学の精神に対する各自の考えとその根拠について意見交換を行う。また、どんな場面で「至誠」「質実剛健」「自治進取」を実感することができるか、実践できるかを話し合う。 グループごとにまとめた意見をもとに、One Driveを使用して共同でWordのレポートを作成する。 グループで代表者1名のPCの画面をプロジェクターに写し、発表をさせる。	Surface プロジェクター One Drive (写真1) (写真2)
まとめ (5分)	各グループの発表内容を比較し、建学の精神について改めて考えを深める。	Surface



(写真1) One Drive を使ったグループ学習



(写真2) タッチペンを活用する生徒

<導入事例2> One Noteを活用した授業展開

科目：化学基礎

単元：化学反応式とその量的関係

ICT活用のねらい：

One Noteを活用することにより、各自が工夫をこらしながらオリジナルのノートを作成することが可能となるため、意欲的に問題に取り組む姿勢が見られる。One Noteは家のPCやスマートフォンからもアクセスすることができるため、今後、生徒の家庭学習にも活用することが期待される。

本時の展開（学習活動）

学習の流れ	主な学習活動	ICT機器コンテンツ
導入 (10分)	PC画面をモニタリングするため、教員と生徒の各PCを同期させる。その後、遠隔操作を用いて各生徒のPCに単元「化学反応式」の小テストを配布する。	Surface プロジェクター
展開 (35分)	One Noteを起動し、各自小テストのファイルを読み込む。その後、タッチペンを使用し小テストの問題に解答する。 生徒たちはOne Noteの機能であるマーカー、ノートシールを使いながら工夫してオリジナルのノートを作成する。	Surface プロジェクター One Drive (写真3) (写真4)
	教員は生徒のPC画面をモニタリングしながら、適切に問題に取り組むことができているかをチェックし、また操作に不慣れな生徒がいればそのサポートをする。 最後は生徒が作成したOne Noteの画面を投影しながら、小テストの解答と解説を行う。また、全体で生徒が作成したノートの共有をする。	
まとめ (5分)	取り組んだ小テストのポイントや解説をノートにまとめ、きれいに整理する。	Surface One Note



(写真3) グループ学習の風景



(写真4) One Note を使いノートを作成

4. 生徒の感想

- Surfaceのタッチパネルなど最新パソコンの凄さを実感し、タッチペンを活用してのワード、エクセル、パワーポイント、OneNoteでのノート作りは詳しく内容をまとめやすかったです。画質もきれいで新鮮な気持ちで毎日使うのが楽しみです。
- プロジェクターを活用した動画やパワーポイントでの説明による電子黒板の授業は、ホワイトボードが見やすくてわかりやすいです。また、作成したプレゼンテーション資料をホワイトボードで発表できるので、とても良いことだと思いました。
- SurfaceのOneDrive上でのグループ学習は、今まで体験したことがないようなパソコンの利点をいかしての授業でとても新鮮で楽しく学べました。インターネットが繋がっていれば、家のパソコンでも見ることで復習ができるので便利です。
- Wi-Fiでのインターネット調べ学習もすばやくでき、とてもわかりやすい授業でした。毎日授業でパソコンを

使用することで今後必要になるタイピング能力を高められ、様々なことを経験することでスキルアップができ、良いと思いました。

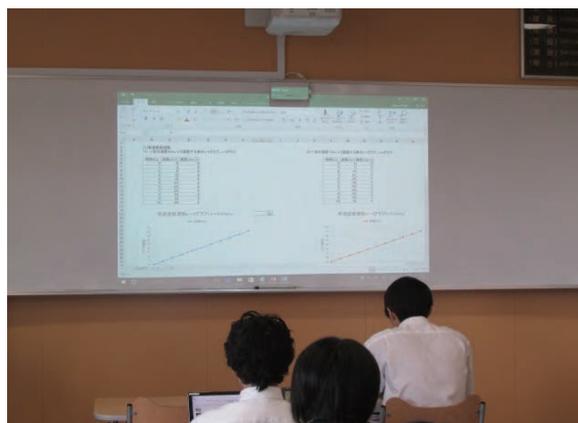
- ・PC実習室での情報授業で習ったパソコン技術を、Surfaceで実践できることが大きなメリットで、ICT活用能力など将来を見据えた力を身につけられるような気がします。

5. 今後のSurface活用の構想

Surfaceを導入して頂いたことでICT教育をさらに次の次元へ発展していくための環境を整備して頂きました。コースの特徴をより濃くするため電子教科書やCloud上でのアプリケーション等の活用を推進し、生徒の電子ノート化、学校でも家庭でもSurfaceを活用できる仕組みを構築していきたいと考えています。考査におけるCBTテスト実施も予定しており、校内だけでなく、家庭への持ちかえりを行い学習ツールとして活用できればと考えます。Surfaceを通して学習の質も高め、バランス良く考える力を育むことができるよう努めていきたいです。



(写真5) Surfaceを活用した授業



(写真6) プロジェクター投影画面

6. おわりに

教育におけるICT活用のねらいとしては、生徒の学習意欲、興味関心、創造性、発想力を高められることであり、生徒一人一人のポテンシャルを引き出せるよう生徒の目線に立ってわかりやすい授業展開に努めることが大切であると考えます。そこで目指しているビジョンとしては、時代と生徒に沿った最先端の教育環境を推進し、スピーディーにICT活用の促進とスキル向上を図り、グローバル化、高度情報化社会をたくましく生き抜き、将来社会で活躍する生徒を育成できる教育活動ができればと考えております。そのような社会で教育における「不易と流行」つまり、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値のあるもの（不易）を大切にしつつ、同時に今後も一層進展すると予測される社会の変化・時代の変化とともに変えていく必要があるもの（流行）に柔軟に対応していくことが重要であると思われまます。そして、ICT教育の中で、生徒自身の今後に生きる「自ら考え、解決し、新しいことを生み出す力」を育てていきたいです。コース設立以来、「情報社会のエキスパートを養成する」という教育目標のもと、今後も、東北復興を担う若きエンジニア育成を目指し、推進していきたいです。

7. 謝辞

恵まれた教育環境を整えて頂き、多大なる御指導、御配慮を賜りました理事長 加藤雄彦校長先生に心から感謝申し上げます。また、常務理事 加藤聖一先生はじめ佐藤正行教頭先生、諸先生方、株式会社エクシオン様にも常日頃たくさんのご支援を頂き感謝を申し上げ、結びとさせていただきます。

(2) IBディプロマプログラム TOKバイリンガル授業報告

外国語コース 石田真理子

1. はじめに

本校では、2013年2月に国際バカロレア（以下IB）ディプロマプログラムの認定を受け、次の2学年からIB授業を開始した。日本語と英語のデュアルランゲージでIBを導入し、日本では沖縄尚学高等学校と並んで初めての試みとなる。

IBプログラムには全ての教科の中核をなすコア科目があり、それはTOKと略されるTheory of Knowledge（「知の理論」）、EE（課題論文）、CAS（創造・活動・奉仕）の3つである。

筆者はTOKの授業を担当しており、チームティーチングで、英語と日本語のバイリンガルで行っており、これは世界中のIB校としても珍しい例だと推測できる。本稿は、このTOKバイリンガル授業の実践報告である。

2. 学習指導要領の変化

昨今の情報化やグローバル化といった社会変化に伴い、大きなパラダイム転換が求められる。これまで正しいとされていたことが社会的に通用するとは限らない。このような状況に対応するためには、その場その場の状況に応じて正確な判断を下せる知識とそれを使いこなすスキルが必要である。たとえ、それが教科書に書かれている内容だとしても、見方を変えれば、事実の受け止め方も変わってくることもある。自立した学習者は、固定観念を捨て、常識を疑う姿勢が身につけていなくてはならない。生徒たちは、従来のように読み書き能力とも訳される「リテラシー」を身につけるだけでは不十分であり、それを応用する力まで含んだ「コンピテンシー」が求められる。

新学習指導要領においても、指導方法の質的転換が導入され、従来とは異なる新たな学びの方法を3つ推進している。「アクティブ・ラーニング」「協働学習」そして「教科横断型授業」である。まず、「アクティブ・ラーニング」であるが、中教審（2016）で、高等教育においては、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義されている。次に、「協働学習」は、グループ単位で課題を解決していく活動であり、文科省（2015）によれば、問題を発見し、その問題を定義し、解決方法を探して解決につなげていくプロセスの中では、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）が必要である。そして「教科横断型授業」は、文科省初等中等教育局（2015）は、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となる。そのため、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要がある」としている。

日本の教育において新しいとされるこれらの教育方法は、すでにIBカリキュラムにおいては実践されているものであり、その根底にあるのがTOKの考え方なのである。

3. 「知の理論」の意義

TOKは、先に述べた通り、IBプログラムのコア科目の一つであり、「批判的に思考して、知るプロセスを探索する授業」である。知識というものについて、異なる角度やさまざまな視点から思考していく。TOKの授業は、常に次の2つの問いを出発点としている。『「私（私たち）は知っている」と言うとき、それはどのようなことを意味するのか。』という核心となる問いと、それに関連する『その知識は、何に基づいているのか。』という問いである。

TOKは、要件とされる100時間の授業時間を2年間かけて議論などを経験しながら理解していく。具体的には、IBから出題される6つの課題文から1つを選んで書くエッセイと教室内で行うプレゼンテーションを通して評価する。エッセイはIBが評価を行う外部評価、プレゼンテーションは学校の担当教師が評価を行う内部評価で採点される。TOKは、ディプロマプログラムを履修するすべての生徒にとって学習の土台となるものであるが、総合的な学習の時間や現代国語、LHRの時間などに、IB校でなくともTOKを取り入れている灘高等学校のような学校もある。

パラダイムシフトが求められる学力観の転換の中、21世紀型の学力を身につけさせるには、誰がどういう背

景で伝えたものなのか、その知識は鵜呑みにしてしまっているのか、クリティカル（critical）に考える力が必要である。クリティカル（critical）は「批判的」と訳されることが一般的であるが、対象をしっかりと見極めて評価し、よく判断することで、相手の過ちを指摘するといった日本語のニュアンスとは異なる（福田2015）。

TOKでは、構成主義の論理に基づき、授業を学ぶ知識は教科あるいは学問によって性質が異なるため、知識の組み立て方も異なり、それぞれに限界があることも学ぶ。

4. 本校の TOK 授業内容

本校が、IBDPをデュアルランゲージで開始してから3年が経過した。昨年卒業した1期生は8名で、国籍の構成は、シンガポールとのハーフとマレーシアからの帰国子女を含む日本人6名と中国人2名であった。現3学年である2期生も8名でフィリピンとのハーフを含む日本人4名とインドネシア人2名、韓国人1名、ウガンダ人1名である。そして現在2学年に在籍する3期生は19名でカナダとのハーフを含む日本人が14名、インドネシア人1名、中国人3名、セネガル人1名である。

いずれの学年も留学生と日本人の生徒が混在して多様な生徒構成になっており、複雑なTOKの考え方を理解するためには、英語だけあるいは日本語だけでの授業では対応するのが難しいため、本校ではアメリカ人と日本人（筆者）の教員でチームティーチングを行うことにした。

やり方としては、活動や議論をさせるために説明する際、英語で伝えた後、日本語でも伝える方法である。それは単なる翻訳ではなく、例を挙げるときに、英語では英語圏としてわかりやすい例を挙げ、日本語では日本人の生徒になじみのある例を挙げるもので、それぞれの文化に即して理解しやすいようにするものである。本校が使用しているデジタルポートフォリオのmanagebac（マネージバック）で生徒に課題をアップロードするときも英語と日本語両方で指示を載せている。



本校 IB プログラム TOK の授業風景

5. バイリンガル授業の効果と課題

TOKにおいてこのようなバイリンガル授業を行うことで、3つの効果が得られた。

まず、生徒たちは日本だけ欧米だけの狭い文化の中だけで考えなくなる点である。どちらの言語の説明も聴くことで、自然に異なる文化の理解の仕方も知ることになり、グローバルな視野を持つことになる。

次に、身近なこととしてTOKの概念を理解できる点である。日本人の生徒は、欧米の例で示されてもなんとなくわかったような気がする程度の理解しか得られない場合が多いが、日本語での例を挙げて伝えると、なるほどとストンと心に落ちる。母国語で伝えられることで、自分のこととしてとらえやすくなるのである。

そして第三の効果としては、英語運用能力の向上である。議論の際にはどちらの言語も使われるので、日本人の生徒は英語力が伸びていく。

一方、バイリンガル授業の展開には、問題点もある。

まず、教員側の準備は相当の時間を要する。通常のチームティーチングにおいても同様であろうが、TOKの授業の場合、伝え方や事例を吟味するため、教材を探すことも含め、準備の話し合いにはかなりの時間を費やしている。

次に、英語で伝えた後に日本語で伝えるため、授業の時間も長く必要になる点が挙げられる。100時間の授業計画の中で、さまざまな活動を盛り込み、多くのTOKの用語や概念を身につけさせるので、時間が2倍要するバイリンガル授業の実施はかなりの検討を加えながら計画を立案している。

さらに、TOKの概念はキリスト教基盤の欧米の考え方が根底にあり、日本の文化にどのように落とし込むかは毎回相当頭を悩ませている。また本校の場合、英語を使用する生徒の多くは英語が母国語ではないため、複雑

な概念を理解させるのが難しく、またエッセイを書くときにも深い思考をうまく文に表すことが困難なこともある。

6. おわりに

現在のところ、本校における次年度のIB希望者は30名に上り、パイリンガル授業を続行するか、それぞれの言語で行うか、検討中である。

本稿で紹介したように、自分たちで課題を見つけ、それを発表し、議論する探求型学習のIBDPの授業において、アクティブ・ラーニングは自然なことである。教師は講義的に生徒に教えるのではなく、ファシリテーターの役割を担う。生徒が教わったことを丸暗記するような学習方法ではない。生徒たちは、TOKをベースとした教科横断型の授業で、さまざまなものの見方を理解していく。その際、協働学習としてグループで考えた内容を発表し、また議論をしてさらに考えを深めていく。

この授業形態は、まさに新学習指導要領で目指すところであり、今後TOKがさらに日本の高等学校にも導入されていくのではないかと考えられる。

引用文献

- エリン・メイヤー（2015）田岡恵監訳 樋口武志訳『異文化理解力—相手と自分の真意がわかるビジネスパーソン必須の教養—』英治出版
- キャロル・犬飼・ディクソン、森岡明美、井上志音、田原誠、山口えりか（2017）『「知の理論」をひもとく Unpacking TOK』伊藤印刷出版部
- 中央教育審議会（2016）「次期学習指導要領にむけたこれまでの審議のまとめ（素案）のポイント 中央教育審議会教育課程企画特別部会 資料1 [PDF]
- 中央教育審議会（2016.12.21）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- 福田誠治（2015）『国際バカロレアとこれからの大学入試改革—知を創造するアクティブ・ラーニング』亜紀書房
- 国際バカロレア機構（2014）『「知の理論」（TOK）指導の手引き 2015年 第1回試験』pp.5-9
- 国際バカロレア機構（2014）『国際バカロレア（IB）の教育とは？』
- 松尾知明（2016）『21世紀型スキルとは何か—コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較』明石書店
- 文部科学省（2009）「教育の情報化に関する手引き」作成討論会（第4回）配付資料
- 文部科学省（2011）「国際バカロレアについて」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1307998.htm（2018/01/12取得）
- 文部科学省（2015）初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室「学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364319.htm（2018/01/14取得）
- 文部科学省（2015）初等中等教育局初等中等教育企画課教育制度改革室「新しい学習指導要領等が目指す姿」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm（2018/01/14取得）
- 大迫弘和編（2004）『国際バカロレアを知るために』水王舎
- Sue Bastian, Julian Kitching, Ric Sims, 後藤健夫、大山智子（2016）『セオリー・オブ・ナレッジ—世界が認めた「知の理論」—』

(3) 平成29年度Brush Up研修会報告

教科教育センター長 板垣 徳昭
教科コンダクター 堀田 文雄 (国語) 伊藤 需 (英語)
梅田 一成 (数学) 野田 良彦 (理科)
情報Brush Up研修会担当 日野 彰 板垣 徳昭

1. 初めに

Brush Up研修会は、コンサルタントの模範授業や教員の公開研究授業をとおして、個々の教員の授業力向上を図るとともに、生徒への講話・集中講義をとおして生徒の教科への意欲、興味・関心、学力を醸成し、さらには大学受験に対応できる実力を養成することを目的とする。

研修会は、国語、英語、数学、理科、情報の各教科で年間2～9回実施し、研修の内容については、研修Ⅰ（公開授業）、研修Ⅱ（モデル授業、講話）、研修Ⅲ（教員研修）の3本立てとしている。（最終章「7. 平成29年度Brush Up研修会実施一覧」参照）

今回は、各教科1年間の実践の中から、意欲的な授業の取組をそれぞれ報告したい。該当教科のみならず、多くの先生方の授業の改善に資することができれば幸いである。

2. 国語 実践報告

報告者 堀田 文雄

◇ 概略

国語ブラッシュアップは、八年ほど前までは生徒の学力向上、受験対策についての取り組みを主に行ってきた。それ以降は、加えて教員の指導力向上のための取り組みの割合を増やして行っている。

生徒を主とした取り組みは多方面にわたっており、センター試験対策、二次試験対策、ことばと国語学習、文学の基礎、文章の構造、自己推薦書の書き方、面接試験に臨む心構え等について講話、モデル授業を行ってきた。

教員の指導力向上については、研究授業、公開授業、授業巡回、教員個別面談を行ってきた。公開授業については、ベテラン教員と若手教員の組み合わせ、同じ教材による二人の教員の授業公開のこころみ等も行った。教員個別面談においては、コンサルタントのアドバイスによる、教員の教室での指導改善、指導力向上の速効性を念頭に取り組みを行った。

◇ ブラッシュアップコンサルタント

本学園のブラッシュアップ事業立ち上げから、20年を超えて教育顧問を担当なされ、29年5月に任を退かれた加藤昌雄先生は、東北大学文学部、文学研究科において日本の歴史、思想史を専攻された。仙台の高校の教壇に数年立たれ、その後長く東京の予備校の講師をなされた。予備校講師を終えられた後は、英文書籍の出版、教育研究の事務所の運営に当たられた。さらに複数の新設受験校の依頼により、現在まで高校生の受験指導に当たられている。以上の経歴を生かした講話、教員指導は、本学園の生徒の学力向上、受験生の進路達成、国語科教員の指導力向上に裨益するところ大なるものがあつた。講話やモデル授業の際には教室や講義室で短時間のうちに生徒の特色を把握し、その生徒たちに適した授業、講話の展開を行い、生徒の心を引きつける、内容ある話をなされていたのは、わたしたちがとりわけ範としなければならないものである。

29年度9月から教育顧問を担当なされることとなった植松義治先生は、早稲田大学文学部、同文学研究科において、日本思想、中国哲学を学ばれた。その後予備校の講師をなされ、現代文、古文も担当されたが、現在は東京、神奈川、埼玉の校舎で東大受験生クラスの漢文の授業を担当なされている。また、全国模試の作成に当たられている。植松先生は読書家であり、専門の日本思想、中国哲学に関する書物の他、授業方法に関する書物、哲学・論理学に関するもの、歴史書等、多岐にわたって読書なされている。教員が話題提供の中で口にした事柄についても、何々文庫の何々にそのことの記載があると、即座に指摘されるように、知識についての記憶も大変優れていらっしゃる。こうした植松先生がお持ちになっている特質を生かして、本学園の研修では、生徒に対しては現代文、漢文に重点を置いて学習、受験指導をしていただき、教員に対しては、たとえば、今年度の植松先生にお願いした5回のブラッシュアップの話題提供の中で、予備校の授業、全国模試の作成方法、採点方法、予備校生の動向等をお伺いしたが、これらは在仙予備校主催のセミナーで聞くよりも実質がよく分かるものであったことから、こうした点に関する情報や国語科教員の基礎体力となる学識・教養面、さらに実践面では授業の工夫等にわたってご指導を受けたいと考えている。

◇ 本年度ブラッシュアップ

本年度はコンサルタントの交替によって、予定がずれ、また、回数が1回少なくなり、そのうえ10月23日実施予定のブラッシュアップが台風によって中止となり、30年2月に振替になるなどして、国語科教員の研修は目的、計画において十分なものはならなかったと考える。それは、教員個別面談の回数が減少していることからもうかがい知れる。9月からの主たる目的の一つは、コンサルタントの植松先生に学園の施設設備はじめ授業、生徒の様相、特徴を理解していただくことと、植松先生にどのように力量を発揮していただくことができるか、こうした点についてよりよい方向に定着をはかることであったが、それはかなりふさわしく実現されたと考える。植松先生は教員個別面談において、教員の問題点に関して理解と共感を示され、アドバイスとともに、関連した書籍を紹介されている。今後の教員個別面談を通じた教員指導が期待される。

講話は、演習形式によっておこなわれ、現代文の分野は秀光2年生（前期）と外国語2年1組を対象に、文の接続と呼応を骨組みに日本語の文の構造について生徒に意識を持たせた。生徒は興味深い例文（問題文）に関心をもちつつ、熱心に取り組んでいた。また、教員の関心をも引いていた。

漢文の演習は植松先生の独自の手法によって行われ、最初に傍線部の問いに関して、先生作成の別紙プリントによって問いの要点を押さえ、さらにそれに関して、同類のものの演習を行いながらすずめ、問いをすべて解いたうえで、問題文の現代語訳を読ませてから、解釈を行いながら、問い以外のポイントを説明していくというものである。説明の中では拡大説明も行われた。このように、出題ポイントと、本文解釈を分けて演習を行うと、生徒、受験生は問いの解法に慣れ、自信を持つことになると考えられる。2年生から漢文について複数回演習を繰り返せば、相当の実力の定着がはかれることと思われる。（塾、予備校の1、2年生の授業では古文はごく少なく、漢文はほとんどやられていないとのことなので、学校での演習は大事になる）

◇ 国語科教員の課題

(1) 宮城野校舎では前年度末に、エプソン電子黒板の使用法についての研修を行ったが、今年度も6月に、情報科学コース、特別進学コースでエプソン電子黒板を使用した授業に関して公開授業を設定した。授業者に協力を依頼し、複数日、数時間を設定し、授業見学の機会を多くした。また、各教員の使用状況についての調査を行った。

情報科学コースの公開授業には目を見張るものがあり、他コースの教員にとっては驚愕的なもののように感じられる内容であった。授業は、小説の教材について、読後のまとめをグループで行うものであったが、使用されているサーフェスの機能によって、生徒、教員間のデータの同期がスムーズであり、それによって、生徒の作業内容、教員のアドバイスは、キャッチボールのように行き来し、生徒の参加が実感できるアクティブラーニングの成立に、電子黒板とサーフェスのはたらきは極めて有効であった。情報科学コースの生徒は1年生の7月の段階であっても、コンピューターの扱いに慣れていて、「好きで得意なことをしている」という雰囲気での授業に参加していた。情報科学コースの生徒にとっては、とりわけ理想的な授業形態であると感じられた。

東京書籍では、本年度1年生教科書の指導書を皮切りに、次年度以降2、3学年用に電子黒板用ソフト、データ・コンテンツを提供してくる。情報科学コースの国語総合古典の公開授業では、それが使用されて、教科書のページがそのままホワイトボードに映し出され、教師と生徒は教材の「同じもの」を見ることによって、両者の隔たりはほとんどなくなるようになっていた。これまでの教科書を使う授業では、生徒が教員の指示を受けとめ指し示された箇所を把握しているのかは、分からないが、それに対して、指示されたホワイトボード上の箇所を生徒が見ているか見ていないかは、一目瞭然のことである。

電子黒板ソフトを使用した授業形態の考察を進展させていかなければならないと考える。

(2) 29年度大学入学共通テストプレテスト及び概要を宮城野校舎国語科教員に配布し、第1問～第5問のうち、1問を選択し、その問いについての見解を述べてもらった。その「まとめ」は本学園国語科教員全員に配布した。

研修のねらいは、大学入学共通テストへの認識の強化、当該テストの初年度受験生である30年度1学年生徒に対する早期からの指導の必要性によるものである。さらに、1学年生徒のみならず、2、3学年生徒に対する学習、受験指導においても重要である。なぜならば、昨年11月にプレテストが実施され、そのあと30年1月のセンター試験国語の問題には、プレテストに見られた知識の拡大の要求とともに、推察力が必要とされる問いがこれまでより多く出題されているからである。第1問（評論問題）では、明らかにプレテストを継承した問題文の設定、設問形式となっている。プレテスト第1問（記述問題）のコミュニケーション形式、第2問（評論問題）での、図の使用である。さらに、センター試験第3問（古文）本文の本居宣長による漢詩へのイデオロギー攻撃は、プレテスト第3問（小説）、第5問（漢文）の問題文および設問において構造をなす価値観の対立の類型である。このように、プレテストで示された設問方法は31、32年度センターテストにも形を表してくると思われる。そのために、30年度センターテストの分析とともに、29年度、30年度大学入学プレテストのねらいの把握は、極めて重要なものとなっている。その十分な理解のもとに、2、3学年生徒に対するセンター試験指導、1学年生徒に対する大学入学共通テストの指導を行っていかなければならない。29年度プレテストからうかがえる、受験生生徒に必要なものは、知識の定着と拡大とともに、探究上の対比性を読み取る弁別能力についての、※機敏さと明晰さ ※注意深さ ※的確な整理能力 ※推察力の深化である。

3. 英語(1T5、11月7日の実践例)

報告者 伊藤 需

◇ 当日日程

13:55-13:40 公開授業

特進コース1年 6校時目(13:55～14:40)

授業者:安部 宏紀 教諭(1T5: コミュニケーション英語Ⅰ)

16:00-17:00 英語担当教員との研究協議

研究協議題:(1) 本日の授業について

(2) 生徒の意識と授業改善(話題提供:柳田 政美 教諭)

指導助言:坂井 一任 先生(英語科コンサルタント)

◇ 公開授業

特進コース1年生のC英語の研究授業であった。今回の授業は、新しい課「うま味」の導入レッスンということで、生徒にレストランに行ったときに、「値段」と「おいしさ」のどちらが大事だと思うかということで、6人ずつのグループに分かれてディスカッションさせた。予め、プリントで生徒たちに準備させていたので、比較的スムーズに話が出たが、それぞれのグループでどちらにするかという結論を出すのが難しかったようである。最後に、各班の結論をその理由と共にホワイトボードに書かせて、クラス全体で情報を共有した。その後、ICTを用いて、新出語の発音と意味の導入、そしてパート1の英文についてペアでの音読練習に入った。この時に、パートナーに音読の時間を計らせて、1分間に英文をどれくらい読めるか(WPM)に挑戦させていた。生徒たちは意欲的に音読に取り組んでいた。最初の活動が長引いて、その後の日本語訳の活動はできなかったが、新たな問題提起という意味で有益な研究授業であった。

◇ 授業自評(安部宏紀教諭)

1T5はアフリカからの留学生が二人いることもあり、男女ともに積極的に英語を使おうとする姿勢が見られるクラスである。今回は、新しい課の導入部でもあり、内容への意欲関心を高めるため、生徒たちに「値段」と「おいしさ」のどちらを重視するか、そしてその理由とはということで、ディスカッションしてもらうことにした。途中で、だいぶ日本語も入ってきてしまったが、各グループともそれなりの理由付けはできていたのではないと思う。この活動の後に、最初は口頭でクラス全体に発表してもらうだけと考えていたが、各班の結論・理由をホワイトボードに書いてもらうことにした。そのほうが皆によく理解してもらえるのではないかと考えたからである。しかし、その分、時間が足りなくなり、音読の時間、日本語訳の時間が十分取れなかったのは残念であった。

◇ 研究協議

本日の授業に関しては、最初のディスカッションについて、参加者の関心が高く、様々な意見が出された。「口頭による発表だと他の班の人たちにうまく伝わらないこともあるが、ボードに書いてもらったので主張がよくわかった。」という感想があった。また、「討論となると、ある程度の定型表現を覚えておくともっとよかったのではないか。」「各班の結論・理由に対する先生からのつっこんだコメントがほしかった。」という意見もあった。「明らかな誤りも見られたが、誤りの訂正はどうしているのか。」という質問もあったが、アウトプット活動においては、少々の誤りは許容して、どんどんと話したり、書かせたりすべきだという結論に達した。様々な機会をとらえて、生徒の関心がある問題、賛否が分かれている問題などについて、じっくり考えさせ、自分の意見をまとめ、発表させるべきであろうと確認し合った。

後半は柳田先生から「特進生徒英語学習のアンケートから見えてくるもの」ということで話題提供してもらった。これは、特進2年生3クラス対象のアンケートを基にしたものであったが、やはり「話すこと、聞くことが苦手(62%)」という結果が出たが、比較的好きだ、得意だという生徒が多い。「読むこと・書くこと」を生かしながら、それをどう克服させるかということで意見が多く出た。コンサルタントの坂井一任先生からは、「内容理解後の音読の重視、使える語彙を増やすこと、英英辞典の活用を勧める。また、ただ話すだけでなく話す中身が大事である。そのためには、インプットをしっかりやらせること、特に題材に関して日本語でも構わないからしっかり読書させることが肝要だ。」という助言をいただいた。最後に参考図書(「日本語に主語はいらない」「採点者の心をつかむ合格する小論文」)の紹介もあった。

<総評>

今回のディスカッション(討論)という活動を参観して、改善の余地はまだあると思うが、これを発展させていけば、自分の本音とは違っていても、その立場になりきって議論する「ディベート」等のより高度なアウトプット活動も可能なのではないかと感じた。こちらの仕掛けを工夫し、周到的な準備をさせればという条件はつくが、それも不可能ではないと実感できた。これが今回の研究授業の一番の収穫だったかもしれない。

ICTの活用に関しても、今回は新しい語彙の導入、英文の音読の補助として用いていたが、それだけでなく、

既に様々な形で利用している先生方もいることがわかったので、デジタル・ネイティブである生徒諸君の学習への意欲・関心を高めるため、そして更なるコミュニケーション活動の活発化のためにも、その情報・ノウハウを共有していきたいと思う。

英語に関しては、なんとしても4技能の力を伸ばしてやらなくてはならないという状況が現実にある。4技能の力が評価される外部試験受験の必須化はもう待たない時である。我々英語科の教員がより具体的な、大胆な授業改善に着手しなくてはならない時である。その意味でも、次年度はこのようなBU研修が全員参加の形で実施され、お互いが積極的に情報を共有し合い、自らの授業を大きく改善していく一助となることを心から祈りたい。



4. 数学(2GIB、7月14日の実践例)

報告者 梅田 一成

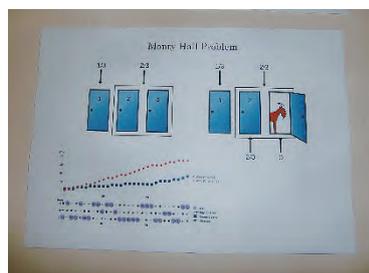
◇ 当日の日程等

- ①日時 平成29年7月14日(金) 13:00~17:15
- ②出席者 (コンダクター) 梅田一成、(教諭) 小林祐樹、阿部広美、小川彰、渡邊正孝、遠藤良長、狩野常俊、(嘱託講師) 菊池友也、高橋康太
- ③会場 多賀城校舎
- ④目的 公開研究授業、及び職員研修により教員の授業力と進学指導力向上を図る。
特に、今回はIB教育について理解を深めることを目的とする。

◇ 実施内容

(1) 研修1 公開研究授業 13:35~14:25 (50分)

- 授業者 小林 祐樹 先生 (IB数学担当)
- 対象生徒 2学年IB受講生徒 (15名)
- 会場 2GIB教室



○内容

8色ダイスの確率の問題で前時を振り返った後、数学とTOK (Theory of Knowledge) が融合したモンティホール問題 (The Monty Hall Problem) を取り上げていた。モンティホールの矛盾 (The Monty Hall Paradox) と呼ばれる直観と結果が異なる問題である。日本、中国、カナダ、インドネシア、セネガルなど国際色豊かな生徒たちが3班に分かれ、真剣にディスカッションを行い、それぞれの代表が堂々と発表した。授業時間内に作成した発表用パワーポイントも充実していた。日本人だけによる班が実験を通して正解に到達していた。次回の学習内容である誕生日問題 (Birthday Problem) の予告をして授業を終えた。

(2) 研修Ⅲ 職員研修 16:30～17:15

○会場 2GIB教室

○内容 「IB教育の可能性と今後のビジョン」～国際バカロレア教育プログラム (International Baccalaureate Diploma Programme: IBDP) のメリットについて～

というタイトルで話し合いを持った。担当の小林先生の報告によると、IB教育により校内模試の偏差値は49.5、57.1、64.5と大幅に伸びてきている。大学入試において、国際バカロレアを活用した事例が報告されたが、国公立大学のウェートが大きくなってきている。70%club委員会でも指摘されたように、IBスコアで大学に行かせる方策を考えていきたいとのことである。



◇ 授業者の自評及び感想

- (1) 研修会でも触れたように出身国によって学習内容が異なり、また学習到達度も異なる生徒を一斉授業で扱っています。基本的に、現在数学はSL (Standard Level) を日本語のみで行っていますが、今後IB受講生徒数が増加し多国籍の生徒が多くなってくると将来的に数学はSL (Standard Level) とHL (High Level) を実施し、授業の言語も日本語と英語を将来的には考えていかなければいけないと思います。更に、前述の到達度を考慮した習熟度別のクラス編成ができれば、なお学習成果が期待できると思います。
- (2) 今年度がスタートして早や4か月が経過し、生徒はクラスに慣れてきてお互いに“教え合い”がみられるようになってきました。授業のグループ学習が朝や放課後の学習に良い意味でつながってきていると思われる。様々な国籍の生徒が集まるため、自分の意見をはっきりと話す環境にあります。自己主張が強いいためか、時には意見が食い違い、意見の衝突もありますが、基本的に相手の文化や習慣をできるだけ理解し、傾聴しようとする姿勢が感じられます。特別進学コース出身の生徒がクラスのリーダー的存在をつとめて、クラスをまとめています。
- (3) ICT (情報通信技術) を活用した授業展開を意識しています。生徒が容易に理解できるよう、プロジェクターを使用した視覚に訴える授業展開を意識しています。また、試験のPaper2においても関数電卓 (Graphic Display Calculator: GDC) を使用するため、授業にも取り入れて実施しています。今後の課題やICT活用、クラスの様子を十分話すことができなかつたため報告させていただきます。

◇ 出席者の感想及びQ & A

- Q. アクティブラーニングとインプットの割合はどのくらいか。
- A. 理想は100%アクティブラーニングを取り入れた授業が望ましいですが、なかなか現状では難しいです。通常の講義形式の授業にアクティブラーニングを取り入れた授業を可能な範囲で取り入れているのが現状です。ディスカッションや発表などを取り入れることによって生徒の理解が更に深化することを期待しています。
- Q. 日本人の生徒は英語で書かれた数学の教科書を読んでどのくらい理解できるのか。
- A. IBを受講している生徒は数学のテキスト程度の英文でしたらほとんどすべて理解していると思われます。過去のIB試験問題は昨年本校が受験した試験以外すべて英語です。過去問題を授業に取り入れています。ほぼすべて英語表記です。生徒はそれを解いてきます。したがって、数学のテキストレベルの英文でしたらほぼすべて理解していると思います。
- Q. IB数学を受講するために必要となる学力はどのくらいか。そのために、1年次にどこまで彼女たちの学力を伸ばす必要があるか。
- A. 数学Iと数学Aの基礎・基本問題をしっかり理解していれば問題ないと思われます。標準問題まで解ければなおいいですね。数学のスタンダードレベル (SL) は数学のハイレベル (HL) と異なり、基礎・基本問題がIB試験で問われます。また、数学の他分野や、他教科との統合問題もよく狙われますので、教科に偏った知識だけではなく広い知識が問われる傾向にあると思われます。
- Q. 生徒がIBやIB数学のクラスに望んでいることは何か。
- A. 最終的にはIB試験に合格してフルディプロマを取得し、希望する大学に進学することだと思います。その

ためにも、今の1・2年の低学年から進路意識を高めるためオープンキャンパスへの参加を奨励しています。

- Q. もし将来私がIB数学を教えるのならば、生徒の主体性を引き出す授業展開をするため、私自身研修を受ける必要があると感じました。
- A. 本校で3月に行われたようなIBワークショップは定期的に行われています。また、インターネットを使用したオンライン・ワークショップも受講することができます。今後、IBクラスに数学を教える時にはワークショップへの参加はもとより、授業研修会や他校のIB校を見学に行くなど先生自身がブラッシュアップして授業にのぞまれるとよいと思います。

◇ その他

①コンサルタントの講評及び感想……コンサルタントの従事なし

②コンダクターの総評

アクティブラーニングのお手本のような授業でした。小林先生にはたくさんの資料を基にIB教育について具体的に詳しいご説明をいただき、充実した研修会になりました。

③その他……研修会終了後、参加者とメールでやり取りしたことも併せて掲載しました。

5. 理科(1T1、5月10日、1G1、9月6日の実践例)

報告者 野田 良彦

◇ 概要

本年度も8回実施(予定も含む)。そのうち理科コンサルタントの鳴瀬先生が担当されたブラッシュアップが3回(5月10日=特進、5月31日=英進、7月12日=秀光)、それ以外が3回(4月19日=フレックス、9月6日=外国語、10月25日=情報)、仙台河合塾の物理専任講師の渡部先生が担当するブラッシュアップが2回(12月5日、6日に実施予定)それぞれ行われた。今回はそのうち5月10日に実施された特進の授業(化学 黒田果林教諭担当)と9月6日に実施された外国語の授業(IBの生物 フィリップ教諭担当)について紹介したい。紹介のポイントとしては次の2点である。

①本年度より教室に装備されたプロジェクターを利用した授業について

②外国語コースで実施2年目を迎えるIB(国際バカロレア)の授業について

なお、参加者はすでに実施した6回のブラッシュアップで延べ55名である。

◇ プロジェクターを利用した授業(5月10日(水) 10:35~11:20 1T1組 36名)

本年度より、全コースに最新式のプロジェクターが教室に装備された。各教室のホワイトボード上部に設置され、HDMIを使うと画像だけでなく、音声も再生されるので動画の再生など簡単にでき大変便利な装置である。

特進の黒田先生は今回1年生の化学基礎の授業でパワーポイントを使って「混合物の分離・抽出など」と「元素記号・周期表」についての講義を行われた。授業では講義内容をまとめたプリントを生徒に事前に配りポイントとなる内容をパワーポイントで確認しながら記入させる方法で行われた。アニメーション機能を上手に使うことで動きのある展開で非常に刺激のある授業であった。



放課後行われた研究協議会では授業者の感想及び参加者から次の様な意見が出された。

(黒田先生より)

- ・教室にプロジェクターが入ったので、当初はアクティブラーニングを行おうと思ったがまずはICT的な授業を実施することにした。パワーポイントのアニメーション機能は好評だが、制作に時間がかかることが欠点。
- 又、生徒によってはプリントよりもノートに書く方が良いと言う生徒もいる。

(鳴瀬先生より)

- ・面白いと感じた。私も教科書会社から依頼を受けてパワーポイントを作成中である。ただ、生徒が興味を持っていても従来の授業と新しい形式の授業をうまく使い分けた方が知識の定着が図れると思う。

(その他の先生より)

- ・電子黒板(プロジェクターについている機能)の効果的な利用は今後の大きな課題である。
- ・映像は最初良いが生徒はすぐに飽きてしまう。(3-5分が限度)

◇ IB(国際バカロレア)における理科教育(9月6日(水) 11:05~11:55 1G1組39名)

教科名は「科学と人間」であるが、内容的にはIBの生物の初歩的内容を行っている。(生物における概念、細胞についての基礎知識)

クラス39名中9名が海外からの留学生で構成されている。授業は1学期で終了する2単位の授業で、週4時間の授業を日本人の教員(庄司先生)とフィリップ先生が2時間ずつ交代で行っている。フィリップ先生は日本語

も堪能だが、基本的に授業はすべて英語で行われる。今回の授業は1学期末考査直前の授業で、考査の内容についてゲーム形式で行うという非常にユニークな内容であった。クラスを4-5人のグループに分けグループ毎に質問に対する答えを求め、正解ならば点数を与え最後に順位を競うといった方法で授業が進んだ。

放課後行われた研究協議会では授業者の感想及び参加者から次の様な意見が出された。

(フィリップ先生より)

- ・アメリカで人気のクイズ番組「ジェパディー (jeopardy = 危機)」の仕組みを使って、今回の考査の範囲の復習を行った。今まで学習したことを復習するため質問を6つのカテゴリーに分け、質問の難易度に合わせて一番易しい100\$から一番難しい500\$までグループに順番に選んで答えさせた。
- ・試験は庄司先生が50点(日本語)。私が50点(英語)で行っている。前回の平均点は60点台。生物の基本的な知識は覚えさせている。

(先生方より)

- ・日本の授業と異なるやり方で面白かった。
- ・視覚情報を与えると印象づけられて覚えやすいと感じた。
- ・生徒はおとなしいと感じたが普段はどうなのか(フィリップ先生より「普段はもう少し積極的な発言がある」との回答)

(最期にアクティブラーニングについてフィリップ先生から)

- ・アクティブラーニングは単純な解答を求める授業ではないので、考えさせる授業を行っている。例えば「生卵を2階から落としても割れないようにする工夫」の実験を5月頃グループでさせたことがある。



6. 情報(1J2、2J3、10月26日の実践例)

報告者 日野 彰

◇ 公開研究授業(10月26日)

(1) 公開研究授業①

- ①時間 5校時(13:30~14:20)
- ②会場 WIN1室(南冥4階)
- ③授業者 志賀貞昭先生、実習アシスタント 弓座恵津子先生
- ④対象 1J2組生徒(31名)
- ⑤内容 MOS Excel2010における視覚的なデータの表示において、ワークシートのデータを使用したグラフ作成、特に適切なデータ範囲を選択したグラフ作成、グラフ作成後のデータ範囲やスタイルの変更等について理解させる。
- ⑥評価 内容の習得に意欲的・集中的に取り組み、機能の必要性を理解しているか。
- ⑦考察 MOS Excel2010を今年度4月より指導しており、ひととおりの解説は終了している。生徒は1年生ながら、半年間でパソコンスキルは上達し、理解習熟度は高くなってきている。授業の進み具合、説明した後の生徒への働きかけも良く、考えさせる時間を取り、実習操作の補うべき点、重要な関連事項も丁寧に解説していた。実習アシスタント教員も個別にきめ細かく丁寧に指導していた。

(2) 公開研究授業②

- ①時間 6校時(14:30~15:20)
- ②会場 WIN1室(南冥4階)
- ③授業者 村上淳先生、実習アシスタント 青木京子先生
- ④対象 2J3生徒(29名)
- ⑤内容 MOS Word2010におけるコンテンツ全体の書式設定及びページ内の検索・移動やインデント、タブが設定できるとともにそれぞれの役割を理解し、活用できるための知識・技能を習得させる。
- ⑥評価 内容の習得に意欲的に取り組み、機能の必要性や有用性を理解しているか。
- ⑦考察 MOS Word2010を今年度11月より指導している。生徒のパソコンスキル理解習熟度は高く、授業中も集中して説明を聞き、内容をよく理解して実習に取り組んでいた。授業の進み具合、生徒への働きかけも良く、授業に集中できる教室環境を育てていた。生徒の実習操作の補うべき点、重要な関連事項も丁寧に解説していた。実習アシスタント教員も個別にきめ細かく丁寧に指導していた。



5 校時授業



6 校時授業

◇ 感想、意見、講評など

- ・内容説明を普段と視点を変えて解説することで生徒に深く考えさせる授業は良かった。
- ・教員がパソコン操作の実演を行い、生徒に実習させていることは良かった。
- ・実習を主とする教科は個人の理解度、習熟度の差が学習を進めるにつれ開いていく。生徒個人差への対応を工夫し、理解できるよう指導している。
- ・内容の説明時、声が大きく授業の重要ポイントを細かく丁寧にわかりやすく説明していた。
- ・普段の生活でエクセル、ワードを使用した場合を考えての内容説明はわかりやすく、生徒の興味関心をもたせられると感じた。
- ・パワーポイントで授業説明し、生徒にテキストを音読させるなど授業にアクセントをつけていることが良かった。
- ・授業全体の流れを大事にし、生徒全員の实習完了を見極めてから次に進むことが大事だと思った。
- ・教えられる生徒の視点に立って授業展開することが大切なのではないかと思う。
- ・教員が生徒に問いかけ考えさせながら実習させる双方向の授業展開は良かった。
- ・教員がパソコン操作の実演を行い、生徒に実習させる展開は良かった。
- ・授業は声も大きくわかりやすい解説で、生徒も集中しやすい雰囲気であった。
- ・パソコン操作は教員がいてテキストがあればできるのだが、生徒一人になっても自分でできるように指導することが教員の役割で目標だと思う。
- ・学習するゴール、到達度目標を明確にすることが重要である。
- ・パソコン操作は基礎からの基本が大事で、基本をしっかり指導することが大切である。

7. 平成29年度Brush Up研修会実施一覧

教科教育センター

月毎一覧表

教科	回数	開催月日・曜日	対象学校・コース	研修			教育顧問 従事の有無	月	日	曜	教科	対象学校・コース
				研修Ⅰ 研究授業	研修Ⅱ モデル授業・集中講義・講話	研修Ⅲ 職員研修						
国語	1	4月12日(水)	特秀	巡回	3T,6M,17年センター試験解法	入試問題の作成、傍線部箇所の検討の付け方など電子黒板を用いた授業の研究	有	4	12	水	国1	特秀
	2	7月10日(月)	特秀情	○	*		無		18	火	英1	秀光前期
	3	9月5日(火)	特秀情	巡回	2T,5M,漢文現代語訳研究	全国模試の作成過程、記述の採点など	有		19	水	理1	外英フ技
	4	10月17日(火)	秀前期	巡回	2M,接続詞副詞助詞を核とした文の構造	現代文の教材、問題文について	有		21	金	数1	秀光
	5	11月14日(火)	外英フ技	巡回	2G,文の構造	基礎学力の定着について	有	5	10	水	英2	英フ技
	6	12月13日(水)	特秀	巡回	3T,6M,センター試験解法	授業法の研究	有		10	水	理2	特進
	7	12月19日(火)	特秀情	*	*	平成29年度大学共通テストプレテストの検討と指導の展望	無		12	金	数2	外英フ技
	8	2月20日(火)	特	巡回	2T1,2,漢文現代語訳	授業法の研究	有		23	火	英3	外
英語	1	4月18日(火)	秀光前期	*	1・2M,入門期指導－英語のしくみ	アクティブ・ラーニングへの取り組み	有	6	31	水	理3	外英フ技
	2	5月10日(水)	英フ技	○	*	基礎学力向上と指導の工夫	無		23	金	数3	特情
	3	5月23日(火)	外国語	○	*	アクティブ・ラーニング等による指導の工夫	無		26	月	英4	特進
	4	6月26日(月)	特進	*	3T,大学入試問題の長文読解と英作文指導	作文・英文読解指導	有	7	4	火	英5	秀光
	5	7月4日(火)	秀光	*	5・6M,大学入試問題の長文読解と英作文指導	読解・英作文指導について	有		10	月	国2	特秀情
	6	9月22日(金)	外国語	*	2G,英語のしくみ・大学受験に導く授業の在り方	英語の指導法について	有		12	水	理4	秀光
	7	10月5日(木)	秀光	○	*	自律的学習者の育成、英語指導上の課題	有		14	金	数4	外国語
	8	10月24日(火)	英フ技	*	2A,英語のしくみ・読解と英作文	英語力向上と指導の工夫	有		26	水	情1①	情英フ
	9	11月7日(火)	特進	○	*	生徒の意識と授業改善	有		26	水	情1②	法人局
数学	1	4月21日(金)	秀光	巡回	6M,「センタ試験の解法」	センタ試験3年めの傾向と対策	有	8	25	金	数5	特進
	2	5月12日(金)	外英フ技	○フ	3A,「数学Ⅰ文字を含む二次関数の解法」	基礎学力の定着について	有		5	火	国3	特秀情
	3	6月23日(金)	特情	*	①3J,「数学ⅠⅡの解法」 ②3T,「センター試験解法」	新テストの傾向と分析について	有	9	6	水	理5	外英フ技
	4	7月14日(金)	外国語	○外	*	IBの学習とAL	無		22	金	英6	外
	5	8月25日(金)	特進	巡回	*	平成32年度からの大学入試	無	10	5	木	英7	秀光
	6	10月6日(金)	秀光前期	○秀	3M,「高校数学問題の解法について」	自立した学習者の育成	有		6	金	数6	秀光
	7	10月20日(金)	特秀	*	①2T,「センター試験の解法」 ②5M,「センター試験の解法」	入試問題に秘められた大学数学	有		17	火	国4	秀光前期
	8	11月10日(金)	特進	○特	3T,「二次試験対策」	二次試験の傾向と対策	有		20	金	数7	秀特
理科	1	4月19日(水)	外英フ技	○	*	今年度の研修の概要、研究授業について	無	11	24	火	英8	英フ技
	2	5月10日(水)	特進	○	2T,化学「酸化還元または電池」	ICTを使った授業、センター試験結果分析	有		25	水	理6	情報
	3	5月31日(水)	外英フ技	○	2A,化学「水素イオン濃度とpH」	今年の入試分析(センター及び二次試験)	有		26	木	情2	情英フ
	4	7月12日(水)	秀光	○	5M,化学「反応熱と熱化学方程式」	H29入試結果、H30入試	有		7	火	英9	特進
	5	9月6日(水)	外英フ技	○	*	アクティブラーニングについて	無	12	10	金	数8	特進
	6	10月25日(水)	情報	○	*	パワーポイントでの授業	無		14	火	国5	外英フ技
	7	12月5日(火)	特秀	*	外部講師モデル授業	講師授業から得たもの	有		5	火	理7	特秀
	8	12月6日(水)	特秀	*	外部講師モデル授業	講師授業から得たもの	有		6	水	理8	特秀
情報	1①	7月26日(水)	情英フ	*	*	Power Point(体験研修)	有	2	13	水	国6	特秀情
	1②	7月26日(水)	法人局	*	*	Word実務(体験研修)	有		19	火	国7	特秀情 外英フ技
	2	10月26日(木)	情英フ	○情	*	MOS試験対策法の指導	有		20	火	国8	フ特

教科コンダクター：国語(堀田文雄)、英語(伊藤需)、数学(梅田一成)、理科(野田良彦)、情報担当(日野彰、板垣徳昭)

教育顧問：有の日に従事(有)は外部講師による)

Ⅱ 研修旅行報告

(1) 秀光中等教育学校 第4学年 カナダ研修報告

小保内陽大

はじめに

平成29年7月2日(日)より7月18日(火)まで15泊17日にて行われた秀光中等教育学校第4学年生徒28名によるカナダ研修について、ご報告申し上げます。

参加者 秀光中等教育学校 第4学年 男子17名 女子11名 合計28名

引率者 団長：小保内 陽大 (4M1担任)

川村 めぐみ (保健室)

Kerry Winter (IBコーディネーター)

佐々木 綾子 (法人局7月2日～7月8日)

1. パワフルユース・グローバルリーダーシップ研修説明会

平成29年6月24(土) 10:40～12:20 宮城野校舎 栄光2階 大会議室にて実施

実行委員長の後藤明希君の「海外の同学年の人たちに勇気を出して話しかけ、ホームステイでは日本の文化を紹介して仲良くなろう」という挨拶から始まり、引率教員の紹介と研修日程の確認を1時間ほど行った。

後半は「事前学習発表」として、LHRや総合学習の時間を使って行った調べ学習を生徒一人一人が新聞の形にまとめ、発表を行った。学年全体を生徒の興味・関心に合わせて8つの分野「①カナダ・言語②文化③食べ物④スポーツ⑤自然⑥観光⑦建造物⑧その他」に分け、それぞれテーマを決めて行ったことで、グループ毎協力して調べ学習を進めることと、全員が異なるテーマについて詳しく調べることを実現した。また、事前学習の中で英語版の「Global Leadership Academy」研修内容をグループで日本語に訳すことで、生徒たちが研修に向かう気持ちが高まった。

「カナダ研修のしおり」作成においては、実行委員の生徒たちが自主的に進めたことで大変有意義な内容となった。「持ち物のチェックリストを作成すること」、「研修先のバンクーバーやブリティッシュコロンビア大学の地図を入れること」、「研修日誌はプログラムに合わせて朝・昼・夜の内容を記入し、学んだ・聞いた・見たことに加えて今日の発見を1つ記入すること」、「振り返りを大切にしつつ研修の負担にならない程度の分量にする」といった生徒たちの工夫が詰まったしおりとなった。研修の目標は「語学力・リーダーシップを高める」に決まった。

2. 研修日程

平成29年7月2日(日)

7:30 宮城野校舎集合、出発式 8:00 出発

14:00 成田空港 着 17:00 成田空港 発

9:40 バンクーバー空港 着 10:10 バンクーバー空港 発(バス)

※入国審査がスムーズに終わったため、リッチモンドのオリンピック記念館とスティーブストンを見学

15:15 ツワッセン 発(フェリー) 17:15 デュークポイント 発(バス)

19:30 シャウニガンレイク 着

※予定より1時間ほど到着が遅れる。

7月3日(月)～7月14日(金)

Brookes Shawnigan Lakeにて「Global Leadership Academy」研修

7月15日(土)

8:00 シャウニガンレイク 発(バス) 10:40 ナナイモ 発(フェリー)

12:20 ホースシューベイ 発(バス) 13:00 バンクーバー 着 市内にて昼食

16:00 ブリティッシュコロンビア大学訪問

※渋滞のため1時間ほど到着が遅れる。

18:00 サレー地区にてホストファミリーと合流、ホームステイ先へ

7月16日（日）

バンクーバー市内にてホストファミリーと過ごす。

7月17日（月）

9:00 ホストファミリーとお別れ後、バスにて移動

10:00 バンクーバー空港 着 14:25 バンクーバー空港 発

※点検のため飛行機の出発が1時間ほど遅れる。

7月18日（火）

15:55 予定より45分遅れで成田空港到着

17:10 ロストバゲージ発生のため予定より1時間遅れで入国手続き完了

22:30 予定より20分遅れで宮城野校舎到着・解散

3. 研修報告

第1日目 7月2日（日） 出発式・移動

出発日は天候にも恵まれ、実行委員長の後藤明希君から保護者の方々に向けて、「積極的にコミュニケーションを取って成長して日本に戻ってくる」という決意のこもった挨拶があった。成田空港では校長先生がお見送りに来てくださった。飛行機は予定よりも少し早くバンクーバー空港に到着し、入国審査も非常にスムーズに終わったため、現地ガイドさんの案内のもと、リッチモンドのオリンピック記念館とスティーブストン（日系人が多く、鮭の缶詰工場が有名な街）を観光した。現地の気温は18℃で、風がとても気持ち良く最高の天気だった。



出発式



成田空港



リッチモンドオリンピック記念館



スティーブストン

第2日目 7月3日(月) Orientation

本格的に Global Leadership Academyが始まった。午前中はダンスを取り入れた自己紹介や文化の違いについて理解するためのカードゲーム、校舎や規則の説明などがあり、生徒たちは戸惑いながらも英語で話しかけようと努力していた。

午後のアクティビティでは、ホームグループに分かれて熱中していることや、これからの夢について話し合った。湖では水泳テストを行い、クリアした生徒はカヌーやカヤックに挑戦した。夕食後には、パスタや紐を使ってできるだけ高くにマシュマロを置く方法を考える「マシュマロチャレンジ」を行った。



ホームグループでのチャレンジ



マシュマロチャレンジ

第3日目 7月4日(火) Build Confidence

バスで片道40分ほど移動し、Wild Play Element Parksに行った。木に登って板や丸太を渡ったり、ロープを使って滑り降りたりするアトラクションがいくつも用意されていて、生徒同士が英語で励まし合って信頼関係を築くことを目的としていた。その後は学校に戻ってWild Playで感じたことや勇気づけられたことをグループで話し合った。



Wild Play ①



Wild Play ②



Wild Play ③



Wild Play ④

第4日目 7月5日(水) Service Leadership

この日も午前中からバスで移動し、片道1時間ほど離れたWoodwyn Farmでドライフラワーにするためのラベンダーを収穫し、木のチップを道に撒き、ブラックベリーを摘み取るといった奉仕活動を行った。この農場では、薬物中毒やアルコール依存性、ホームレスの人々を社会に復帰させるための支援なども行っており、その取り組みの経緯や成果について1時間ほどお話頂いた。



Woodwyn Farm ①



Woodwyn Farm ②



Woodwyn Farm ③

第5日目 7月6日(木) Communication

午前中は、効果的なコミュニケーションの方法についてグループ毎に話し合ったのち、明日のグループ奉仕の準備を行った。午後からはダンサーの亚当夫妻をお呼びして、ボックスステップなどの基礎から教えて頂いた。

夕方からは声優のMatt Hillさんをお招きして、声優としての仕事やカナダ横断マラソンなどの取り組みについてご講話頂いた。



Dance



Matt Hill ①



Matt Hill ②

第6日目 7月7日(金) Group Service

前日までに20ドルという制限金額の中で、7つのグループに分かれて企業やボランティアの方々に連絡を取って協力をお願いしたり、ポスターを用意したりするという準備を行ってきた。今日は朝からグループ奉仕を行う日で、海岸や街中の清掃活動や地球温暖化に関するインタビュー、国立公園での湿地保護のための環境整備、企業と協力した食事の配布、教育を受けられない子供達のための宣伝などを行なった。生徒たちは非常に熱心に取り組んでいた。その後、学校に戻って発表会を行い、グループ奉仕の成功を祝ってスパークリングのりんごジュースでの乾杯と、ちょっとした花火をした。



グループ奉仕①



グループ奉仕②



グループ奉仕③



グループ奉仕④



グループ奉仕打ち上げ

第7日目 7月8日(土) Exploring Global Diversity

午前中はビクトリア博物館でカナダの人々と環境の歴史について学び、テリー・フォックスという義足のランナーの映像と資料は、多くの生徒の心に残ったようだった。昼食後はビクトリア市内で約3時間にわたってグループ毎の自由行動となり、生徒たちは買い物を楽しんでいた。17:00からは全員揃って「Old Spaghetti Factory」で美味しいスパゲティを頂いた。

その後は「The Butchart Gardens」を見学した。多くの花が綺麗に咲いており、日本庭園のスペースも用意されていた。また、日本とは違い音楽に合わせて打ち上げられる花火も見ることができ、多くの生徒にとって忘れられない日となった。



ビクトリア博物館



Old Spaghetti Factory



The Butchart Gardens ①



The Butchart Gardens ②

第8日目 7月9日(日) Taking Action

前日のアクティビティが夜遅くまでかかったので、朝10時のブランチからスタートして学校での勉強がメインとなった。午前中は自分の夢に向かって進むための方法について学んだ。また、自分が好きなこと、得意なことと社会から求められていることについて考え、世界の中で何ができるかを発表し会った。フリータイムには水泳やバスケットボール、バドミントンなどを楽しんだ。夕食後はGraffiti Wall Activityという、それぞれが与えられた役割の中で大きな一枚の絵を完成させることで、家と家族、貧困、飢えと食べ物などの関係についてグループごと考えた。



Graffiti Wall Activity

第9日目 7月10日(月) Our Place

「Our Place」という麻薬やアルコール中毒者、ホームレスの人々を保護する施設に行き、生徒が切ったフルーツとレモネードを無料で配布するという活動をした。その後は、麻薬中毒に約50年間も苦しんでこの施設に保護された方から、麻薬の恐ろしさ、教育の大切さについてお話し頂いた。非常にショッキングな内容で泣いてしまった生徒もいたが、その後はグループで感じたことを話し合い、かけがえのない時間となった。

学校に戻ってからは、自分の性格や特徴を理解するための心理テストや、ドリームプロジェクト準備の続きを行った。



Our Place ①



Our Place ②



Our Place ③

第10日目 7月11日(火) Learn Self-Reflection

朝10時のランチから始まり、バスで2時間ほど移動した先にある「Qualicum Falls」に行った。自然に囲まれた中で昼食を摂り、今日までの8日間をカラフルな絵や文字を使ってグループごと振り返った。その後は森林散策をして、エメラルドブルーに輝く川と滝を見ることができた。バスで「Rath Trevor Beach」に移動してからは、フリスビーやサッカー、ラグビーを海岸で楽しんだ後で、「Burger Barbeque」となりました。日本よりもはるかに大きなハンバーガーでしたが、男子の多くは1人2個ずつ食べていた。焼いたマシュマロとチョコレートをクッキーで挟んだスモアも絶品だった。



Qualicum Falls ①



Qualicum Falls ②



Rath Trevor Beach ①



Rath Trevor Beach ②

第11日目 7月12日(水) Teamwork

1日を通して「Team Challenge Day」というテーマのもと、7つのチームに分かれて競い合った。午前中はダンスや歌、迷路など7つのアトラクションを順番に回り、順位に応じたポイントを手に入れた。生徒たちは英語でのコミュニケーションが上手になってきて、チームで協力し合う姿が見られた。

午後からは、午前中に手に入れたポイントを使って材料を購入し、それを使って船を作成して湖でレースを行った。限られた材料の中で浮かせたり、スピードを出したりするためのさまざまな工夫が見られ、生徒たちはとても楽しんでいった。夕食後は、Powerful Youthの最終日を行うドリームプロジェクトの発表に向けた計画やスライド作成などの準備をした。



Team Challenge ①



Team Challenge ②



Team Challenge ③

第12日目 7月13日(木) Talent Show

Powerful Youthのプログラムも残り1日となり、集大成となるDream Projectのプレゼンテーションに向けた準備を行なった。スライドと原稿は全て英語となるため、海外の生徒たちが準備を終わらせてフリータイムを楽しむ中でも、秀光生は現地スタッフや引率者に質問しながら、どうにか完成させようと頑張っていた。

また、ランチの後には茶道に興味のある現地スタッフのリクエストのもと数人がお点前を披露すると、とても感動して下さった。夕方からは「Talent Show」が開催され、ピアノや弾き語り、ドラムソロなどの特技を持った生徒たちが演奏を披露して非常に盛り上がった。最後には秀光生全員での合唱も披露した。



Tallent Show ①



Tallent Show ②

第13日目 7月14日（金） Final Presentation

午前中からDream Projectのチーム発表を行い、その中で優れた発表をしたメンバーが午後から全員の前でもう一度プレゼンテーションをした。秀光生からも数人が選ばれ、地球温暖化対策やワクチンの配布、チャリティーコンサートなどをテーマに、とても立派な発表だった。

その後は6ヶ月後の自分に向けた手紙を書いた。これは、今回の内容を振り返るだけでなく、自分たちで考えたプロジェクトを実行できているか確認するためのものだった。18:30からはSpecial Dinnerと卒業式となり、ケーキやスライドショー、ダンスなどを楽しんだ。日々新しい発見と学びのある素晴らしい2週間のGlobal Leadership Academyであった。



Dream Project ①



Dream Project ②



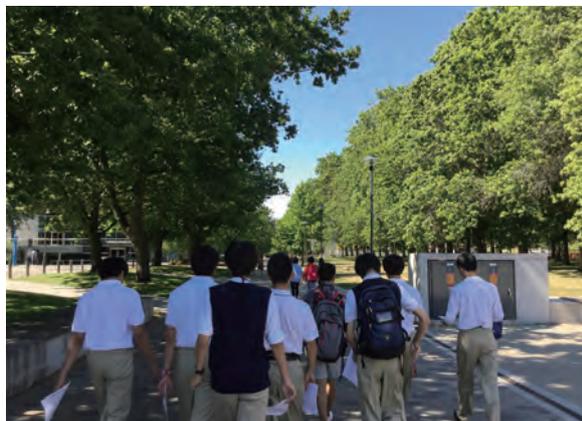
Graduation Celemony ①



Graduation Celemony ②

第14日目 7月15日(土)

朝8:00にシャウニガンレイクを出発し、バスとフェリーでバンクーバーまで移動した。朝早くにもかかわらず、現地スタッフの方々と一緒にプログラムを受けた生徒たちがお見送りに来てくださり、涙の別れとなった。バンクーバー市内で中華料理を食べたのち、ブリティッシュコロンビア大学を見学した。大学に通う4人の学生さんが案内してくださり、生徒たちはその説明を一生懸命聞き、キャンパスの広さや施設・設備の充実した様子に驚いていた。18:00にはホームステイを行うサレー地区に到着した。ホストファミリーの方々は非常に優しく接して下さり、生徒たちは一安心した様子だった。



ブリティッシュコロンビア大学見学①



ブリティッシュコロンビア大学見学②



Homestay ①



Homestay ②

第15日目 7月17日(月)

生徒たちは全員が元気にホームステイ先から戻り、バンクーバー空港で最後の買い物を楽しんだ。前日はそれぞれのホストファミリーの方に、海や遊園地、ショッピングモールなどに連れて行ってもらい、とても楽しい時間となったようだった。



バンクーバー空港

4. カナダ研修発表会

平成29年9月30日(土) 8:55～11:40 宮城野校舎 南冥1階 中講義室にて実施

秀光4学年保護者の方々をお招きし、カナダ研修期間中に発表したDream Projectのうち、優れた発表として現地スタッフから選ばれた5名と、カナダ研修に参加せずに学校で理科・社会の調べ学習を行った3名が個人発表を行った。また、事前研修の内容とも関連付けて、「①スポーツ②言語・文化③建物・歴史④食べ物⑤自然⑥その他」の6グループで発表を行った。最後には小保内が作成した約30分間のDVDを上映し、いずれも保護者から大変好評であった。以下に保護者アンケートの結果を紹介する。(抜粋)

「とても興味深く聴くことができました。生徒たちのテーマの選び方・内容共に、思った以上に充実した内容だったと思います。カナダでの体験が生徒たちの心の成長、考え方に大きな影響を与えてくれたことがよく分かり、行かせてよかったと思いました。」

「カナダ研修中、楽しめているのか、無事で帰って来るのか親としてはとても心配していましたが、今回の発表会を見て改めてカナダ研修へ参加させて良かったと思いました。大切な思い出、経験を一生忘れないでほしいと思います。」

「研修に参加した子もしない子も各々テーマを決めてよく調べられた内容を発表できていたと思います。これからの学生生活にも少なからずプラスとなる体験ができたのを強く感じました。」

「子どもたち、この発表までたくさんの事を学び、調べ、よくまとめました!!それぞれの考えを明確に、目標を持って取り組んだのがよく分かりました。リーダーシップ、コミュニケーション、協力、失敗、言語、文化、奉仕、楽しい、悔しい、戸惑い、感じた想い全て、きっとこれからの子どもたちの大きな成長になっていくと、今日の発表を聞き確信しました。この成長はいつか大人になったとき、世界のどこかの誰かの為になる様願います。素晴らしい発表会をありがとうございました。また、先生方、ご指導本当にありがとうございました。」

「カナダ研修がとても子供達に多くの学びを与えて頂けたこと感謝いたしました。多くの子供たちが誰かのために…という体験、気持ちになれた経験を出来たのは、カナダという風土がとても多く関係しているのだと思います。受け身の生活ではなく、自分からの発信のできる環境を努力していってくれればと望みます。何と云っても、楽しい姿が見られた2週間でした。そしてこの経験が大人になるとき、身になると感じました。ありがとうございました。」



カナダ研修発表会①



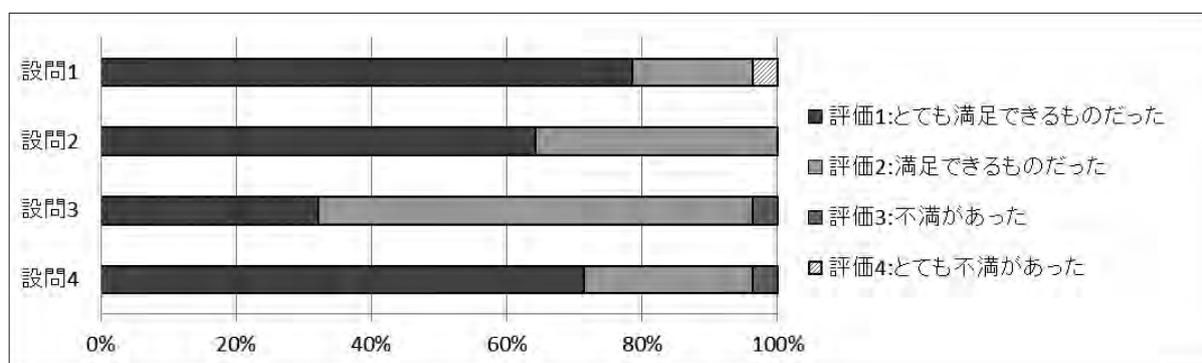
カナダ研修発表会②

5. 総括

5.1. Classiを利用した生徒へのアンケート結果より（抜粋）

(1) 選択式アンケートへの回答

	設問内容	評価1	評価2	評価3	評価4	有効 回答数
設問1	Powerful Youthのプログラム内容について	22	5	0	1	28
		78.6%	17.9%	0.0%	3.6%	
設問2	ホームステイでの内容について	18	10	0	0	28
		64.3%	35.7%	0.0%	0.0%	
設問3	研修全体の理解度について	9	18	1	0	28
		32.1%	64.3%	3.6%	0.0%	
設問4	研修全体を通じた内容について	20	7	1	0	28
		71.4%	25.0%	3.6%	0.0%	



今回のカナダ研修には、4M1組31名のうち3名を除く28名が参加した。研修に参加しようと思ったきっかけは、「海外での研修に興味があったから」「英語力を伸ばしたかったから」という積極的な理由がそれぞれ過半数を占めた。不参加の生徒については、「アレルギーがあるため」「ハワイでのホームステイに不満があったから」との理由であった。

設問1では、27名の生徒がPowerful Youthのプログラムの内容に満足していた。その理由としては、「みんなと協力し合い何かを達成するアクティビティがとても有意義なものであったから」「今まで経験できなかったことができた。そして、今まで考えたことのないような貧富の差や人生について触れることができたから。」「内容がとてもよく、海外の人ともたくさんコミュニケーションをとれたから」といったものであった。一方で、とても不満があったと答えた1名の生徒は、「最初の授業で、このプログラムは英語を話せることが前提だと感じ、秀光のレベルに見合っていないと思ったから」という理由であった。

設問2では、「野球観戦やダウンタウン観光など様々な場所に連れて行ってくれたから」「ホストファミリーの子供と一緒に遊んでくれたから」「ホームステイ先の家族とコミュニケーションをとることで英語を使えるようになりたいと思ったから」といった理由から、ホームステイは28名全員が満足のいくものであった。

設問3では、研修内容を十分理解できた生徒は9名にとどまった。この一番の理由としては、生徒の英語力不足が挙げられる。設問4では、英語を話せなかったことを理由に不満があったと回答した1名の生徒を除いた27名が研修全体に満足していることが分かる。

(2) 自由記述式アンケートへの回答

設問1：今回の研修内容はあなたの将来にどのように役立つと思いますか。（回答抜粋）

「リーダーシップ研修を通して仲間と協力する大切さ、コミュニケーションをとることの必要性、自分の夢を持つことの大切さなど、たくさんのことを学ぶことができました。自分には足りないことだらけで今回だけのものとせず、毎日の生活で意識して取り組んでいくことで将来がより良いものとなっていくのではないかと思います。

す。」

「将来の幅が広がったと思います。今までは日本にしか目を向けていなかったけれど海外にも目を向けたいです。また、英語を勉強しようという意志も湧いてきました。」

「1人でプレゼンテーションを作成したことは、今後必ず使えると思います。また、農場でのボランティアや、ホームレスの施設を訪れた経験は、その活動を通して私は気持ちの面で変化したような気がしました。それは今後、人のことを考えたり、世の中を考えたりするときの参考になるとと思います。」

設問2：今回の研修内容はあなたが英語力を身につける上でどのように役立つと思いますか。(回答抜粋)

「文法よりも日常的に使う実用的な英文を聞いたり話したりできた。」

「自分がまだまだだと痛感し、喋りたいけれど喋れないという悔しい体験をしたのもっと語彙力を増やしていきたいという強い意志ができました。」

「チャレンジすることが大切だということが分かった。」

設問3：今回の研修をより充実させるためには何が必要だと感じましたか。(回答抜粋)

「コミュニケーション能力」「英語力」と回答している生徒が非常に多かった。

「僕にとってこれ以上の研修内容は考えられない。」

「携帯、パソコンメールアドレスなどをすべての人が持って来るべきだった。」

「もっと海外の人と話すべきだったと思う。」

設問4：今回の研修全体を通じて、気づいたことや感じたこと、伝えたいことなどがあれば自由に記述してください。(回答抜粋)

「みんな本当に親切で、人の意見をしっかり聞いてくれて尊重してくれて、そんな環境が、とても素敵だと思います。」

「今回のリーダーシップ研修を通して、日本人は他国の人たちより英語力が劣っているのではないかと思った。これからは、世界の人たちと協力して物事を解決していくために、ますます使える英語力を、学校の英語の勉強を基本に練習しなければならないと思った。」

「ホームステイの日数を増やしてもいいと感じた。」「自分達の英語力は低いこと。」

研修日程についてもアンケートを行ったところ、もっと長い方が良い：13名、ちょうど良い：15名、もっと短い方が良い：0名であった。1泊2日ホームステイは短く感じた生徒が多いようである。

5.2. 研修のまとめより

「最初は不安が多かったです。でも、行ってみると先生方も優しく毎日楽しかったです。知らない人ばかりだったけど、周りの人は普通に話しかけてくれて嬉しかったです。私がいまだに理解していないと思うと、わかりやすい英語で教えてくれたり、ジュスチャーで教えてくれました。毎日沢山の、アクティブなことばかりでした。2週間過ぎて学んだことはたくさんありました。でも1番は、わからないことはすぐに質問することです。外国人の方は皆、とにかく質問をたくさんしていました。これからの生活に生かしていきたいです。ホームステイでは、2日間しかなかったけど、みんな優しくしてくれて良かったです。また、お隣の家の女の子とも仲良くなれて嬉しかったです。ショッピングをしたりバーベキューをしたりしました。2日間充実していました。夜まで沢山の話をできたので、英語がより好きになりました。困ったこともそこまでなく、2週間と2日過ぎて良かったです。またカナダに行きたいです。」

「カナダ研修の中で最も楽しかったのは、Wildplayだった。カナダの自然に触れながら、未知の体験をすることができてとても楽しかった。また、ドリームプロジェクトでは、日本語で表現するのですら難しいことをさらに英語で表現することがとても難しく、また、パワーポイントを使って相手の興味を引けるような発表にすることにとても苦労した。発表の時は、色々な人が色々な目標を持っていてそれに向かって頑張っていることがとても伝わってきた。

フリータイムでは、主にスポーツをしていた。色々なスポーツをしたことによって、様々な人と交流を深めることができてとても充実した二週間となった。ホームステイでは、ホストファミリーの人たちがとても優しく、ショッピングに行かせてもらったり、プールに行かせてもらったりと、様々な場所に連れて行ってもらった。また、ホストファミリーの息子さんの家に行ってバーベキューのようなものに参加させていただき、色々な人とのコミュニケーションが取れた。その他に、街を歩いていると、アフリカ系の人やアジア系の人、欧米系の人など様々な人種の人達を見かけた。このことから多様性のある国だということ、実際に見ることができた。この研修で言葉が通じない中で、どのようにコミュニケーションを取っていくかや、積極性の大切さなどを学んだ。今

回の研修で学んだことを、学校生活だけでなく将来的にも活用していき、この研修を無駄にしないようにしていきたいと思う。」

「2週間とても充実していてとても楽しかった。この研修で一番嬉しかったことは中学の友達ができたことだ。花火大会の日と一緒に周ってから仲良くなった。お互いに日本語を教えたり中国語を教えてもらったりした。とても良かった。Passionチームはとても明るかった。Wild Playでは、お互いに助け合うことができた。チームリーダーのマリアが途中助けてくれてありがたかった！」

2週間とても印象的だったのは、Our Placeで行ったボランティアだ。フルーツやレモンティーを笑顔で受け取ってくれた時の喜びは今でも覚えている。日本でもこのようなボランティアに参加したい。将来、看護師をやりながらホームレスを助けられるような仕事をしたいと思った。2週間で、将来の夢の視野も広がりまた、同年代の外国の子達と話せたのはとても嬉しかった。また参加したい。」

「最初は、すごく行きたくなかったし、憂鬱だったけど、海外の人や、先生と接していくうちに、すごく楽しいなと思いました。リーダーシップ研修って、具体的にどういうことなのかよくわからなかったけど、研修を通して、自分の力で発表することや、自分たちが行きたい奉仕作業を実際にすることなど、ほぼ毎日ハードな日々だったけど、確実に学ぶものがありました。自分たちでフードバンクに電話して、お手伝いをさせてもらいにいった時に、フードバンクで働いている人たちは、一生懸命に誰かのために働いているんだと思うと、私もそんな仕事がしたいと思いました。この研修を通して、本当に自分がしたい事を見つけることができてよかったです。ホームステイでは、ホストファミリーが、優しく接してくれて、緊張していた私たちに、気さくに話しかけてくれたので、いいお家だよかったです。」

「私はこの2週間のカナダ研修で、日本ではなかなか出来ないような体験を沢山しました。3日目のWild Playでは、初めてあのようなアトラクションを体験し、お互いに声を掛け合って協力する大切さを学びました。実際に、先を行く人に、この道はどのようにして渡るのが良いのかを、教えてもらった時、安心して渡ることが出来ました。」

6日目のグループに分かれての奉仕活動では、日本ではなかなかやる事が出来ないであろう、街で人々に地球温暖化について話すということをやりました。私の入ったグループは、日本人だけしか居なくて、初めは、そのグループに入ってしまったことをとても後悔しました。他のグループに比べて、私たちのグループはポスターや話す内容を準備しなくてはいけなくて大変でしたし、外国人が居るグループのメンバーになった秀光生は、頑張って英語を使ってコミュニケーションをしていて、とても羨ましかったからです。でも、実際、奉仕活動中、私たちは見知らぬ人に英語で話しかけて説明することを沢山やりました。このことで、少し英語力が向上した気がしました。9日目のOur Place訪問では、初めて、あのようなホームレス保護施設を訪れましたし、初めて麻薬中毒であった人を目の前にしました。その日は、私の知らなかった世界を私は目の当たりにして、少し驚きましたし、すごく新鮮でした。最終日のDream Projectの発表では、初めて長いセリフを英語で、しかも多くのネイティブスピーカーの前で話しました。また、自分1人でプレゼンテーションを作成したのも初めてでした。作成過程で、GLAの先生方がどのようにして作ればよいのかを丁寧に説明してくださったし、みんなと「ここはどうした?」「これでいいかな?」などと協力して聞き合うことで良いプレゼンテーションを作ることが出来たとおもいます。GLAでの2週間は私の人生史上最高に密度の高い2週間であったと思います。初めはとても不安でしたが、他のGLAの生徒さんがとても優しく多様性があって、すぐに不安は消えて行きました。狭い日本だけで学び成長するのではなく、広い世界に目を向け、学び、自分を育てていくことの素晴らしさと重要性に気付かされた2週間でした。」

5.3. 引率より

(1) Powerful Youthプログラムについて

Powerful Youthのプログラムは毎日が非常に充実していると同時に、アクティビティの合間の休憩時間なども十分に設けられており、海外で2週間という長い期間を元気に過ごすことができた。生徒アンケートからも分かるように素晴らしいプログラム内容であり、次年度以降もぜひ継続すべきだと思われる。

(2) ホームステイについて

1泊2日という短い期間ではあったが、素晴らしいホストファミリーに恵まれて充実した休日を過ごすことができたようである。2週間の寮生活後にも関わらず、ほとんどの生徒が元気に楽しむことができた。

(3) 飛行機到着後の移動について

フェリーとバスを乗り継いで移動は非常にハードであった。また、学校近くの道路を大型バスで通ることができずに迂回したため、夕食が予定より1時間遅れの19:30となった。到着した次の日からプログラム開始となるため、初日の移動はもう少し余裕のあるものになると良い。

(4) 寮生活について

現地の先生方が寮の鍵を管理しており、22:00以降に外出することはできない。また、日中も基本的には施錠する決まりとなっていた。3日目からは引率団長も鍵を借りることができ、体育館やミーティングルームを生徒が使用する際や、寮の部屋に忘れ物があった際にはその都度鍵を開ける必要があった。

校内Wi-Fiについては23:00以降使用不可となるため、遅くまで携帯を使っていたという生徒は見られなかった。(スタッフ用には24時間使用可能なWi-Fiとパスワードが準備されていた)

(5) パソコン及びスマートフォンについて

現地の学校には使えるパソコンが数台に限られていたため、秀光生はスマートフォンのアプリや、海外の生徒のPCを借りて資料を作成することとなった。Dream Projectで発表を行うために、Power Pointの使用可能なノートPCを1人1台ずつ持っていくことが望ましい。また、スマートフォンのアプリを用いて日々の学習成果報告を行うため、ガラケーの生徒へのタブレット端末貸与とPC版メールアドレスの事前作成(G-mailアカウント等の開設)が必要である。

(6) 生徒の活動時間および健康管理、服装について

基本的には朝8:30に朝食を摂り、外が明るい21:30頃までフリータイムで遊んだあと、22:00には就寝というスケジュールであったが、「The Butchart Gardens」での花火鑑賞や、最終日の「Graduation Celemony」など、24:00を過ぎるまで活動することもあった。また、朝・夕は非常に冷え込むためパーカーなど暖かい服装を多く準備する必要がある。(暖かい服を数枚しか持ってこないで困っている生徒もいた)

(7) 楽器等の持ち込みについて

Powerful Youthのプログラムの中で「Tallent Show」という生徒たちがそれぞれの特技を発表するイベントがある。秀光生もピアノやドラム、クラス合唱などを披露したが、現地にバイオリンなどの楽器が無く、演奏できなかったオーケストラ部の生徒たちはとても残念そうにしていた。日本から楽器を持参すれば、海外の生徒や現地スタッフに演奏して喜んでもらえる貴重な経験となる。

(8) 湖での活動について

自由時間には湖でカヌーやカヤックを楽しむことができるが、そのためには現地スタッフのもとで水泳テストに合格する必要がある。湖は非常に深く、藻などが足に絡むため、今年度の参加生徒28名のうちテストに合格して湖で泳ぐことができたのは10名程度であった。

(9) 大学見学について

今年度はプリティッシュコロンビア大学見学が2時間設けられていたが、バンクーバー市内観光の時間が少し押していたこともあり、建物内を見学する時間がなくキャンパスを1周するだけで終わってしまった。現地の大学生たちに質問するための時間を考えると、次年度以降の大学見学は3～4時間ほど確保したい。

6. 謝辞

今回のカナダ研修において、結団式で他国の生徒との関わり方や学ぶべきことの指針をご教授下さり、当日には成田空港までお見送りに来て頂くなど、あらゆる面において生徒たちを導き、私たちにご指導頂きました加藤雄彦校長先生に心より感謝申し上げます。また、カナダ研修に関わりご協力、ご支援いただきましたすべての方々に御礼申し上げます。

生徒たちはこの研修を通して協力して物事に取り組むことの楽しさ・大切さや薬物中毒の悲惨さ、人前で話すことの難しさや英語の伝わらない悔しさなど、さまざまな感情を抱きました。今回の経験を忘れることなく、世界の中で自分は何ができるか・何をしなければならないのかをよく考えて、これからの学校生活や将来に活かしていくよう教え導きたいと思います。

(2) 情報科学コース 沖縄研修旅行報告

加藤 芳己

期 間 平成29年4月17日(月)～20日(木) 3泊4日
場 所 沖縄県(那覇市～名護市)
参加生徒 65名(男子55名、女子10名)
引 率 者 犬飼ユウ子 加藤芳己 加藤裕之 野坂吉則

1. 研修の目的

- ・沖縄の風土と歴史に親しみ、文化・自然・産業に理解を深める。
- ・研修を通じて豊かな感性と情操を養い、見識を広げる。
- ・集団行動を通して協調性を養い、様々な交流を元に協調性を養う。
- ・体調はもとより、貴重品の管理や時間配分等、自己管理の能力を養う。
- ・公衆道徳を守り、社会性を身につける。

2. 事前指導

LHRや総合的な学習の時間を利用して以下の事前指導を行った。

- 1) 健康調査(アレルギー調査を含む)
- 2) 自主研修の班編成
- 3) 自主研修の計画
- 4) 研修の目的心得諸注意などの指導
- 5) 沖縄研修旅行結団式

3. 行程

1日目 4月17日(月)

仙台空港 1F中央噴水広場 10:40集合
仙台空港 — 11:55 — 《ANA 1863便》 — 14:55 — 那覇空港
那覇空港 — 15:40 — ゆいレール — 16:20 — ホテルサン沖縄
到着後、国際通り散策(夕食各自)

2日目 4月18日(火)

朝食7:00～
ホテルサン沖縄 — 8:30 — (貸切バス) — 9:20 — 平和記念資料館 平和の礎 — 11:45 — (貸切バス)
— 12:45 — おもろまち 那覇市内班別自主研修 — 19:00 ホテルサン沖縄

3日目 4月19日(水)

朝食7:00～
ホテルサン沖縄 — 8:30 — (貸切バス) — 9:20 — 沖縄県科学技術大学院大学 — 11:40 — (貸切バス)
— 12:50 — 沖縄海洋博記念公園 — 16:00 — (貸切バス) — 16:40 — ホテルリゾネックス名護(夕食BBQ)

4日目 4月20日(木)

朝食7:00～
ホテルリゾネックス名護 — 8:00 — (貸切バス) — 9:30 — おきなわワールド — 11:30 — (貸切バス)
— 12:00 — 那覇空港 — 14:10 — 《ANA1864便》 — 16:45 — 仙台空港 解散

◎1日目

仙台空港に現地集合をした生徒たちの表情からは、沖縄研修旅行に対する期待感と不安感が入り混じったような様子が見てとれた。保安検査場を通過する際、私物が反応してしまうのではないかとドキドキしていた生徒も無事に通過できた時には安心した表情を見せていた。ほとんどの生徒が飛行機に乗るのは初めてで離陸時と着陸時に驚きの声をあげていた。

無事に那覇空港に着陸し、ゆいレールで宿泊場所のホテルサン沖縄に移動した。移動中の生徒は初めて見る沖縄の景色をまじまじと見ていた。ホテルサン沖縄に到着し着替えを終えた後、班ごとに国際通りを散策した。買い物や夕食を楽しむ生徒たちはとても生き生きとしていた。



写真1 仙台空港に集合する生徒



写真2 那覇空港で荷物を待つ生徒



写真3 国際通りを散策する生徒



写真4 ステーキ 88 で夕食を食べる生徒

◎2日目

ホテルサン沖縄から貸切バスに乗り約1時間かけて平和祈念資料館へ向かった。貸切バスの中ではバスガイドさんの様々な沖縄のお話やクイズなどで盛り上がりながら愉快地目的地に向かった。

平和祈念資料館では沖縄戦についての講話を頂き、生徒たちは終始真剣な眼差しを向けながら講話を聞いていた。語り部の方は、惨劇を生徒に伝えるとともに平和な世界を作っていかなければならないことを話した。その後は、資料館を見学し戦時中の沖縄の様子や当時使われていた道具、貴重品を真剣に見ていた。

この日の午後からは、班別自主研修を行った。あいにくの雨でしたが生徒たちは、それを苦にせず数カ月かけて計画立てをした自主研修を楽しんでいる様子であった。写真を撮ったり、沖縄の様々な文化にふれたり、お土産などを買ったりと沖縄を満喫していた。ホテルの集合時間は19:00であり、ホテルに帰ってきた生徒たちは安心した表情を見せ、全員が無事にホテルに到着した。



写真5 平和祈念資料館を見学する生徒



写真6 雨の中自主研修をする生徒



写真7 首里城公園



写真8 国際通りにて買い物をする生徒

◎3日目

この日は、初めに沖縄科学技術大学院大学（OIST）の見学へ向かった。8:30にホテルを出発し、約1時間かけて到着した。沖縄科学技術大学院大学は学校内には、非常に多くの外国人が在学しており生徒たちも驚きを見せていた。沖縄科学技術大学院大学の様々な講話では、生徒たちはメモを取りながら真剣に聞いていた。その後は、何人かのグループに分かれ学校内を見学させていただいた。生徒たちは、普段目にするもののないものなどを見学し、興味津々だった。

午後からは、沖縄海洋博記念公園に向かった。沖縄海洋博記念公園では見たことのない魚やジンベイザメの餌やり、イルカショーが人気のオキちゃん劇場などを見学した。特にジンベイザメの所では釘づけになり開いた口が塞がらないような表情で見入っていた。また、沖縄海洋博記念公園でしか買えない限定グッズなどを買っていた。

沖縄海洋博記念公園の見学を終え、ホテルリゾネックス名護に向かった。夕食までの時間の間は目の前のビーチで遊んだ。珍しい貝殻や綺麗な石などを見つけている生徒の姿もあった。夕食ではBBQがあり、みんな楽しく食べていた。



写真9 講話を聞く生徒



写真10 学校からの景色を撮影する生徒



写真 11 研究を見る生徒



写真 12 沖縄科学技術大学院大学で記念撮影



写真 13 ジンベイザメの餌やり



写真 14 沖縄海洋博記念公園前にて



写真 15 ホテルリゾネックス名護ビーチにて



写真 16 BBQを楽しむ生徒

◎4日目

最終日は、おきなわワールドへ向かった。おきなわワールドでは初めに鍾乳洞を見学した。鍾乳洞の中は高温多湿で額に汗をにじませながら生徒たちは見学していた。そこを出ると様々なお店があり、アイスクリームや沖縄ならではの飲み物、お菓子を買って笑顔を見せながら食べていた。エイサーの公演もしており、迫力満点の踊りに生徒たちも見入っていた。

帰りの飛行機の中では、名残り惜しそうに窓を見つめる生徒や疲れ果てて寝ている生徒様々であった。仙台空港に到着すると、佐藤教頭先生をはじめ多くの保護者に方に迎えられそれぞれ帰路についた。



写真 17 朝食の様子



写真 18 おきなわワールドにて

4. おわりに

3泊4日の情報科学コース沖縄研修では、普段の学校生活では味わうことのできない集団行動の大切さ、協調性を養うことができたと考えます。

沖縄研修旅行を実施するにあたり、加藤雄彦理事長・校長先生の多大なるご配慮をいただき、心より御礼申し上げます。また、東部トップツアーの後藤さんをはじめ現地バス・ホテル・各施設のスタッフの方々、お世話になった皆様方にも厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(3) 平成29年度 フレックス・技能開発コース 沖縄研修旅行報告

多賀 努

1. はじめに

フレックス・技能開発コースの沖縄研修旅行は、年度当初の4月に3泊4日の日程で実施された。昨年度と同様に、男女別の研修旅行として、日程を一日ずらしての実施であった。

お世話になった旅行社は東武トップツアーズ株式会社であった。添乗員の中に本校卒業生がいらして、いろいろな点で適切なお配慮をいただいた。

私個人はこれまで何度か沖縄修学旅行を経験しているが、今回ほどゆったりと過ごしたことは初めてで、3年生の生徒たちとの豊かな交歓が心に残っている。

以下に、平成29年度の研修旅行の概要をまとめ、今後の沖縄研修旅行に資するよう、研修計画その他の準備資料を記録して報告に代えたい。



沖縄県立平和祈念公園 平和の広場にて

2. 沖縄研修旅行の概要

(1) 参加生徒数及び参加率

次のクロス表のとおり、参加生徒はフレックスコースで在籍162名中103名(63.6%)、技能開発コースで在籍126名中114名(90.5%)であった。

平成29年度沖縄研修旅行参加者数（フレックスコース）

	在籍	参加生徒	不参加生徒
フレックスコース（男）	139	82（59.0%）	57（41.0%）
フレックスコース（女）	23	21（91.3%）	2（8.7%）
フレックスコース	162	103（63.6%）	59（36.4%）

平成29年度沖縄研修旅行参加者数（技能開発コース）

	在籍	参加生徒	不参加生徒
技能開発コース（男）	79	69（87.3%）	10（12.7%）
技能開発コース（女）	47	45（95.7%）	2（4.3%）
技能開発コース	126	114（90.5%）	12（9.5%）

男女で出発と帰着が一日ずれていることと、フレックスコースの不参加生徒が多いことから、4月13日（木：女子の出発日）・17日（月：男子の帰着日）の2日は特別時間割を編成し、4月14日（金：男女とも旅行中）については、公認欠席の生徒を除く約30名に対して自習課題による午前授業とした。フレックスコースの不参加は大半が部活動大会やその準備によるものである。

(2) 結団式

4月10日始業式当日に結団式を実施した。当日の日程と式次第は次のとおりである。

4月10日（月）

8:50－ SHR～移動

9:30－ 始業式

10:45－ 芸術鑑賞（映画）

13:35－ LHR（各クラスで修学旅行のしおりの読み合わせ）

14:35－ 結団式 1 開式宣言（進行 槇）

2 教頭先生挨拶

3 団長挨拶（含添乗員紹介）

4 生徒代表挨拶（3K2小野寺桃香実行委員長）

5 閉式宣言

※その後、槇先生・青木先生より事前指導及び添乗員さんからの諸注意

※不参加生徒は別メニュー（進路関係）

翌4月11日（火）は実力考査日であった。実力考査終了後、この日の午後の授業を割愛して、映画『あゝひめゆりの塔』をグローリーホールで鑑賞した。

4月11日（火）

8:55－ 実力テスト（－12:55）

11:00－ 事前準備（多賀）

13:35－ グローリーホールで映画『あゝひめゆりの塔』鑑賞（不参加生徒も参加）

(3) アレルギーのある生徒について

参加者名簿を作成する段階で、食物アレルギーをもつ生徒が多いことに気が付いた。今後の参考になればと考えて、数字を整理したので掲載しておきたい。

アレルギーがある等、健康面での配慮が必要な生徒

	参加者	食物アレルギーあり	常備薬・既往症
フレックスコース（男）	82	7（8.5%）	14（17.1%）
フレックスコース（女）	21	2（9.5%）	3（14.3%）
フレックスコース	103	9（8.7%）	17（16.5%）
技能開発コース（男）	69	4（5.8%）	20（29.0%）
技能開発コース（女）	45	3（6.7%）	10（22.2%）
技能開発コース	114	7（6.1%）	30（26.3%）

(4) その他

旅行の日程その他については、次の「研修旅行のしおり」にまとめたので、これを参照してほしい。研修日程はとくに混乱なく、計画どおりに実施することができた。

特筆すべきこととしては、男子の旅行団がILC青森の一同と同行したこと、校長先生も同じ飛行機に搭乗されたこと、仙台空港の搭乗ロビーで、身体の不自由な方々専用のシートに座っていた生徒たちを校長先生自らのご指導で移動させていただいたこと（団長としては汗顔の至りであった）、そして、研修旅行2日目の平和祈念公園で、平和講話の講師久保田先生から「男女ともに素晴らしい聴講態度ですね」とお褒めの言葉をいただいたこと（これは嬉しかった）等々、いろいろなことが思い浮かぶ。実り豊かな研修旅行であった。

3. 『研修旅行のしおり』の内容その他の関係資料

(1) 研修の目的

- 事前準備を含むクラス別、班別活動を通じて、問題解決に必要な情報収集、処理能力を身に付け、協調性や自主性、責任感を養成する。
- 団体行動を通して、クラスや学年の和を培う中で、友情を深めると共に、集団行動の決まりや公衆道徳を身

に付ける。また、集団の構成員として健康管理や安全確保のあり方を考える。

- 沖縄の自然・文化・産業・生活などに触れることで視野を広めると共に、本件の風土と多面的に比較することにより、地域性や自然環境の違いを認識し、郷土と旅行先の素晴らしさや独自性を実感する。

(2) 緊急時の対応方法と連絡先

①緊急時が発生した時の対応

○怪我や体調が悪くなった時 ①応急手当が必要な時 ②休めば良くなりそうな時	⇒ 近くの店や通行人に助けを求め、救急車（119番）を呼ぶ。 ⇒ 休める場所に移動し、先生に連絡をする。
○トラブルに巻き込まれた時	⇒ 近くの店や通行人に助けを求め、警察（110番）を呼ぶ。
○集合時間に遅れそうになった時	⇒ 遅れそうと思った時点ですぐに先生に連絡をする。 ※もし、連絡が取れない場合、警察に捜査を依頼します。
○大地震・火災などの災害時 ①集団で行動している時 ②ホテル等で生活をしている時 ③自由行動など個別行動の時	⇒ 先生や添乗員さんの指示で避難する。 ⇒ 先生や添乗員さん、ホテルの方の指示で避難する。 ⇒ 乗り物に乗っている時は、係員の指示で避難する。 ⇒ 路上や建物内に居る時は、避難場所を自分で探し、移動する。
○その他、自分で判断できない時	⇒ すぐに先生に連絡をする。

②緊急連絡先（男子の例）

引率教員	電話番号	添乗員 (トップツアー株式会社 仙台支店)
団長 多賀 努 先生		
榎 統 先生 山本 尚武 先生		後藤 輝大 千葉 崇義
本田 京佑 先生 赤間 孝大 先生		

仙台育英学園高等学校（多賀城校舎：宮城県多賀城市高橋5-6-1） ☎022-368-4111

③宿舎の連絡先及び部屋番号

☆沖縄サンプラザホテル（ ）号室 那覇市安里138番地 TEL：098-866-0920	☆ホテルリゾネックス名護（ ）号室 名護市字山入端247-1 TEL：098-053-8222
--	---

※良くない話、悪い話ほど早く連絡し、どう対応すべきかを確認しましょう。

何もしないで放っておいても、事態は悪化するだけです。

(3) 沖縄研修旅行の注意事項及び禁止事項

①注意事項

- 集合時間を必ず守ること。（5分前行動を心掛け、他人に迷惑をかけてはいけない。）
- 貴重品の管理には十分に注意すること。（必要のないものは持ってこないこと。）
- 飛行機やバス等、乗車時のマナーを守ること。
- 研修旅行に取り組む姿勢として、常に責任のある行動をとること。
※「仙台育英学園高等学校の生徒」である事を自覚して責任のある行動をとること。
- 体調管理はしっかりすること。

②禁止事項

- 頭髪不良（茶髪、金髪、染色、脱色、ツーブロック等）。
- アクセサリ（ピアス・ネックレス・ネイル。プレスレット、指輪等）
- 服装等 男子＝サイズの違うブレザーやズボン、ズボンの腰ばき、靴のかかと潰し等
女子＝短いスカート丈、靴のかかと潰し、化粧等

○無断外出

○その他(万引き行為、器物破損、飲酒、喫煙等)の非行、問題行動。

以上を含め、常識的に問題とされる行動は、一切禁止します。

③ホテル内での過ごし方

○部屋にある備品(掛け軸や置物等)は、絶対に破損する事のないよう注意する。

※派手な服装等は、一切認めないので注意する。

○夜中に騒いだり、他の部屋に入らないこと。

○部屋はきれいに使う事。ゴミは散らかさず、きちんと分別して捨てる。

○念のため、非常口、避難経路を確認しておく。

※ただし、ベランダ、屋上、非常口には出ないこと。

④見学場所・体験学習場所での行動

○展示物には絶対手を触れないこと。

○研修旅行であるため、筆記用具としおりを常に持参しておくこと。

○飲食および飲食物の持ち込みが禁止になっている施設では、まぎらわしい行動も含め、飲食行動をしないこと。

⑤飛行機搭乗に関する注意点

※飛行機に乗る際、手荷物検査があります。座席への手荷物の持ち込みについては、さまざまな制約がありますので、常識的に考えて、不要なものは持ち込まない事。

(例) ○制汗スプレー等、ガス性の缶類(発火の恐れのある物はダメです。)

○はさみ、カッター等の刃物。(特に鋭利な金属もダメです。)

○封の開いた飲み物。(確認の取れない液体物もダメです。)

○その他、詳しくは『国土交通省空港局』の注意点をご覧ください。

○機内(乗車席)への各個人の荷物の持ち込み量は、一人20kgまでです。

※帰り、荷物が多い場合は宅急便で自宅に送ってください。有料です。

⑥バスの乗車マナーについて

○バスガイドさんや運転手さんには元気よく挨拶をし、話をしっかりと聞くこと。

○大声を出したり、モノを投げたり、窓から手や顔を出さない。

○自分で食べた物のゴミ、紙くずは休憩所で捨て、いつも身の回りを清潔にしておく。

○休憩所で必ずトイレに行っておく事。気分が悪くなったら、先生にすぐに申し出ること。

🌸 持ち物 🌸

忘れ物が無いよう、□にチェックしながら準備しよう!!

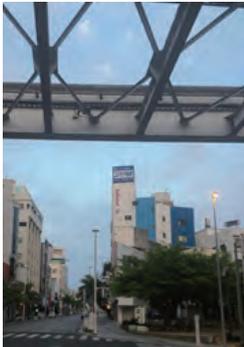
- | | | |
|--|--------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> 生徒手帳 | <input type="checkbox"/> 健康保険証 | <input type="checkbox"/> 着替え(制服の着替え) |
| <input type="checkbox"/> 筆記用具 | | <input type="checkbox"/> 着替え(下着等) |
| <input type="checkbox"/> 研修時の持ち歩きバック | | <input type="checkbox"/> 学校ジャージ(上/下) |
| <input type="checkbox"/> 研修のしおり | | <input type="checkbox"/> 洗面具、タオル、バスタオル |
| <input type="checkbox"/> プレザー(行き帰りは必着用。) | | <input type="checkbox"/> 常備薬、体温計等 |
| <input type="checkbox"/> 雨具(天気予報では雨が降ります。) | | <input type="checkbox"/> 小遣い(上限万円程度迄) |
| | | <input type="checkbox"/> 水着(体験学習のみで使用) |

(4) 行程表(男子の例)

※女子は4月13日(木)出発。スナップ写真は研修終了後に、場所に合わせて挿入した。

☆1日目 4月14日(金)

時間	研修場所	備考
10:30 11:55	仙台空港 仙台空港 発	集合場所: 仙台空港1F 中央噴水広場
11:55~ 14:55	那覇空港 着	ANA1863便 昼食は機内にて(弁当持参)

15:40～ 16:20	那覇空港～ホテル	バス移動（貸切バス） 
17:00～ 19:00 	国際通り散策・夕食 	各自夕食を済ませて 19:00までに ホテルに戻ることに！ 

☆2日目 4月15日（土）

時間	研修場所	備考
7:00～ 7:20～ 7:40～	朝食（F1・2・3） 朝食（F4・K1） 朝食（K2・3・4）	朝食場所は2F 「サンサモア」 
8:30～ 8:50	ホテル～旧海軍司令部壕	バス移動（貸切バス）
8:50～ 9:30	旧海軍司令部壕見学	
9:30～ 10:10	旧海軍司令部壕～ 平和記念資料館・平和の礎	バス移動（貸切バス）
10:10～ 11:50	平和記念資料館 平和の礎見学 	
12:00～ 13:00	昼食（タコライス）、優美堂 	昼食&ショッピング 

13:00～ 13:40	優美堂～ホテル	バス移動（貸切バス）
13:50～ 18:40	自主研修（主に国際通り） ※おススメは首里城！	各自夕食を済ませて19:00までに ホテルに戻ることに
		

☆3日目 4月16日（日）

時間	研修場所	備考
7:00～ 7:20～ 7:40～	朝食（K2・3・4） 朝食（F4・K1） 朝食（F1・2・3）	朝食場所は2F 「サンサモア」
8:30～ 10:10	ホテル～沖縄海洋博記念公園 （美ら海水族館） 	バス移動 （貸切バス） 
10:10～ 12:45	沖縄海洋博記念公園見学 	昼食は園内で各自 ※イルカショー 11:00～ （見学自由） 
13:00～ 16:00	もとぶ元気村（各自体験学習） 	
16:00～ 16:40	もとぶ元気村～ホテル	バス移動 （貸切バス） 
16:40～ 19:00	夕食 BBQ ※雨天時はバイキング 	

☆4日目 4月17日（月）

時間	研修場所	備考
7:00～	朝食	別館3F「レストラン」
8:00～ 9:50	ホテル～おきなわワールド～ 	バス移動（貸切バス）
9:50～ 11:30		※スーパーサイエンスショー 10:30～（見学自由）
11:30～ 12:10	～那覇空港	バス移動（貸切バス） 荷物を忘れずに！ 
12:10～ 14:10	那覇空港	昼食は各自 お土産を買ってもよし！
14:10～ 16:50	那覇空港～仙台空港	ANA1864便

(4) 英進進学コース 沖縄研修旅行報告

英進進学コース 渡邊 光稀

1. はじめに

英進進学コース第三学年の本年度の校外研修旅行は、女子4月9日（日）から4月12日（水）、男子4月10日（月）から4月13日（木）までの3泊4日の日程で、沖縄県において実施されました。生徒はこの研修旅行を通して、東北地方と異なる沖縄県の文化や自然に触れながら、太平洋戦争の悲惨な状況や歴史を理解し、平和の大切さを学ぶことができました。研修中大きな問題もなく、参加生徒全員が無事に充実した研修を行う事ができましたので、ここにご報告致します。

2. 研修目的

- (1) 日本最南端である沖縄の歴史と自然に触れ、独特の文化や産業についての理解を深める。
- (2) 平和祈念資料館や首里城、沖縄国際大学での研修を通して太平洋戦争（第二次世界大戦）中の悲惨な状況や、戦後の本土とは異なる歴史を理解し、平和であることの尊さを感じ、平和を希求することの重要性に思いをはせる。
- (3) 集団行動を通じて、きまりを守り、生徒同士、または生徒と教師の人間的な交流を深め協調性を養う。
- (4) グループ活動を通じて、互いに助け合い、連帯感を培い、また自分の体調を自分で管理自制する。
- (5) 公衆道徳を守り、一人の社会人として社会性を身につける。

3. 研修日程

男子 平成29年4月9日（日）～平成29年4月12日（水） 3泊4日
女子 平成29年4月10日（月）～平成28年4月13日（木） 3泊4日

4. 参加者

平成29年度 英進進学コース第3学年生徒 計128名（男子84名、女子44名）
引率教員 男子計5名（佐々木伸 大内一徹 高橋康太 八矢康徳 休石祐実子）
女子計2名（佐々木真野 渡邊光稀）

5. 行程

第1日目

10:30 仙台空港1階中央噴水広場 集合
10:55～ 仙台空港 発（昼食は機内）
14:55～ 那覇空港 着
16:20～ 旧海軍司令部壕
17:20 ネストホテル那覇 着

第2日目

8:30 ネストホテル那覇 発
9:20～ 平和祈念資料館・平和の礎
11:30～ 優美堂（ショッピング）
12:40～ 那覇市内にて自主研修
19:00 ネストホテル那覇 着

第3日目

8:30 ネストホテル那覇 発
8:55～ 沖縄国際大学
12:10～ イオンモール沖縄ライカム

14:50～ 沖縄海洋博記念公園（美ら海水族館）
17:20 ホテルリゾネックス名護 着

第4日目

8:00 ホテルリゾネックス名護 発
9:30～ おきなわワールド
12:10～ 那覇空港 着（昼食は弁当）
14:10～ 那覇空港 発
16:45～ 仙台空港 着
17:15 仙台空港 解散

6. 宿泊地

ネストホテル那覇

〒900-0036 沖縄県那覇市西1-6-1 TEL 098-868-1118

ホテルリゾネックス名護

〒905-0008 沖縄県名護市字山入端247-1 TEL 0980-53-8021

7. 研修旅行記録

第1日目

10時30分に予定通り仙台空港1階の噴水広場に集合し、11時55分に仙台空港を出発しました。生徒は、初めて飛行機に乗るといふ人も多く、緊張していましたが、添乗員の方々や引率教員の説明を静かに聞き、無事に沖縄に向けて出発することができました。機内では飛行機が初めての生徒が離陸と同時に歓声を上げ、沖縄への旅の始まりを楽しんでいました。



写真1：仙台空港出発



写真2：那覇空港到着

14時55分に那覇空港に無事到着し、今度はバスにて旧海軍司令部壕に向かいました。飛行機とバスを乗り継いでの長旅でしたが、生徒はまだまだ元気いっぱい、窓から見える沖縄の町に興奮していました。バスの中では、沖縄のバスガイドさんが、「シーサー」などの沖縄の文化について説明をして下さいました。



写真3：バスの中での様子

研修地1：旧海軍司令部壕

16時20分頃、旧海軍司令部壕に到着しました。

旧海軍司令部壕は昭和19年（1944年）、日本海軍設営隊（山根部隊）によって掘られた司令部壕で、当時は450mあったと言われていました。カマボコ型に掘り抜いた横穴をコンクリートと杭木で固め、米軍の艦砲射撃に耐え、持久戦を続けるための地下陣地で、4000人の兵士が収容されていました。戦後しばらくは放置されてい

ましたが、数回に渡る遺骨収集の後、昭和45年（1970年）3月、観光開発事業団によって司令官室を中心に300mが復元されました。壕内は薄暗い通路が無数に張り巡らされており、迷路のようになっています。司令官室の壁面には、大田司令官の言葉が静かに残されています。生徒は、ここで人が死んだという事実を考えながら、狭くて暗い壕の中を歩いて行きました。時折、兵士がいたであろう場所に手を合わせる生徒の姿も見えました。



写真4：旧海軍司令部壕

第2日目

8時に朝食を食べ、8時30分にネストホテル那覇を出発し、本日最初の見学地である平和祈念資料館・平和の礎に向けて、バスは出発しました。体調を崩すような生徒もいなく、生徒はまだまだ元気があり余っているほどでした。9時30分頃に平和祈念資料館に到着しました。生徒はバスガイドの方の説明を聞き、建物の前でいっせいに手を合わせていました。沖縄県平和祈念資料館は戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、全世界の人々に「沖縄のこころ」を訴え、もって恒久平和の樹立に寄与する、という目的のために設立されました。資料館の中には、「沖縄の人々から見た戦争」をテーマに、戦争の悲惨さを伝える様々な展示があります。展示の仕方はさまざま、沖縄戦の映像や、写真、蠟人形での再現、実際の当時使われていたもの、戦争の体験談などが、全て事実を「そのまま」展示されていました。



写真5：いっせいに手を合わせる生徒達



写真6：平和の広場

午前中は、戦争の悲惨さや凄惨さ、そして平和の大切さをその身で受け止め、学ぶ研修が多く、生徒の表情もずっと重いままでしたが、12時頃に優美堂に着き、生徒の表情にも元気と明るさが戻りました。優美堂は、昨年研修旅行で訪れたひめゆりの塔の向かいにある老舗土産店で、様々な土産品が並び、生徒もその品揃えの多さに興奮していました。この優美堂の2階で昼食の沖縄名物タコライスを食べ、生徒もやっと一息つけたようでした。

研修地3：国際通り付近、首里城付近：自主研修

12時40分頃から、生徒は国際通り付近で自主研修となります。このために、生徒は昨年度からこつこつと班ごとに沖縄の文化や歴史を調べ、自主研修の計画について話し合ってきました。集合時間である19時まで、生徒は慣れない沖縄の町を、自分達で立てた計画をもとに探索します。沖縄県の街並みは、地域によって大きく異なります。沖縄の中心で都会的な那覇、琉球王国時代の雰囲気を残す首里、アメリカ的な中部、豊かな自然がいっぱいの沖縄本島北部ヤンバル、すばらしい海に囲まれた宮古・八重山など、場所によって色々な特色があります。

自主研修地1：国際通り

国際通りは自主研修の中心地で、ほとんどの生徒が自主研修の計画に入れていました。那覇市の中心となる約1.6kmほどの通りで、「奇跡の1マイル」と呼ばれるほど、第二次大戦で焼け野原になった沖縄の復興の象徴となりました。脇にある「市場本通り」や「平和通り」とともに、見て歩くだけでも十分楽しめる場所です。メインの通りを歩くと数々のお土産品展が立ち並び、生徒は買い物を楽しむと同時に、沖縄の街の雰囲気を味わって

いました。

自主研修地2：首里城

首里城は、琉球王国の居城として15世紀から廃藩置県まで約500年にもわたって沖縄の政治、外交、文化の中心地となっていました。首里城は1945年の沖縄戦で焼かれてしまいましたが、1992年に沖縄の本土復帰20周年を記念して国営公園として復元され、今回私達が訪れた今の首里城となりました。復元は、18世紀以降の姿をモデルにしています。また、中国と日本の築城文化を融合した独特の建築様式や石組み技術には、高い文化的・歴史的価値があるとされ、首里城跡は2000年の12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の1つとして世界遺産に登録されました。国営公園は、首里城正殿を中心として、守礼門や園比屋武御嶽石門（そのひゃんうたきいしもん）円覚寺跡などの文化財からなります。鮮やかな朱色に彩られたその姿は、王国の歴史、文化の息吹を伝える沖縄のシンボルそのものといえるでしょう。



写真7：首里城付近



写真8：首里城付近



写真9：首里城



写真10：首里城の模型

生徒は自主研修のとき、沖縄で最も有名な観光地である首里城跡地や国際通りを散策し、からだ全体で沖縄の空気や文化を感じようとしていました。残念ながら今回、首里城は修復中でしたが、それでも首里城の威風堂々たる姿には生徒全員が感動し、展示物を通して沖縄の歴史や文化にさらに興味がわいたようでした。

第3日

3日目の研修地は沖縄国際大学、イオンモール沖縄ライカム、沖縄海洋博記念公園の三か所を巡ります。沖縄の暖かい気候にも慣れ、今日の研修内容に胸を躍らせ、出発を待ち望んでいる様子でした。8時30分にホテルを出発し、沖縄国際大学に向けて出発しました。

研修地4：沖縄国際大学

9時50分頃、沖縄国際大学に到着しました。沖縄にはアメリカ軍の基地が町中に普通にあり、沖縄の人にとって「基地がある日常」は当たり前となっています。現役大学生が行う平和ガイド「スマイライフ」は、普天間基地に隣接している沖縄国際大学の学生達が2006年に結成したサークルで、嘉数高台公園内にある戦跡や普天間基地が一望できる展望台を巡り、平和についてともに考え、語り合う体験プログラムです。

研修は、班に分かれて行われ、大学到着後に沖縄国際大学の説明会を聞き、嘉数高台で展望台、トーチカ、3つの塔を大学生の解説を聞きながら見学していきました。途中小降りの雨が降ったりもしましたが、生徒は、歳が近い大学生の話を真剣に聞き、戦争の事実と基地の現状を深く考えることができました。展望台からは、普天間基地でアメリカのヘリコプター「オスプレイ」が飛ぶのを見ることができ、東北にはない「基地」というものを実感することができました。



写真 11：校門



写真 12：説明を聞く生徒達



写真 13：裁判体験



写真 14：米軍ヘリコプター墜落地



写真 15：大学敷地内

11時過ぎに沖縄大学を後にし、12時10分頃にイオンモール沖縄ライカムに到着しました。生徒はここで各自昼食を取り、買い物をすることができます。イオンモール沖縄ライカムは、在日米軍専用ゴルフ場だった泡瀬ゴルフ場跡地で行われたアワセ土地地区画整理事業区域の商業ゾーンに建設され、沖縄県内最大の商業施設となりました。施設は、沖縄の伝統的な家屋に見られる赤瓦をイメージしたデザインをしており、観光にも向けられたリゾートモールとしても位置付けられています。施設の入り口には、まるでリゾートホテルのようなアライバルゲートがあるほか、シーサーが各所に配置され、非常に沖縄のイメージに合っています。また、イオンモールに入っただけで大きな水槽に驚かされます。水槽容量100tを超える鑑賞用大水槽には、大小様々な色とりどりの魚が泳いでいます。ちなみに「ライカム」とは、かつて北中城村比嘉地区におかれていた琉球米軍司令部 (Ryukyu Command headquarters) の略に由来しています。生徒は施設の大きさに驚きながら、昼食に各々で選んだ沖縄の名物に舌鼓をうっていました。



写真 16：施設の入り口のシーサー像



写真 17：入口付近巨大水槽

研修地6：沖縄海洋博記念公園・美ら海水族館・オキちゃん劇場

イオンモール沖縄ライカムで昼食を食べ、少しお土産を見るための自由時間をとった後、13時過ぎに出発しました。そして15時頃に、本日の最終目的地である沖縄海洋博公園・美ら海水族館に到着しました。

沖縄海洋博記念公園は、昭和50年に開催された沖縄国際海洋博覧会を記念して昭和51年8月に博覧会跡地に設置された国営公園です。今回の研修旅行で訪れた美ら海水族館は公園の3つのエリアのうち、海のエリアにある世界最大級の水族館です。館内では、世界最大級の魚ジンベエザメをはじめとして、マンタや大型のサメ・エイ類を飼育している巨大水槽「黒潮の海」、太陽の光がサンゴ礁に降り注ぐ神秘的な水槽「サンゴの海」、まだまだ謎に包まれた沖縄の深海を再現した「深海の海」など、魅力的な水槽を通して沖縄の海を丸ごと体験することができます。美ら海水族館は、沖縄周辺の海の水面から推進700m付近までを再現し、光・水質・透明度などの様々な要素をできるだけ自然の海に近いものに保っています。海岸から沖合、黒潮、さらに深海へと館内に訪れた方々が旅する形で沖縄の自然を疑似体験し、沖縄の海のすばらしさや大切さを体験・体感できるようになっています。



写真 18：美ら海水族館①



写真 19：美ら海水族館②



写真 20：美ら海水族館③



写真 21：美ら海水族館④



写真 22：オキちゃん劇場①



写真 23：オキちゃん劇場②

特に生徒に人気があったのは、やはり巨大なジンベエザメが威風堂々と泳ぐ巨大水槽でした。ちょうど研修中にジンベエザメの餌やりの時間「もぐもぐタイム」があり、多くの生徒が足を止めてその迫力ある光景をずっと眺めていました。また、美ら海水族館のすぐ近くにある「オキちゃん劇場」では、青い海をバックにオキゴンドウやバンドウイルカの楽しいショーを行っています。ショーを通して、イルカの生態や能力も解説してくれるので、海の生物や環境を生徒が興味を持つきっかけになればと思いました。

17時30分頃に宿泊するホテルリゾネックス名護に到着し、班長会議が終わった後に、19時の夕食までホテルの浜辺で遊ぶ時間ができました。海で泳ぐことはできませんが、生徒達は思い思いに浜辺を散策したり、遊んだりして、沖縄の海を五感で感じていました。

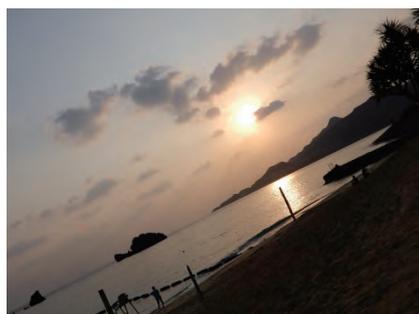


写真 24：ホテルの浜辺①



写真 25：ホテルの浜辺②

夕食は綺麗な浜辺でバーベキューをしました。サンセットを見ながらのバーベキュー、長いようで短かったこの研修旅行の思い出話を友達同士でしながら、夕食を楽しんでいました。



写真 26：バーベキュー①



写真 27：バーベキュー②



写真 28：バーベキュー③

生徒の顔にも疲れが見え始めていましたが、体調を大きく崩す生徒はおらず、順調に研修旅行が進んでいます。おいしいご飯を食べ安心したのか、やはり疲れていたのか、その日は完全消灯時間の前に寝る生徒が多く、みんなぐっすりと休んでいました。

第4日目

ついに研修旅行も最終日となりました。朝食を7時に食べ、8時にはホテルリゾネックス名護を出発しました。生徒は本日で研修旅行が最後ということで、どことなく寂しそうな顔をしていました。

研修地7：おきなわワールド

9時30分頃、研修旅行の最終目的地であるおきなわワールドに到着しました。その後、おきなわワールドの中の玉泉洞という鍾乳洞に入りました。初めて鍾乳洞に入る生徒も多く、石灰岩の神秘的な形に感動しながら、地下水の流れる薄暗い洞窟を進んでいきました。出口に着き、外の明るさに驚きながらおきなわワールドの中に入っていました。おきなわワールドは、沖縄の自然、芸能、文化をまるごと体験できる観光施設です。国指定有形文化財に認定された赤瓦の美しい街並みの「琉球王国城下町」、各種工芸体験、沖縄に棲む毒蛇・ハブをテーマにした「ハブ博物公園」、100種類、450本の熱帯果樹園「熱帯フルーツ園」などが楽しめます。



写真 29：おきなわワールド①



写真 30：おきなわワールド②



写真 31：おきなわワールド③

おきなわワールドで公開される「スーパーエイサー」は、民族芸能の粋が詰まった素晴らしいものでした。生徒は沖縄最後の研修地であるおきなわワールドで、古き良き沖縄に思いをはせて、この研修旅行で得た様々な体験を思い出し、思いっきり楽しんでいました。

長かった3泊4日の旅もあとは帰るだけとなりました。空港に向かうバスの中では、4日間お世話になったバスガイドさんとの別れを惜しむ声も少なくありませんでした。バスを降りて運転手さんとバスガイドさんにお礼を言い、12時10分過ぎ、予定通りに那覇空港に到着しました。生徒はお弁当を配られ、集合時刻まで昼食と買い物となりました。14時10分に無事に那覇空港を発つことができました。

仙台空港には16時45分に到着し、生徒もくたくたになりながら、解散式で最後の注意事項を聞き、17時15分には無事帰路に着くことができました。この研修旅行を通して、生徒達は若い心でどんなことを考え、どんなことを感じ、どんな思い出をつかったのか、そしてそれらが生徒達の未来にどう影響するのかはわかりませんが、この研修旅行でたくさんの大切なことを学んだのは、帰る際の生徒達の表情をみれば明らかだと思います。以上、平成29年度英進進学コース沖縄研修旅行記録を報告致します。

8. 謝辞

今年度は英進進学コースの3度目の研修旅行となりましたが、今年度もこの沖縄研修旅行をより良いものにし、生徒が事故なく貴重な体験ができるよう、早くから東武トップツアーズの方と綿密に打ち合わせをし、自主研修の計画、しおりの作成など準備をして参りました。まず、様々な安全確認から移動手段の確保に到るまで、多くの配慮を賜りました加藤雄彦理事長・校長先生に心より御礼申し上げます。また、多くの打ち合わせを行い、この研修旅行を形にさせていただいた東武トップツアーズの後藤さんはじめ、添乗していただいた方々、現地バス、ホテル、各施設のスタッフの方々、先生方、そして本学園の指導方針に多大なるご理解をいただきました保護者の皆様に深く感謝申し上げます。この研修旅行において、事故もなく生徒がみんな元気に帰ってくることができたのも、以上の方々の細やかな心配りや、温かい対応によるものだと思います。最後になりましたが、今回このような研修旅行の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

英進進学コース 韓国研修旅行報告

英進進学コース 狩野 常俊

◎研修日程

男子：平成29年4月9日（日）～平成29年4月12日（水） 3泊4日
女子：平成29年4月10日（月）～平成29年4月13日（木） 3泊4日

◎参加生徒・引率教員

男子生徒29名、女子生徒26名 計55名
男子引率教員3名：眞山 晴夫、渥美 琢、尹 惠靖
女子引率教員2名：狩野 常俊、門脇 明子
※尹 惠靖は男子生徒帰国後、女子に合流

School Excursion in Korea 2017



旅行のしおり表紙

研修旅行の目的

- (1) アジアの隣国として経済的にも文化的にも関係の深い韓国の自然や文化についての理解を深める。
- (2) 広く世界に目を向け、将来世界に羽ばたく逞しい青年として、成長する契機となれるような機会にする。
- (3) 集団行動を通じて、決まりを守り、生徒同士、または生徒と教師の人間的な交流を深め、協調性を養う。
- (4) グループ活動を通じて、互いに助け合い、連帯感を培い、また自分の体調を自分で管理自制できるようにする。
- (5) 公衆道徳を守り、一人の社会人として社会性を身につける。

旅行行程

第1日目

仙台空港集合（2階国際線出発ロビー）10:40
仙台空港 12:40発……<OZ-151便>……ソウル（仁川空港）15:10着
ホテル到着後夕食会場へ移動 夕食「プルコギ1.5人前」18:00～19:00
夕食後「南山公園」へ移動。市内夜景鑑賞……散策後ホテルへチェックイン
宿泊ホテル 男子：《ホテルクラウン梨泰院》 女子：《仁寺洞クラウンホテル》

第2日目

7:00朝食後「統一展望台」へ移動。見学（9:00～10:00）
ソウル市内へ移動 昼食「石焼ビビンバ」（11:30～12:30）
ソウル市内観光（13:30～17:30）
（青瓦台、北岳スカイウェイ、仁寺洞、免税店ショッピング）
※女子のみ韓国民族衣装着付け体験
夕食「海鮮鍋」（18:30～19:30）
夕食後移動専用劇場で「NANTA鑑賞」（20:00～21:30）

第3日目

7:00朝食後、現地大学生との対面式「ソウル市内自主研修（体験）ツアー」
5～6人1班で大学生ガイド同行し生徒達が研修場所を事前に学習し大学生と交流しながらソウル市内を研修。
夕食レストランへ移動。夕食「カルビ1.5人前+冷麺」（18:30～19:30）
徒歩で散策しながらホテルへ移動

第4日目

男子：6:00ホテルチェックアウト
韓国食料品店で新鮮キムチ等ショッピング後、仁川空港へ移動
仁川空港9:00発……………<OZ-152便>……………仙台空港11:00着 解散
女子：7:00朝食
午前中ソウル市内観光（景福宮、民族博物館）
韓国食料品店で新鮮キムチ等ショッピング後、仁川空港へ移動
仁川空港15:00発……………<OZ-152便>……………仙台空港17:00着 解散

【研修旅行記録】

第1日目

10:40予定通り全員仙台空港2階 国際線出発ロビーに集合し
12:40に仙台空を出発、飛行機での旅が初めての生徒が多く、離陸と共に歓声上がる。

15:10予定通りソウル仁川空港に無事到着。バスでホテルへ移動し、車内で滞在中の注意や案内、お金の両替等をする。ホテル到着後各自の部屋を確認後夕食会場へバスで移動。夕食はプルコギ1.5人前とキムチの食べ放題で生徒たちは盛り上がる。

19:30再びバスで「南山公園」へ移動バスから降りて、かなり急な坂道を上り公園に到着。すでに辺りは夜。公園内のソウルタワーにほとんどの生徒が昇る（自由）。（高所恐怖症の門脇先生は昇らず）皆、市内の夜景を存分に満喫する。



プルコギ1.5人前



タワーの前で



坂からタワーを望む

南山公園



ソウル市の中区(チュング)と竜山区(ヨンサング)という二つの区にまたがっているこの公園は、小さな広場的なものではなく南山の一角を言います。面積はなんと295万8,864平方m(約89万6625坪)!この中には憩いの場として広場的なものだけでなく、図書館や記念館、博物館などの教養施設、またプールや野球場、卓球場、バドミントン場などのスポーツ施設も含まれています。南山公園を訪れる人は年間で840万人にも上ると言われ、つまり一日平均で約2万3000人もの人が南山にやってくる計算に!南山は海拔265mで高さこそそう高くはありませんが、市の中心

部にあり、ソウルを象徴する山としてその存在感は相当たるもの!タワーをはじめとした観光スポットがあり、散策をすることもできる公園です。

Nソウルタワー



「南山公園」のミドコロのなかでも主役的存在なのはやっぱりこのNソウルタワー!ソウルの象徴として親しまれているこのタワーは「超」がつくほどの有名観光地。タワー自体は236.7mですが、南山の上に立っているのでソウル全体を一望するのにぴったりなスポットです。観光客だけでなく地元ソウルっ子にも人気で、家族の行楽やカップルのデートにも使われているこのタワー、上には展望台だけでなくレストランもあります。

第2日目

7:00朝食後、8:00バスで約1時間移動、「統一展望台」に到着。北朝鮮が川の向かい側に見える。望遠鏡で覗いて見たが人影らしき者は確認できなかった。ガイドさんの説明に生徒達も納得。それぞれ何かを感じた様子でした。





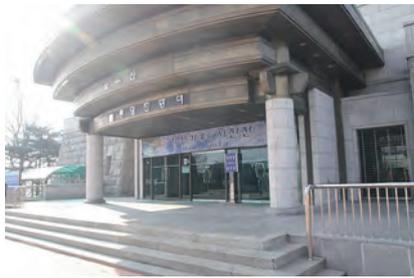
統一展望台入口



統一展望台内

統一展望台

事前チェックやパスポートのチェック、誓約書なども一切必要なく、写真撮影の制限もなく、韓国人でも外国人でも誰でも入ることができるオドゥサン統一展望台。展望台はソウルの真ん中を流れる漢江（ハンガン）と、北朝鮮と韓国の間を流れる川、臨津江（イムジンガン）の合流地点にある高台にあります。ここは古代の城跡とも言われ、近くでは百済の土器などが発掘され、文化財にも指定されています。この展望台から北朝鮮までは直線距離でたった約2.1km！展望台の前方には北朝鮮の宣伝村と呼ばれる街並みが広がっています。



屋上（展望台）

屋外にある展望台。ここから北朝鮮を一望できます。天気が良いと実際に北朝鮮の人が歩いている光景を見ることができます。設置された望遠鏡を通して、北朝鮮の学校や人々の姿をしっかりとることができます。



2階（統一展示館、資料映像室、食堂、売店）

資料映像室では1回に30分程度の北朝鮮や安保関連の動画を上映。また統一展示館では統一地形図や南北間の交渉の歴史がパネルで展示されています。また北朝鮮の名産も販売している売店もあります。

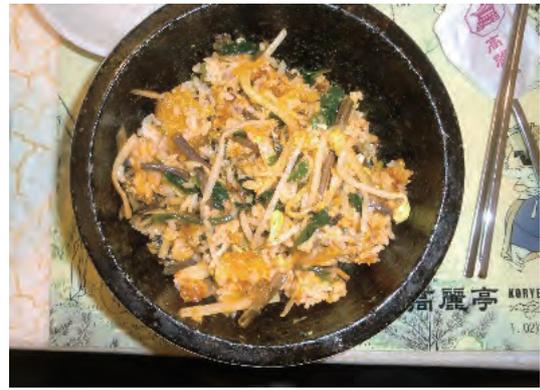


3～4階（展望室、映像室）

北朝鮮を一望できるガラス張りの展望室と映像室があり、英語、中国語、日本語、韓国語の順で映像を流しています。映像を通して、この展望台について、また北朝鮮と韓国の関係などについて知ることができます。



10:00、見学終了後再びバスで市内へ移動。市内に近づくにつれ、3車線ある道路はかなりの渋滞。11:30昼食会場に到着。昼食は「石焼ビビンバ」プラスまたまたキムチの食べ放題。再び生徒は大歓声。実に食欲旺盛でした。



12:30 昼食後再びバスで観光。北岳スカイウェイ、青瓦台等見学しながら市内に戻る。バスを降りて仁寺洞・免税店ショッピング等。女子は韓国伝統衣装（シマチョゴリ）を借りて記念撮影。ここかなりの盛り上がりでした。



インサドン 仁寺洞



日本で古都の雰囲気を楽しみつつ、センスある伝統小物のショッピングや伝統スイーツなど楽しめる場所といえば、やっぱり京都でしょうか。韓国でそのイメージの街というとやっぱりココ、仁寺洞（インサドン）です。壮麗な王宮からスグ、通りには骨董品から伝統アレンジ小物の洒落たお店、裏路地には昔ながらの食事どころに雰囲気のいい韓スイーツ&伝統茶のお店などがずらっとあります。最近ではコスメショップや西洋系のコーヒーショップなども登場しましたが、看板は規制によりすべてハンゲルで書かれています。おかげで、古都の雰囲気がかもし出されています。明洞からも近く、歩きやすい街です。

仁寺洞散策後バスで夕食会場へ移動。夕食は「海鮮鍋」これも美味しい食事でしたが、海鮮が苦手な生徒もいて意見が分かれる夕食でした。(18:30～19:30)



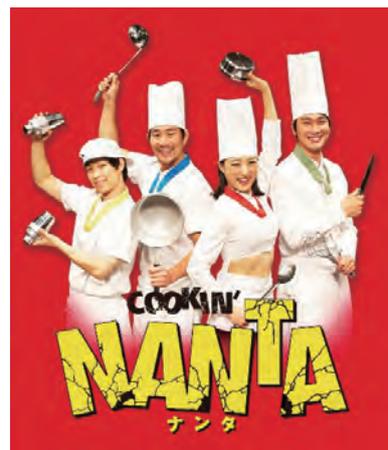
夕食後専用劇場で「NANTA」を鑑賞。演技の迫力に生徒は満足した様子。開始と同時に「歓迎・仙台育英学園高等学校」の字幕がスクリーンに写し出され、皆歓声を上げる。



NANTA

NANTAは韓国の伝統的なリズムであるサムルノリのリズムを素材にして、キッチンで起こる出来事をコミカルにドラマ化した老若男女誰でも気軽に楽しめる韓国の非言語公演（Non-verbal performance）です。1997年10月の初公演から爆発的な人気を獲得し、海外デビューの舞台である1999年エディンバラ・FRINGE・フェスティバルでも最高評価を獲得する。以後、海外公演を足場とし、2004年2月にはアジア公演として初めてニューヨークブロードウェイへの進出を果たした。韓国観光公社が選定する「ソウル10大見どころ」にも選定。さらに2009年6月には「ソウル市最優秀プログラム賞」を受賞するなど、韓国を代表する観光名所として多くの人に愛されています。

終了後、徒歩で移動。道路には沢山の食べ物の出店が並び、まるで仙台七夕のようなにぎわいに圧倒される。



第3日目

7:00 朝食 ホテルロビーにて現地大学生と対面式。

9:30～17:30 現地大学生と一緒にソウル市内班別研修にてかける。

17:30 予定通り全部の班がホテルに到着。どの班も大学生と打ち解け、満足した様子で、皆で写真を撮り合ったりして別れを惜しんでいた。



ホテルロビーで打ち合わせ



ホテルに無事帰館

18:30～19:30 移動して夕食。「カルビ 1.5人前+冷麺」最後の夕食も大満足でした。



第4日目

飛行機の関係で、男子は6時にホテルを出発し途中韓国食料品で新鮮キムチ等のショッピングをした後仁川空港を9:30発＜OZ-152便＞で帰国の途に就く。

11:40 予定通り仙台空港到着し、現地解散。

女子は午後の便のため午前中ソウル市内観光。景福宮・民族博物館を見学。

景福宮



景福宮は1395年（太祖4年）創建された朝鮮王朝の正宮。1392年、朝鮮を建国した李成桂（イ・ソンゲ）は首都遷都を決定し、即位から3年後の1395年、高麗の首都だった開京（ケギョン・現在の開城（ケソン））から首都を漢陽（ハニャン、現在のソウル）に移転。景福宮はその過程で造られた宮殿で、現在の青瓦台（チョンワデ・大統領官邸）のような機能を果たすまさに、王朝の心臓部でした。ちなみに景福宮の「景福」は「詩経」に出てくる言葉で、王とその子孫、すべての人民（百姓）が太平の御代の大きな幸せを得ることを願う、という意味。

民族博物館

国立民俗博物館は、「韓民族の生活史」「韓国人の日常」「韓国人の一生」の3つの常設展示室からなっています。また、韓国のみならず外国の民俗も含め多様なテーマを扱っている企画展示室や、70～80年代の街並みなどが再現された野外展示、博物館に寄贈された品々を様々なテーマで展示した寄贈室などもあります。各展示室は映像や音などが効果的に使われ、また体験コーナーも所々に設置してあります。



景福宮にて①



景福宮にて②

終わりに

2学年の2学期頃、急に「韓国研修」の希望者を募りなさいとの指示があり、早速募ったところ55名の希望者が出ました。北朝鮮との緊迫した社会情勢の中、希望者が何人出るだろうと思っていましたが思いのほか多い人数に驚きました。

私をはじめ、生徒も初めての韓国行きで、多少の不安と緊張の中での研修旅行でした。北朝鮮のたび重なるミサイル発射を、韓国国民はどう感じているのかという興味も持っていたのですが、まったくの取り越し苦労に終わりました。北朝鮮との国境線の「統一展望台」に立ち、韓国側の整備された高速道路に対し、川を隔てた北朝鮮の木も生えていない殺風景な丘（森？）を見たとき、何とも言えない気持ちになりました。

ソウル市内は車線数も多いのにいつも渋滞しており、さらに高級車がほとんど。軽自動車やワゴンタイプの車はめったに見られませんでした。バスガイドさんに聞いてみると「皆さん見栄っ張りなんではないですかね」と話していました。

生徒の多くは韓国料理に大満足の様子でした。また、心配していた自主研修も現地の大学生との交流もうまくいき、充実した一日になったようです。

最後になりましたが、今回の研修にあたり、様々な方々のご協力を頂きました。この紙面をお借りして御礼を申し上げます。以上で研修報告といたします。

(5) 外国語コース 第1学年ハワイ研修報告

外国語コース 岩渕 奈央

丹野まさよ

1. はじめに

今年度の外国語コース第1学年のハワイ研修は2班に分かれて実施いたしました。例年通り、グローバル・ビレッジにて語学研修を行い、アクティビティではハワイの様々な場所を訪れ、多くの体験をしていく中で異文化を学ぶことができました。

2. 研修期間と参加人数および引率教員

- ・第1班
平成29年11月4日（土）から11月17日（金）
参加人数 17名
引率教員 岩渕奈央
- ・第2班
平成30年1月13日（土）から1月26日（金）
参加人数 18名
引率教員 丹野まさよ

3. 事前研修

今年度の事前研修として、9月後半からロングホームルームの時間を使用し、研修参加の有無に関わらず1学年全体を対象としたオリエンテーションを計4回行いました。講師はハワイ出身の秀光中等教育学校のブライアン先生です。まずはハワイについて知るために講義をしていただきました。文化・生活・宗教・食べ物…何もかもが日本と違うという事を知り、生徒達は興味が沸いたようでした。後半は、グループワーク型の作業を中心とし、グループごとに好きなテーマについて調べて模造紙にまとめ、発表という形を取りました。各グループとも趣向を凝らしたテーマや内容で、時間がない中でも朝や放課後を使って準備に取り組みました。ハワイの言語や食文化、フラダンスについてなど、様々な事を学ぶことができました。

4. 訪問地

- ・アラモアナショッピングセンター
- ・パールハーバー
- ・ダイヤモンドヘッド
- ・ワイキキ水族館
- ・アラモアナビーチパーク
- ・チャイナタウン
- ・ダウンタウン

5. 全日程報告

2班に分かれて実施したため、実施内容が若干異なります。2班を比較しやすいよう2つに分けて報告をいたします。

～ 1日目～

【第1班】11月4日（土）

私たち、外国語コース1班は17名中10名が初めての海外ということでしたが、11月4日（土）に日本の成田空港を出発し、無事にハワイのダニエル・K・イノウエ国際空港に到着いたしました。仙台を出発するときには曇り空でしたが、成田空港に到着したときには強い雨が降っていたため、出発時間が遅れたので、ハワイ到着時間も予定より1時間程度遅くなりました。



〈成田空港にて〉

私たちがハワイに到着する数日前からアメリカのドナルド・トランプ大統領がハワイを訪れており、私たちが空港に到着する数時間前にハワイを出発したばかりだったため、ハワイの空港は厳戒態勢で、緊張感がありました。しかし、何の影響もなく、入国手続きを終え、空港の外に出ると、各ホストファミリーが順次お迎えに来てくださいました。生徒はこの日から始まるハワイでの生活に期待と不安でいっぱいのような様子でした。

【第2班】1月13日（土）

外国語コース2班は1月13日（土）に日本を出国し、同日予定時刻より1時間ほど早くホノルルに到着しました。日本を出国する日は、全国的に大寒波となり天候が心配されましたが、特に遅れ等なく順調に出国することができました。ホノルルに到着し、入国手続きを終えてホームステイ先のホストファミリーと合流、というところでミサイルに関する緊急速報が発表され、周囲に緊張が走りました。結局誤報とのことでしたが、生徒の引き渡しに若干時間がかかってしまい、全員無事にホストファミリーへと預けるまでに1時間ほどを要しました。約2週間という長い間、自宅を離れて生活するという初めての経験の前に生徒達は多少緊張をしている様子でしたが、すぐにホストファミリーと打ち解けていたようでした。

～ 2日目・3日目～

【第1班・第2班ともに】11月4日（土）・11月5日（日）

土曜日と日曜日はそれぞれホストファミリーと過ごし、日曜日には学校までのバスの乗り方を各自練習してもらいました。ハワイのバスは複雑で、時間通りに来ることの方が珍しいため、余裕を持って行動しなければなりません。また、車内でお金を支払ったり、バスパスを購入したり、バス停のアナウンスを聞き取るのも慣れるまでは大変です。生徒にとっては練習からして試練だったと思います。

～ 4日目・GLOBAL VILLAGE 1日目～

【第1班】11月6日（月）

いよいよGLOBAL VILLAGEでの研修が始まりました。慣れないバス乗り戸惑い、遅れて来た生徒が数名おりましたが、17名全員が元気に登校しました。週末の様子を尋ねると、何組かはホストファミリーとコミュニケーションを取ることに躊躇があったようですが、早速いろいろなところに連れて行ってもらい、楽しい休日を過ごせたようでした。

さて、初日の午前中の語学レッスンは、全て英語で行われる授業に圧倒されてしまい、何を答えたら良いのか分からず、悪戦苦闘していました。



〈GLOBAL VILLAGE での授業にて〉

午後のアクティビティではアラモアナショッピングセンターを散策しました。与えられたクイズを基に、どのお店がどこにあるのかをゲーム感覚で探し回りました。ときには通りすがりの外国人に話しかけたり、教えてもらったりしながら積極的に活動していました。



〈アラモアナショッピングセンターでのアクティビティにて〉

【第2班】1月15日（月）

ハワイ研修の実質の初日ですが、この日はハワイでは祝日にあたり、仕事は会社や業務形態によって通常通りのところはあるものの、基本的に学校など教育機関は休みの日とのことでした。従って、生徒達が通うグローバルヴィレッジも休日でレッスンがありませんでした。レッスンは16日からの開始となり、15日は丸一日を使ってパールハーバーの見学をしました。戦艦ミズーリ、アリゾナ、アリゾナ記念館等、じっくり時間をかけて見るべきものがたくさんあり、生徒達はツアーガイドの方の話をじっくりと聞きながら、真剣な態度で見学をしました。戦後70年以上を経ても漏れ続ける燃料油の海や、アリゾナ記念館で示されていたアリゾナ関連の死者名碑、日本の特攻隊機が衝突した跡が残る戦艦の壁など、普段は遠い昔の出来事として聞いているものが眼前に事実として突き付けられている衝撃を受け止めながら、色々なことを考えていたようでした。外国語コースの生徒達の多くは、将来の進路として「何かしらの形で海外へ出ていくこと」を挙げていますが、日本と海外の国々との国際関係を考える時、どうしても避けて通ることのできない戦争のこととこれからの世界平和について、このような機会にじっくり向き合いながら心に留めておいてほしいと感じました。

～ 5日目・GLOBAL VILLAGE 2日目～

【第1班】11月7日（火）

この日も午前中はGLOBAL VILLAGEで日常生活に役立つ英会話を学習しました。まだハワイに到着して間もないせいか、この日は体調不良者が2名出ましたが、どちらも徐々に回復し、授業に復帰しました。

午後はアール大川先生の講義でした。アール大川先生の授業では、Open-minded（オープンマインド）、Perspective・View point（物事を見る観点）、prejudice（偏見・固定概念）、Non-judgemental（先入観を持たないこと）、Curiosity-seeker（好奇心）、Risk-taker（リスクをとる人）、Communication skills（コミュニケーション能力）等について学びました。これら7つのことは、物事に向き合う上で、非常に大事な項目であり、自分の中でそう受け止め、解釈し、発展させていくかについて生徒たちは深く考えておりました。また、Personal

Success（個人の成功）とSelf-development（自己成長）についても考え、Self-esteem（自己尊敬・自己尊重）するために、失敗を恐れずにどんなことにも挑戦していかなければならないということをしかりと学んだようで、目から鱗のようでした。この授業を受けて、この日から生徒全員にジャーナル書いてもらうことにしました。日本を飛び出して、海外で、毎日どんな発見をして、何を学び、どう感じたのかをジャーナルに書き留めることで、ハワイでの成長の糧にしてもらいたいと考えました。



〈アール大川先生の講義にて〉

【第2班】1月16日（火）

いよいよグローバルヴィレッジ初日です。初日はまず自己紹介からのグループワークです。普段日本で受けている授業とは異なり、意見を出し合うディスカッションや実際に習ったフレーズを使用して質問したり答えたりという、アクティブな授業です。また、クラスの垣根を超えて1G1と1G2が混ざった4、5人程度のグループで活動するため、気分も新鮮です。普段はあまり話さないクラスメートと一緒に課題に取り組む姿は、見ていてこちらも興味深いものでした。難しくないフレーズではあるものの、やはり英語を口にするのを躊躇う生徒が多く、初日というのも相まってなかなかスムーズにはいかないようです。

午後はこれからほぼ毎日通うことになるアラモアナショッピングセンターへ向かい、お昼を食べてからアクティビティです。非常に広いショッピングセンターを使い、渡された課題プリントの課題を解決させるために縦横無尽に動き回ります。もちろん指示も課題もセンターの案内板も英語、分かりにくい場合誰かに聞くのも問題なしですが、使用言語はもちろん英語です。ぎっしり課題の詰まったプリントでしたが、2時間弱でほとんどのグループは課題を終わらせていました。



～ 6日目・GLOBAL VILLAGE 3日目～

【第1班】11月8日（水）

GLOBAL VILLAGEでの授業スタイルにも慣れ、徐々に反応が良くなってきました。最初の頃は先生の問いかけにも無言でやり過ごすことが多かったのですが、YESやNOの意思表示はしっかりとできるようになってきました。昨日のアール大川先生の講義の効果が早速現れたのかもしれない。

午後はアラモアナのビーチパークでフラのレッスンを受けた後、ビーチで足まで浸かったり、写真を撮ったりして過ごしました。ハワイは日差しが強く、気温も高いので、東北育ちの生徒たちには堪えるようで、外での活動の際には、生徒たちの作業効率が一気に落ちてしまいます。帽子を被ること、水分補給を頻繁に行うことを徹

底させることで、体調を万全に立持てるよう心掛けさせました。



〈フラのレッスンにて〉



〈アラモアナビーチパークにて〉

【第2班】1月17日（水）

レッスン2日目です。教室の雰囲気にも慣れてきて、発言が少しずつできるようになってきました。初日のランサム先生が急用でアメリカ本土に帰ってしまったため、本日より講師はジェシカ先生に変更となりました。ジェシカ先生も丁寧なレッスンで、できるだけ発言を心掛けている様子が見て取れました。また、グローバルヴィレッジ内は英語のみを使用するようと言われていますが、レッスン中の話し合いの時間や休憩時間なども積極的に英語を使うよう努力していた姿が印象的でした。

午後はアール大川先生の講義です。「グローバルシチズンとなるためには」という講義の前に、2班メンバーが普段抱えている問題についてアール先生・トヨコ先生と話し合い、できるだけその問題を解決できるような考えを聞かされるよう、講義の構成を考えて下さいました。グローバルシチズンとして必要な資質や能力を自分たちの身近な問題に関連付けて考え、どうすれば現在抱えている問題に対処できるのか、というようなスタンスで講義を聞くことにより、生徒一人一人が色々なことに気付けたようです。ジャーナルには、今まで気付かなかったことに気付けてよかった、と記していた生徒が多く、実りある一日となったようでした。

～ 7日目・GLOBAL VILLAGE 4日目～

【第1班】11月9日（木）

午前中には学校で過去形を使って質問する疑問文の作り方を学びました。午後からのパールハーバー訪問に向けて現在と過去の文の作り方を学んだようでした。また、パールハーバーに関する導入も行われ、真珠湾攻撃について思いを馳せておりました。

実際に午後からパールハーバーを訪問しましたが、現地の日本人ガイドの方の話をよく聞き、見るもの全てに関心を持っておりました。しかし、見学したものが現実的すぎたのか、徐々に口数が少なくなっていき、戦争の恐ろしさについて考えているようでした。自分と同じくらいの男の子たちが戦争に行き、中には命を落とした人もいると知り、現在の恵まれている環境に感謝したことと思います。展示品の中には、特攻隊の男の子たちが最後に書いた手紙もあり、それらを見て、言葉にならない程、悲しすぎる上に残酷だと感じた生徒もいました。次の日のジャーナルには、多くの生徒が「このような戦争は二度と起こしてはいけない」と書いておりました。



〈パールハーバーにて〉

【第2班】1月18日（木）

この日のレッスンは、場所の説明や道案内、それに使用する前置詞を学習しました。地図を見ながら場所の説明をしたり、場所の尋ね方に慣れたり、楽しそうに活動していました。

午後のアクティビティではホノルルダウンタウン、チャイナタウンを中心に散策をしました。風が強い一日でしたが、天気は良く暑い日でした。最初に訪れたチャイナタウンでは、アメリカでもハワイでもアジアでもない独特の雰囲気に気圧され気味のようでした。ここでもまた文化・生活の違いを感じることができたようです。近くには出雲大社があり、そこにも短時間ですが見学に行くことができました。ハワイにある出雲大社は佇まいそのものが独特で、日本のものなのに完全に日本ではない不思議な感覚がありました。引き続き向かったダウンタウンでは、有名なカメハメハ大王の銅像を目にし、感動していた生徒もいました。歴史地区を歩きハワイの歴史にも触れながら、改めてグローバル化とは何かと考えるきっかけとなった散策でした。



〈カメハメハ大王像の前で〉

～ 8日目・GLOBAL VILLAGE 5日目～

【第1班】11月10日（金）

この日も午前中には英会話の授業を行いました。1週目の最終日ということもあり、生徒たちはだいぶ授業にも慣れ、積極的に発言できるようになってきました。

午後からはダイヤモンドヘッドに行きました。山登りが初めての生徒や体力に自信のない生徒が多く、ダイヤモンドヘッド登頂に乗り気でない生徒が数名おりました。頂上までは4km程しかありませんので、そんなに過酷な登山というわけではないのですが、足取りが重く、入り口に辿り着くまでもものすごい時間がかかりました。気候としては曇り空で、風もある登山日和の1日でしたが、何回か休憩をとる間に休憩ポイントで登ることを諦めた生徒が2人おりました。残りの15人は頂上まで辿り着きました。頂上に到着すると、生徒たちは口々に「こんな景色が見られるなら登って良かった」と話し、思い思いに写真を撮っていました。



〈ダイヤモンドヘッドにて〉

【第2班】1月19日（金）

レッスンでは趣味やスポーツ、日常生活についてなど、人との会話でよく話題となるものについての言い方を学びました。

そして午後は待ちに待ったフラのレッスンとビーチパークです。あいにくの天気ですが、フラのレッスンは屋内に変更となってしまいましたが、楽しく分かりやすい先生方のおかげで、全員が上手に踊れるようになりました。ステップや手の動きなど、日常生活では使わない動きで最初は苦戦していたようでしたが、1時間半ほどのレッスンの後半には、さらりと踊れるようになっていました。踊りの振付けや歌詞など、日本のものでもじっくり考

える機会がないので、一つ一つの振付や歌詞のフレーズには意味があるということを改めて知って感動していたようでした。フラの先生方とも英語でコミュニケーションを取ることができていて、徐々にハワイの日常に溶け込んでいることが感じ取れました。フラのレッスンの終わるころには天気が回復していて、ビーチパークに向かうことができました。学校から歩いてすぐの広い公園で、生徒達は海に入ったり、砂浜でスポーツをしたりと思いいいに過ごしていました。雨上がりの虹がきれいに出ていました。



〈フラの先生方と記念撮影〉

～ 9日目・10日目～

【第1班・第2班ともに】11月11日（土）・11月12日（日）

土曜日と日曜日はそれぞれホストファミリーと一緒に過ごしました。

金曜日に確認したところ、生徒たちは、アウトレット、ウォールアート、カカアコ、カハラモール、教会、コストコ、島一周、ショッピング、Doleプランテーション、ドライブ、ファーマーズマーケット、プール、ワイキキ等、実にバラエティに富んだ週末を過ごしたようでした。

～ 11日目・GLOBAL VILLAGE 6日目～

【第1班】11月13日（月）

この日の午前中も学校で英語の学習をしました。知らなかった単語が分かるようになること、現地の方々が実際に話している言葉を使えるようになることに楽しさを感じているようでした。この時期になると、ジャーナルの感想には、具体的に、誰と、どこで、どんな会話をし、どう感じたのか、反省点は何か、にまで触れることができるようになっていました。自分のリスニング能力に成長を感じた生徒も多かったです。

午後のアクティビティは、ワイキキ水族館とワイキキビーチでの海水浴でした。ワイキキの水族館はそんなに規模は大きくないのですが、ゆったり、のんびり見学できました。日本の水族館でも見たことがある魚たちがハワイでは何という名前と呼ばれているのかに興味を持って見学できていました。



〈ワイキキ水族館にて〉

ワイキキビーチでは、波は穏やかでしたが、足のつかないところが多く、やっと見つけた岩場に立つ際に少し足を傷つけてしまう生徒が少々おりましたが、降り注ぐ太陽の中、冷たい海水を感じながら気持ちよさそうに泳いでいました。



〈ワイキキビーチにて〉

残念ながら、この日はホストファミリーから風邪をうつされ、体調不良になってしまった生徒が2名おりました。

【第2班】1月22日（月）

週明け1回目のレッスンでは、個人の個性や感情、また見た目について述べる時の表現について学びました。午後のアクティビティの際に、ビーチで出会った人と会話をしてどんな人か聞き込む、という課題を出されていました。

午後はワイキキ水族館と隣接するワイキキビーチへ向かいました。週末も海に行ったという生徒は多かったのですが、何度行っても飽きないようです。水族館は、決して大きな施設ではないのですが独特な雰囲気があり、ハワイ近海の生物が多く展示されていました。タツノオトシゴが特に目立つように展示され、不思議な生き物だねとじっくり見ている姿が印象的でした。ただ見るだけでなく、それぞれの展示に興味を持って見に行く姿勢が素晴らしいと感じました。そして待ちに待ったビーチ。気温も暑く、海に入るにはちょうど良かったようです。ハワイについた当初は気にしていた日焼けも、もう気にならないくらいに楽しそうに泳いでいました。



〈ワイキキビーチで〉

～ 12日目・GLOBAL VILLAGE 7日目～

【第1班】11月14日（火）

昨日具合が悪かった生徒2名はこの日も体調不良で元気がなかったので、午前中は念のため病院に連れて行きました。診察の結果は風邪でしたが、高校1年生で、しかも初めての海外となると、慣れない環境から体調管理をすることは難しいのかなと感じました。

その他の生徒は順調に授業を受けていました。人や場所の特徴を描写する表現や前置詞を学んでいました。



〈GLOBAL VILLAGE にて〉

午後はチャイナタウンとダウンタウンへ行きました。しかし、午後のアクティビティで、チャイナタウンとダウンタウンを散策中、体調不良を訴える生徒がおりましたので、パディとともに早退させました。この日は、今回の研修旅行史上最少の12名でアクティビティを行うこととなりました。アクティビティに参加した生徒たちは強い日差しの中、「暑い、暑い」と言いながらもよく頑張ってくれました。ここへ来て、疲れが溜まっているのか、移動中や見学中の口数は少ないように感じました。



〈州議会にて〉

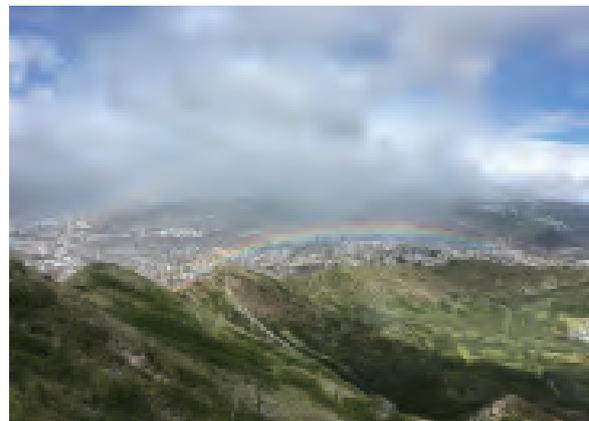


〈イオラニ宮殿にて〉

【第2班】1月23日（木）

レッスンも残り2日となり、基本的な表現もラストスパートです。この日のレッスンでは未来表現を学びました。これから自分がやりたいこと、将来のことを、一生懸命英語で表現しようとしていました。今後にもぜひ活かしてほしいと感じました。

午後はダイヤモンドヘッドへの登頂です。登山口までが遠いダイヤモンドヘッドですが、登り始めると全員すいすい進んでいき、登った18名全員が頂上まで行くことができました。もちろん暑さもあり、足場もあまりよくないため、少し遅れる生徒はいましたが、全員が登り切る、という気持ちで活動に取り組んでいたことに、感動を覚えました。途中で疲れたから止める、というのではなく、結果がどうあれ物事には最後まで取り組むという姿勢を、生徒達はこの短い研修の間に学んでくれたのかと感じました。さすがに下山後はぐったりしていましたが、怪我も体調を崩すこともなく登山を終えることができ、安堵しました。



〈ダイヤモンドヘッドにて記念撮影、2重の虹が見えました〉

～ 13日目・GLOBAL VILLAGE 8日目～

【第1班】11月15日（水）

この日はハワイ最終日でした。午前中は英語の授業を行って、アラモアナのフードコートでハワイ料理を食べ、その後教室で卒業式をしました。生徒たちは、ハワイ料理をなかなか受け入れられないようでしたが、日本に来たら外国人も納豆の匂いや味に驚くということと比較しながら、何とか恐る恐る料理を口に運んでいました。



〈アラモアナのフードコートにて〉

午後はアラモアナで最後の海水浴とアクティビティをしました。ハワイで入る最後の海で、ハワイでの思い出を話したり、お土産について話したりしていました。

帰りのホームルームでは全員がハワイ楽しかったと答えていました。ハワイでの生活も楽しかったようですが、やはり2週間もいると日本が恋しくなるようで、日本に帰ることも楽しみにしていました。

【第2班】1月24日（水）

いよいよグローバルヴィレッジ最終日です。最終日のテーマは食べ物。ハワイの食文化について学び、ゲームで勝ったチームにはアサイーボウルの景品がつかめました。ハワイは、今では色々な料理を口にすることができるグローバルな場所ですが、元々の伝統的な食文化はもっとシンプルでもっと独特なものであるということを学べたようです。

そして修了セレモニーでは修了証とレイを手渡され、10日間の語学研修を終えました。ここで学んだことを一つでも多く、帰国してからの英語学習や日常生活に活かしてほしいと感じました。話しかけられたことに対し、自然な受け答えをできるようになったのは、著しい変化です。帰国して環境が戻っても、英会話の授業などでは自然な英語が使えるようにして欲しいと感じます。

午後は最後のアクティビティ、アラモアナビーチパークです。球技をしたり海に入ったり、ハワイの最後の時間を楽しんでいるようでした。明日の帰国に向けて荷造り等、最終チェックがあるので、少し早めに終えて、10日間お世話になったWard先生とお別れしました。

そして、アール先生、トヨコ先生とも最後の日です。日本の学校の先生とは違うスタンスで優しく生徒達を見守ってくださり、大変お世話になりました。生徒達も、お二人からたくさんのことを学んだと思います。



〈修了セレモニーのあとで〉

～ 14日目～

【第1班】11月16日（木）～11月17日（金）

ハワイを10時過ぎに飛び立ち、約8時間後に、成田空港には日本時間の11月17日（金）の14時に到着いたしました。16時前にバスで成田空港を出発し、多賀城校舎には20時30分頃に到着いたしました。



〈ハワイの空港にて〉

今回の17人の生徒たちにとってハワイ研修はとても有意義かつ挑戦することの大切さを学んだものになったと思います。先生方や保護者の多大なるご指導やご協力の上で、このような経験ができたことに感謝いたします。ハワイ滞在中には日本人が巻き込まれる事件が数件発生し、心配しましたが、17名全員が無事に帰国でき、大変安心しました。今回のハワイ研修で学んだことや感じたことを今後の高校生活、今後の人生に多いに役立ててもらいたいと思います。

【第2班】1月25日（木）～1月26日（金）

ハワイ最終日、日本に向けて出発です。朝早くの集合にもかかわらず、時間には遅れず全員集まることが出来ました。荷造りも問題なく終えたということで、出国手続きへ。多少のトラブルはあったものの、全員無事に手続きを終えることができました。2週目に入ると、日本に帰りたいという生徒も何人かおり、久しぶりの日本にうきうきしていました。帰りの飛行機も、成田到着予定時刻を当初よりも1時間早くすることとなり、日本には26日午後2時半頃に到着となりました。天候も良く、成田からのバスも順調で1時間ほど多賀城校舎着も早まりました。福島あたりを通過する頃には全員バスで寝ている状態で、2週間の疲れと帰国した安堵感が一気に感じ取れました。

簡単な解散式の後、保護者の顔を見た生徒の安堵した表情がなんとも言えません。全員無事に帰国したことが何よりと感じています。

今回の研修は、生徒達にとっては2週間という長い研修ではありましたが、言語だけではなく文化・生活・習慣そのものが全く異なる場所で過ごすという事で、これからの生活にとって非常にいい経験になったのではないかと感じています。普段何気なく感じていることも当たり前と思っていることも、実は一人で見知らぬ場所に行ってみると当たり前ではなくて、何か誰かの支えによって自分が生活できているということを実感できるのだと思います。研修のまとめではそのようなことを実感したとジャーナルに記している生徒が多くいました。この気持ちを今後の生活に活かして行ってほしいと思います。

(6) 平成29年度の職員研修について

フレックスコース 雫石 利光

平成29年度は、全職員を対象として下記の研修会が開催されました。以下に報告いたします。

注 記録の中で、枠囲い：例 **2 学習障害** とは、シートのタイトル、下線部はその内容である。

講演会「発達障害を抱える生徒への指導・対応の在り方について」

- 1 日時 平成29年11月30日（木）15:00～16:45
- 2 場所 仙台育英ゼルコバホール
- 3 講師 宮城教育大学教職大学院教授 関口博久 先生

ただいま坂内玲子先生からご紹介いただきました関口です。どうぞよろしくお願いいたします。坂内先生とは長いお付き合いで、少し余所行きのご紹介をいただきました。

今回の講演のテーマは発達障害に関する話題でやや基礎的な内容になるものと思います。この点、もっとふさわしい方がいらっしゃるのでは坂内先生にお話ししたのですが、まず関口の方で露払いをなささいとのことでした。今日は1時間程度ですが、レジュメについてもずいぶん欲張ってしまい、45枚になってしまいました。さらに上乘せする部分もありますので、駆け足になったりする場面もあろうかと思っております。1時間では十分に消化できない部分もあろうかと思っておりますが、ご了承いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

今回の研修会のテーマは、各論に入り込んでいくときりがない分野でもあります。今日は、最後に発達障害の二次障害についてもお話ししたいと思います。

まず、私自身のバックボーンをお話ししないと、どういう立場で発達障害にかかわるのかご理解いただけないと思います。

私の本職は医者ですが、扱ったテーマは発達障害より虐待や不登校などにかかわる期間が長くありました。宮城教育大学での教員養成の仕事も21年以上になります。仙台市の医療・福祉・教育行政にも関わりました。不登校や非行など、生徒指導にかかわる部分にもかかわったりしました。学校支援にもいろいろな場面に関わってきました。これまで、坂内先生をはじめ多くの先生方にご協力をいただきながらやってまいりました。

では、今日の本題に入っていきたいと思っております。まず、発達障害とは何でしょうか。これについては、研究者によっても意味が異なります。例えば、医療領域で使う発達障害の意味と、教育領域で使う発達障害の意味は異なります。また、教育領域の中でも、文部科学省が行政政策上使う発達障害の意味とそれ以外では違いがあります。ある時代で使っていた発達障害の意味と現在の発達障害の意味は違います。その差異に踏み込むときりがないので、ごく大雑把に発達障害を定義すると、以下になると思っております。

1 発達障害とは

1) 特別支援教育の枠組みでは、主としてAD/HD、LD、高機能自閉症の3つが対象
しかし、教育現場では、上記以外でも配慮すべき障害が認識されるようになりました。そこで、次のようなとらえ方が出てきました。

2) 幅広く、発達性強調運動障害や境界線級知能の子供たちを含むという捉え方もあった。

さらに、医療機関や児童相談所から、特別支援教育の範疇には入らないが、個別の配慮が必要な子供たちの存在が明らかになってきました（発達障害という言葉が広く理解されてきました）。

今、教育現場で最も大きな問題は、虐待を受けている子供たちの数が減少しない、むしろ増加していくという事態であると思っております。このような状況で、発達障害を持つ子供たちがかかわる問題行動がますます増えていくことは確実です。文部科学省がどのようにこの問題を考えているのかを示すデータがあります。

文部科学省では、児童生徒数は減少していくが、特別支援学校の生徒数は増加するとの認識があります。平成28年度5月1日現在のデータでは児童生徒数は1000万人を割り込み、これからさらに減少します。教員養成系の大学にとっては大きな問題です。

その中で、特別支援教育が必要な児童生徒の割合は増加して3.8%以上、特に高等部の不足が今後の課題です。また、義務教育の通常学級に在籍している児童生徒で発達障害（AD/HD、LD、自閉症）を持っている割合は6.5%まで増加するとの予測をしています。両者を合わせると約10%になります。

では、各論についてお話しします。

まず、学習障害からです。先ほど触れた発達障害にあたる子供たちの半数以上、4%ぐらいは、先生方が日常の学習活動において気になる生徒達であろうと思われます。具体的に言えば、複数の先生方が「学習活動で気になる・配慮が必要」とチェックする児童生徒達です。この数値は、学習障害（LD）の医療的な検査で現れる数値より高くなりますが、常日頃子供たちの様子を見ている先生方の実感に即したものがあるのではないのでしょうか。

2 学習障害とは

1) 聞く、話す、書く、推理する、算数等の能力を取得するのが著しく困難な問題群の総称

2) 原因は、生まれつきの中枢神経の働きの障害によるものと考えられている。

では、そのような障害はどのような形で現れるのか、細かく見てみることにします。大きく、6つの気づきの観点（診断ではありません）があるものと考えられます。

① 「聞くことの困難さ」の表れ

* 集団場面での説明や指示の理解が弱い。

* 音としては聞こえていても、意味のある音として言葉としてとらえられてはいない。

* 文や文脈全体の意味を理解していない。

聴力の問題ではなく、指示が伝わらないことや聞き落とすことがしばしばあるなど、子供たちの不注意として扱われがちです。言葉は入っていくのですが、理解に至らない面があります。

② 「話すことの困難さ」の表れ

* 考えや思いを話し言葉にうまく置き換えられない。

* 考えや思いを人にうまく伝えられない。

* 言葉の音や言葉を想起できない・適切に選べない・単語を文に組み立てられない・論理的内容にまとめられない。

自閉症に起因する場合もあれば、発達障害が原因の場合もあります。原因を判断するのではなく、子供たちが「困難さを感じている」ことに気づくことが重要です。

③ 「読むことの困難さ」の表れ …特に気づきにくい

* 文字や文章を読むことに困難を示し、そのため読んで内容を理解するのも困難である。

* 形や位置の識別・記憶が難しく、文字と音とを結び付けられない。そのために、文字・単語・分として視覚的に認識することができず、読解が弱い。

通常の、聞く、話す、（低学年段階での）書くことには大きな問題はないため、気づきにくい面があります。小学校高学年から急激に成績が下がることも多く、周囲から理解されにくい面もあります。文章題が理解できないため、学習が進むにつれて、遅れが深刻化することになります。受験にも大きな支障をきたすところです。次の書くことにもつながっていく困難さです。

④ 「書くことの困難さ」の表れ

* 会話や理解に問題がないのに、文字や文章を書く・綴る・形を整えるなどが困難である。

* 読むことはできるが書くことが難しい場合、文字を認識することに大きな問題はないが、文字を想起して表出するまでの過程に問題がある。

* 読むことと書くことの両方が困難な場合、文字情報を分析する資格認知に問題がある。

* 視覚と運動の協応性、手指の巧緻性の問題が重なっていることもある。

話し言葉の使い方は良好です。しかし、板書を写せない、分かっているのに文章で表現できないなど、表出がスムーズにできない人がたくさんいます。受験等に及ぼす影響は大きいので、学習活動においては配慮が大切な子供たちです。字が上手に書けないのも特徴です。これは、手指の巧緻性にも関連する問題でもあります。

⑤ 「計算することの困難さ」の表れ

* 九九が習得できない。繰り上がりの計算ができない。数を理論的に操作できないなど。

* 数量概念、記憶力、論理的思考の問題などに由来するものか（原因は明確ではないが）。

LD全体について、まだ原因は確かめられていませんが、脳の機能の一部に問題がある可能性も考えられます。ただ単に怠からきているのではないので、注意が必要です。

⑥ 「推論することの困難さ」の表れ

* 図形の理解と模写ができない、位取りがわからない。時間・場所の認識が弱い。あるいは日常生活での状況判断が悪い。

* 視空間認知の障害、抽象的・論理的思考力の不足、視覚—運動の協応性の稚拙などに由来するか。

ここでいう推論とは、推理小説を読み解くことではありません。上記のような、日常の生活で支障が起きることを表しています。

学習障害とは、子供たちの学習意欲や取り組み自体に問題があるのではなく、別な視点から学習活動の支援を進めていくことの重要性を喚起しています。では、どのように工夫すれば、子供たちの学習活動を支援できるのでしょうか。まず、ここにあげた障害にあてはまる子供たちには、一人一人の困難さに応じた支援を進めることが重要です。ここにあげたのはほんの一例です。

ちょっと話が変わりますが、宮城教育大学においても、学生一人一人に対する配慮は求められています。例えば、教員養成系ではあるけれど、対人コミュニケーションに課題を持った学生もいます。高校の進路指導とも関連するのですが、学生（高校生）の適正を見極め、適切な進路指導を進めてほしいという思いは大学側にも強くあります。

3) 対応の一例

* 文字を拡大する（課題の内容は変えない、文字の大きさだけを変える）

大きい表示を心がけるなど、少しの心遣いで授業への理解度が高まることがあります。

* 文章に関連のある絵を用意する

関連のある題材（マンガやイラスト）を示す、など考えるヒントを与えることも有効です。

* 漢字に振り仮名をつける

振り仮名をつけることで、脳の活性化につながって理解が高まるという実践例があります。

* 昇目を見やすくする（濃くする）、拡大する

見やすさを心がける例です。

* 授業のUD化、ICT機器の活用

時間がないので、すべてについて詳しくは延べられませんが、先生方におかれましてはぜひ試みていただきたいことでもあります。

なお、学校現場でよく耳にするのは、子供たちの診断名が付かないと適切に対応できないと考えてしまうことです。診断名のあるなしで支援の仕方が変わることはないはずですが、学校現場で大切なのは診断名ではなく、子供たち一人一人が何でつまづいているのか、どんな支援が適しているのかをしっかりと見極めていくことではないでしょうか。そのノウハウを共有することで、工夫改善を進める手掛かりになるものと思います。

次に、AD/HDについて考えたいと思います。今日の研修会は高校の先生方が主ということですが、小1プロブレムや中1ギャップにも関係する、義務教育の現場ではとりわけ話題になる言葉でもあります。この、AD/HDという言葉は、ここ20年ほどで広まった比較的新しい言葉です。広く社会全般にここまで認知されたことも、問題に対する社会全般の関心の表れと言えるでしょうか。半面、誤解を招く場面があることも事実です。

3 AD/HD…「小1プロブレム」

軽度発達障害・

特別支援教育・

そしてセルフエスティーム（自尊感情）……中1ギャップとも関連あり

1) AD/HD 注意欠如・多動症

ここでの／は、ANDとORの両面が

かつては、注意欠陥多動症と呼ばれたが、「欠陥」「症（英語でDisorder）」の訳が誤解を招いたこともあるので、和訳せず、「AD/HD」のままの方がベターかと考えられます。

また、今から20年前は、AD/HDについての社会全体の理解が不十分であったことで子供たちや保護者への偏った見方がありました。現在は改善されたが、今発達障害について、20年前のAD/HDと同じ状況におかれているとも言えるのではないのでしょうか。

2) どれぐらいいるのか

- * 3～5%とも（12%というデータも）……小学校低学年ではクラスに1, 2名いる
 - * 男女比 4:1 なぜ男子に多いのかは不明
 - * 成人期以降に症状を持ち越すことも多い（中学、高校、大学でも多く見られる）
- NOT CURE, BUT CARE……

3) 原因は

- ① 脳の機能的・器質的問題
- ② 遺伝の関与「父から息子へ」が多い？……いまだ確認無し……今後の研究に
- ③ 少なくとも躰（養育環境）のせいではない！……親を責めても何にもならない

まず、教員の務めは原因究明より対応の模索だということを理解していくことが大切です。

4) 診断は

- * 不注意／多動性—衝動性
- * 診断基準を知るととても大切
……知らなければ理解できないし、適切な対応もできない
……診断はしてはいけない……医療行為であって教員の職務ではない

症状は3つの状態で混合して表れることが特徴です。3つの状態が混在し、その時々で何が優勢に表れるか、個人差が大きいところも注意が必要とされています。

AD/HDについての理解が進んできたと言明してきましたが、領域によってはまだ不十分なところもあります。例えば、最近になって指摘されるようになった発達性協調運動症があります。運動の稚拙さについて、障害の表れとして起きることが分かりましたが、学校現場での理解が十分進んできたとは言えないと感じています。注意してほしい点です。

今日は時間がないので診断基準については触れられませんが、今後、各論を深める研修会の機会があればぜひとも紹介したいところです。

繰り返しになりますが子供たちの状態の中で気になるものがあつたとき、成育歴以外にも原因があるのではと考える場面がこれからもあるはずで、先生方の気づきが、子供たちを支えていく手掛かりになることを忘れないでほしいと思います。

5) 対応は—その①—

* 家庭内と家庭外（学校など）で一貫した対応を！

- ① 情報の共有が必要
- ② 診断名は使わない

特に医療機関の利用がない（診断名が付いていない場合）は難しい局面になりやすいのが現状です。教員は診断（断定的な判断）できないことを忘れず、保護者に接することが重要です。大変ではありますが、保護者も教員もSOSが出せる関係を築き上げることが重要になります。

6) 対応は—その②—

* 褒めるときには繰り返しやや大げさに、叱る時にはその場で控えめに！

ケースバイケースではあるが

* 101回目がある！

この場合、子供たちは怒られることに慣れているので、褒めることで信頼を得る場面を作ることが重要です。

7) 対応は—その③—

- ① 情報・感覚刺激のコントロール……座席の位置・掲示物・音の調整
ちよつとして心遣いで、居心地の良い環境が用意できます。

8) 対応は—その④—

① 「短期的な行動矯正・教科指導」より「長期的な視点での対人関係の構築」

*非行等の二次障害の防止が大切

教科指導は重要な責務です。しかし、それを優先するあまり、子供たちとの関係は難しくなりがちです。生徒と保護者の信頼を得ることが、今後の問題行動の防止や状況の改善につながる事が多く、早急な解決にとらわれないアプローチを心がけてほしいと考えます。

9) 対応は—その⑤—

① セルフエスティーム（自尊感情）の低下の防止

二次的なハンディキャップ・問題の予防に関係する観点です。後でまた説明します。

② 良いところもいっぱいあるよ!!!

授業時間をじっと座ってられない場合もあります。授業の在り方を工夫することで子供たちの負担を軽くすることもできるのではないのでしょうか。

自閉症の特徴について駆け足で説明します。

4 自閉スペクトラム症

「自分の殻に閉じこもって周囲の人に打ち解けない」「内気で人と話せない」という誤解がまだ根強くあります。自閉という言葉から想起するためでしょうか。一部の書籍でも、誤解したままで発行されているものがあります。

一方、日本自閉症協会で発行している小冊子があります。自閉症の理解のためにも、正しい知識を持って接していくことが望まれます。説明はスライドの通りです。

1) 自閉症の特徴①

① 対人関係の困難さ

周囲の人と共感的な関係を構築できない、集団行動が苦手、協調できない

② コミュニケーションの困難さ

身振り手振り・表情を含めたコミュニケーションが苦手、言葉がうまく使えない

2) 自閉症の特徴②

① 行動・動作の特徴

手をひらひらさせる、ひもを振るなど反復動作（感覚遊び）を繰り返す。

② 活動や興味の範囲が狭い

ミニカーを一列に並べる、水道の水を出しっぱなしにして水に触れる感覚に没頭する。

3) 自閉症の特徴③

① 変化に対する不安や抵抗

物を置く位置・手順、生活のスケジュールなど決まったやり方にこだわりがあり、変化に対して強い抵抗を示しがち。

② 想像力が弱い

ままごと遊び（ごっこ遊び）、人の気持ちやその場の雰囲気を感じることが苦手。
次に何が起きるか見通しを立てられないと不安になる。

4) 自閉症の特徴④

① アンバランスな感覚

触覚・味覚・痛覚・臭覚などが極端に過敏だったり、鈍かったりする。

物の見え方も独特で全体の一部しか見えていない人もいる。

聴覚が特に鋭敏で、ある音を嫌がる人もいる。騒がしいところでは、話しかけている人の声を選択して聞き取る事が困難である。

味覚が鋭敏であれば、極端な偏食になることもある。

5) 自閉症の特徴⑤

① アンバランスな能力

記憶力など、一部の機能が特に優れている人がいる。他追えば、音楽、手芸、絵画、ジグソーパズルなど…
サヴァン症候群

自閉症の人がすべて何らかの際立った能力を持っているわけではない。これも誤解されがちです。

6) 治療は

① 根本的治療はできない。治療的教育でハンディキャップを減らす援助をする。

*環境を改善することが最も効果のある改善策です。

7) 対応は

① 言葉でのコミュニケーションが苦手。

ジェスチャー、文字、写真、絵など理解しやすい手段を見つける。

② 暗黙の了解とか、常識を理解するのが苦手。

「察する」「慮る」「一を聞いて十を知る」のは苦手。ストレートに要求・指示する。

③ 急な予定の変更や仕事の変更は特に苦手。

急な変更はストレスやパニックの原因になるので、理解できる形で繰り返し提示する。半面、いったん理解すればスムーズに行動できる。

AD/HDでも触れた、UDの活用など、環境面での配慮や工夫が求められます。

急激な変化に弱い特徴があるので、予測可能で分かりやすい環境を作ることが重要です。

訓練（負荷）を与えて慣れさせることは逆効果です。

8) 向いている職業は

① アスペルガー症候群の特性は、児童期に明らかになり、年齢によって若干変化するものの本質的には成人後も継続してみられる（治らない）。

② まじめで規則に忠実で、量よりも質にこだわる傾向がある。その特質にあった職種や環境であれば、能力を発揮できる。翻訳家やコンピュータ関係など

③ 周囲の理解とサポートが何より大切である。

9) 教師としての対応は

参考資料として「カレン・ウィリアムズ」 アスペルガー症候群の子供の理解：教師の指針

最後に、

5 発達障害の二次障害

1) 発達障害の二次的障害とは①

*発達障害に起因する認知や行動の特性が障害として認められないため、必要な支援が受けられず、避難や叱責を多く受けがちである。そのため、自信や意欲を失くし、自己評価が低くなってしまったために、本来ならできることも困難になってしまうこと。

2) 発達障害の二次的障害とは②

*ある発達障害を持った生徒が、環境の負荷などにより別な障害の行動特性を示すことがある。

3) 発達障害の二次的障害とは③

*二次的障害と一時的障害の区別は難しい場合もあるが、二次的障害は適切な支援を行えば比較的短時間で

解決することが多い。一時的障害を支援する場面で、適切な支援を重ね自信と意欲を身につけさせられれば、二次的障害の克服は十分に可能である。

4) **対応例** ……LDの小学生、自閉スペクトラム症の小学生、AD/HDの中学生などを紹介

家庭環境の変化や、学校での学習内容の深化、新しい人間関係の構築ができなくてストレスになるなど何かの変化があったとき、障害がすべての原因と思いきまぬような注意が必要である。

5) **身体医学の一次障害と二次障害**

けがによる過度の負荷や長期臥床→しびれ、生活の自立度の低下

一般的によく知られていることですが、当事者にとってはかなりの苦痛を伴うものです。

6) **発達障害の一次障害と二次障害**

一次障害→生活のしにくさ、環境の負荷→二次障害（メンタルサイン、行動の変化、身体症状）→一次障害への負荷増加……悪循環になりやすい

あまり認識されないことが多いので注意を払うことが大切です。しかし、早期に支援すれば改善につながります。

7) **環境の負荷の例**

- ① 障害に対する無理解
- ② 障害特性に見合わない課題の強要
- ③ 自己肯定感を貶める言動
- ④ 不安・緊張を強いる環境
- ⑤ 子供虐待

8) **二次障害の症状**

- ① メンタルなサインが前面に出る場合：うつ病、パニック症、脅迫症、解離性同一症
- ② 行動上の変化として現れる場合：攻撃性、反抗性、抜毛症、自傷行為
- ③ 身体症状として出現する場合：狭義の心身症（消化性潰瘍）、広義の心身症（心因性）

9) **二次障害の表れと特徴**

- ① 長期に及ぶと18歳以降のパーソナリティ障害群に移行することも
- ② 不登校、非行、学力低下などとして現れることが多い
*通常の不登校への対応とは異なる・積極的な関与も必要な場合がある
- ③ 共通してみられるのは「自己肯定感の極端な低下」

「居場所がない」との思い込みから悪化する例が多いので注意が必要です。

10) **二次障害の対応**

- ① 医療機関ないしは専門機関との連携
- ② 実態把握
- ③ 「自己肯定感を高める」関わり
- ④ 未然防止

先生方の働きかけ（存在感を高める）が特に重要になります。理想を言えば、二次障害が起らないように接することが最善の対応になります。

6 質疑応答

1) 秀光 加藤先生

診断はしないにしても、診断の基準を知るべきであるとのことですが、(気づきのための) 診断の補助

に使えるチェックシートはあるのでしょうか。

回答 関口博久 先生

いくつかありますが、例えば、2012年に文部科学省の調査で使われたものがある。AD/HDやLDの特徴を羅列したチェックシートで、文部科学省のHPからダウンロード可能です。比較的簡便にチェックできるシートとして活用できます。

2) 多賀城 真山副校長

学習障害を持つと思われる生徒の保護者には、どう接していくのがいいのでしょうか。アドバイスをいただければ幸いです。

回答 関口博久 先生

真山先生にもこれまでいろいろとご協力をいただきました。さて、質問についてですが、保護者への対応というのは一つの大きなテーマです。保護者に理解をしていただくというのは、口にするのは簡単ですが、実行するのは大変難しいことだと考えています。

教員側から見て、そのような状況が疑われる子供たちは通常の知的レベルがあり、保護者に障害についての理解を求めることは難しいと考えられます。さらに、保護者についても、先ほど述べたように、遺伝的な要素が原因との断定はできませんが、親子、兄弟でも同じような状況も起こりえます。その対応について、時間がかかることを前提に、いくつかの段階を踏んで進めるとすれば以下のようなことが考えられるのではないのでしょうか。

第一段階 本人の良いところも示しながら、できない点を指摘する。

第二段階 親の気づきを促す話し合いの場を持つ

第三段階 親が気づいたら医療機関を紹介する

残念ながら、即効性のある魔法の言葉はありません。じっくりと、しかし、慎重に、最後は本人をほめるような伝え方が肝要かと思います。

御礼のことば

仙台育英学園高等学校副校長 千田芳文

関口先生、本日は大変貴重な講演をいただき、本当にありがとうございました。学校長に代わり御礼申し上げます。本校では、今年度、春に新任教員を対象にどの学校でも苦慮しているいじめ問題について、研修の機会を持ちました。その中で、生徒の行動や保護者への対応の場面で、今日お話しいただいた内容に思い当たることが少なからずありました。改めて、もっともっと研修していかなければとの思いを強く持ちました。今後ともご指導をお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

文責 フレックス・技能開発 副参与 雫石利光

Ⅲ その他

(1) 広域通信制課程 ILC沖縄校の状況報告

ILC沖縄 所長 山内 一秀

1. はじめに

幾多の困難を乗り越え、生徒等に喜びの歓喜を！ 沖縄県立那覇工業高等学校（定時制）臨時教諭を皮切りにスタートした38年の教員生活。その中で出会った「良き友・良き同僚・良き先輩」、その全てが教職として生きる為の不可欠な存在となりました。また、若き時代の教科指導や学級経営そして部活動、各種主任を任され学校経営や運営の一端を担うことになる充実期、「学年主任・進路指導主任・生徒指導主任・教育相談係・適応指導教室担当」等、色々な役職を経験することで教職の重責と素晴らしさを学ぶことができました。しかし、一番の収穫と問われたならば、やはり部活動等を通して共通の目標に向かい、共に汗を流した生徒たちとの出会いを第一に挙げるでしょう。彼らとの関わりの中で多くを学び、後の学校経営に活かすことができたと感じている。

さて、これまでの経験を踏まえ考えたときに思うのは、やはり、公教育の限界ということになります。色々な特性を備えたすべての子どもたちを短時間に引き上げることは容易なことではない。学ぶ速度がゆっくりでなかなかついていけない子。集団生活が苦手な子。身体的・心因的な理由で通常学級での学習が難しい子等もいます。

このような子どもたちが余裕をもって、しかものびのびと学べる学校として誕生したのが、仙台育英学園高等学校（広域通信制課程『ILC 沖縄』）です。

ILC沖縄は、平成26年4月27日に開校式・前期入学式を挙げる。自己の夢実現に燃える新入生72名とともに、ここ沖縄の地に記念すべき大きな一歩を踏み出し開校から4年、加藤雄彦理事長・校長先生の多大なご指導・ご支援並びに本ILC沖縄に献身的に関わっていただいた職員・関係各位のご尽力により、地域に信頼されそして子どもたちの将来に夢をもたらす学校として期待されるようになっていきます。

私たちILC沖縄職員一同は、今後とも子どもたちの個性を伸ばすと共に、努力することの大切さを学ばせ、喜びの歓喜を味わうことのできる学校生活になるよう努力するとともに、仙台育英学園高等学校の「建学の精神」を踏まえ、子どもたち一人一人の「夢の実現」に向け、鋭意努力したいと考えます。

以下、ILC沖縄の今年度の取り組みを紹介します。

2. ILC沖縄校の地域の概要

ILC沖縄の地域の状況紹介等

① コザスクーリング会場（沖縄市上地1-1-1 コザ・ミュージックタウン1F）



※「エイサーのまち」沖縄市にあり、米軍嘉手納基地の第2ゲートに隣接する。かつては沖縄第2の繁華街であったが、現在は少しさびれた感がある。しかし、エイサー祭りや音楽交流祭り・ロックイベント等の際には、街は一変し地元の人たちはもちろんのこと、観光客、米軍人の家族などで大変にぎわう場所にある。

② 芸能のまち沖縄市で中心的な役割を担う「コザ・ミュージックタウン」のイベント



③ ILC沖縄の本拠地（ゴヤ十字路周辺）



3. 地鎮祭並びに起工式

(1) 高原学習センター地鎮祭 平成29年4月15日（土）

ILC沖縄の高原学習センター予定地において、加藤雄彦理事長・校長先生をはじめ、ILC沖縄の教職員、工事関係者等が多数ご臨席いただく中、普天満神宮神主ご指導の下、つつがなく地鎮祭を終えることができました。

本ILC沖縄は、既存のコザスクーリング会場、来年度5月開校予定の高原学習センターを効果的に活用・運営し、生徒一人一人が安心して伸び伸びと学習できる環境づくりに努めたいと思います。

(2) 地鎮祭、理事長玉串奉奠、理事長挨拶、地鎮祭集合写真等



(3) 校舎起工式、安全祈願、理事長玉串奉奠、直会、理事長挨拶等の写真「10月19日（木）」



4. 今年度の学習活動・主な学校行事

(1) 前期入学式の様子 4月15日（土）

① 入学式の状況報告「H29年度生担任：與那城」

平成29年4月15日（土）に、コザミュージックタウン3階音市場において、「仙台育英学園高等学校広域通信制課程ILC沖縄 第4回前期入学式」が行われた。84名の生徒が夢と希望を胸に抱き本校に入学した。

年齢は様々で個性豊かな生徒たちが本校に入学したことをILC沖縄職員一同、心から歓迎したい。これからの高校生活を、友人、先生方と一緒に楽しく過ごしていきましょう。

② 入学式宣誓、新入生、入学式集合写真



③ 生徒の感想文

- 最初はとても緊張していましたが、知り合いがたくさんいて安心しました。入学式の時間が短かったので良かったです。学校には週1～2回通う予定です。勉強は苦手だけど、友達や先生方と一緒に頑張っていきたいです。(A・Iさん)

(2) 健康診断実施 4月15日（土）

① 学校保健安全法（健康診断実施）における、生徒への説明及び今後の課題「養護教諭：玉城」

平成29年度4月生入学式終了後、健康診断を実施した。日程を提案してもなかなか時間を合わせる事が難しい生徒が多いため、入学式当日の実施を提案した。長い待ち時間に耐えられず帰宅する生徒も数名いたが、65名の生徒が受診することができた。当日受診できなかった生徒は日程を調整してもらい個人での受診も促したため、前期で79名の生徒が受診し、90%の受診率となった。健診結果が届いてからはそれを基に事後指導も行うことができ、生徒自身の健康に対する意識づけに繋がったと感じた。

(3) コザスクーリング会場でスクーリングが開始 4月18日(火)

① 授業の様子(状況説明)「教務：平田」

平成29年4月18日、ILC沖縄では前期スクーリングが開始されました。長い春休みが終わって、学校が始まるのを心待ちにしていた生徒の皆さんが元気に登校しました。先生方の授業の声や、生徒達の明るい話し声が明るい学園にさらに花を添えてくれました。

生徒達は、先生達とのスクーリング、インターネットスクーリング、実習への参加など、様々な方法でスクーリング、レポートに取り組んでいます。

② 活動の様子



(4) 新入生歓迎BBQ and ビーチバレー 5月25日(木)

① 担当者による状況報告「担当者：與那城」

悪天候の影響もあり、当初予定した日程より約1カ月遅れとなったが、5月25日(木)に新入生歓迎BBQを行うことができた。当日は天候にも恵まれ、51名の生徒が参加した。レク活動のビーチバレーは強風の影響もあり参加生徒は少なかったが、BBQ活動はたくさんの生徒が参加した。BBQ活動は、男の子も女の子も積極的にに関わり、焼きそば、お肉、焼き鳥、野菜炒めなどたくさんの料理を作ることができた。みんなで作ったご飯は普段食べるご飯より美味しく感じた。毎年新入生歓迎BBQ会を行うが、生徒の様子や雰囲気がわかる絶好の交流の機会の場となっている。

② BBQ(写真：活動の様子)



③ ビーチバレー（写真：活動の様子）



④ 生徒の感想文

先輩や同級生とビーチバレーをしたり、クイズをしたりして楽しかった。BBQでは肉を焼いたり、焼きそばを作ったりした。みんなで作ったご飯は美味しかった。最後のレクでスイカ割りをやった。みんなで声をかけあってスイカを割ることができたので良かった。（Y・Kさん）

(5) 沖縄県定時制・通信制夏季体育大会サッカー競技 6月4日（火）

① 大会に向けて

昨年サッカー部を結成し、2回目の大会参加となりました。去年は6チームの参加がありましたが、今年は少なく3チームの参加でした。我がサッカー部は、「全国大会で一勝！」を目標に掲げ、活動を週2～3回のペースで実施しました。しかし、アルバイトや仕事の都合により、毎回8～10人足らずの練習となりましたが、去年より多くの練習試合を経験することで力をつけることができましたと思います。

② 大会結果及び活動の様子

<試合結果：優勝（大会2連覇）>

1回戦 ILC沖縄 5－1 那覇工業、 2回戦 ILC沖縄 11－0 星槎国際高等学校



③ 生徒の感想文（大会を終えて）

去年から在籍するメンバーに加え、新たなメンバー5人と挑む初めての大会でしたが、色々な気持ちが交錯する大会でもありました。諸事情により十分な練習や練習試合の参加が難しいメンバー、もっとしっかり練習を取り組みたいメンバー等、色々な思いがする中、去年全国大会を経験したメンバーが中心となり、優勝（2連覇）を勝ち取る事ができて大変良かったと思います。

(6) 生涯スポーツ（アイススケート）体験 6月8日（木）

時間 10:00～15:00（4時間）、会場 サザンヒル（アイススケート場）

① 担当者による状況報告「担当者保健体育科：城間」

八重瀬町にある沖縄唯一のスケート場サザンヒルで、アイススケート体験が行なわれました。生徒の参加者が多かったため、各自で現地へ向かう生徒と、マイクロバスを利用して現地へ向かう生徒とに分けました。初めてアイススケートを経験する生徒が多い中ではありましたが、学年や年齢問わず、親睦を図りながら楽しく、そして怪我なく終了する事ができました。

② 活動の様子



③ 生徒の感想文

- 初めの内は、たくさん転んで恥ずかしいなと思っていましたが、段々と滑れるようになってきて初めて会う人とも話すこともでき、楽しく、良い経験になりました。(M・Kさん)
- 2回目の参加で、色々なすべりかたをして楽しかったです。また、次の行事にも参加して楽しみたいです。(J・Nさん)



(7) 琉球神話に関するフィールドワーク 6月28日(水)

① 担当者による状況報告「担当者：與那城」

今年度から新しい取り組みで、国語科の袴先生と協力し、国語科・社会科校外学習（以下フィールドワークと記載）を行う計画を立てた。今回のフィールドワークは、「琉球神話」に焦点を絞りに行った。前後期それぞれ一回ずつ実施。前期は16名。後期は19名の生徒が参加した。普段は行かないような場所に足を運び、学校では学ぶ機会がない琉球の歴史を学ぶことができ、生徒はとても有意義な時間を過ごしたことだと思う。来年度もぜひ実施する方向で考えていきたい。

② 琉球の歴史について（活動の様子）



③ 生徒の感想文

- 社会の日本史で学べないことが学べてよかったです。神話は嘘みたいな話が多いので、その分想像が広がって面白いと思います。フィールドワークで行った場所は、自然豊かで神話にまつわる所だからか空気が綺麗だった。(N・Nさん)
- 上り下りの激しいフィールドワークで大変だったけど、普段いかないようなところに行って、沖縄の昔の話が聞けて面白かったです。(H・Mさん)

(8) 進路指導に関する取り組み

① 担当者による状況報告「担当者：與那城」

今年度は下記の2点を目標に重点的に行っている。

- 進路ガイダンス、就職合同説明会・面接会への周知徹底。

少しでも進学や就職に興味を持っている生徒には積極的に声をかけ、進学ガイダンスや就職合同説明会・面接会に連れていくようにしている。まずは現場の話聞くこと、雰囲気を感じる事が進路活動の第一歩目となる。

○ 沖縄市中心市街地就労支援業務「ジョブカフェ」と連携

本校は通信制課程ということもあって、働きながら本校に通っている生徒も多く、卒業後就職を考えている生徒も多い。そのため、今年度から、沖縄市中心市街地就労支援業務「ジョブカフェ」と協力し、面接練習、履歴書作成、マナー講座、インターンシップなどを行い、就職希望者に様々な支援ができるよう体制を整えている。

② 活動の様子



③ 生徒の感想文

今回、「ジョブカフェ」が主催した介護のインターンシップに参加しました。インターンシップを通して、介護の仕事にも看護師が必要であることを実感しました。また機会があれば、ぜひ違う職種のインターンシップにも参加したいです。とてもいい経験ができたインターンシップでした。(M・Hさん)

(9) 写真部撮影会実施 7月22日(土)

① 担当者による状況報告「担任者：池村」

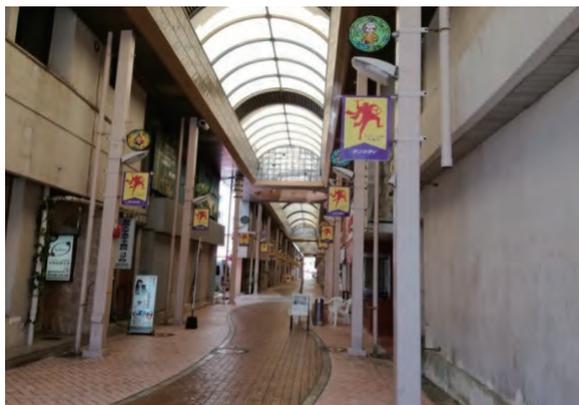
私達写真部は、加藤理事長・校長先生のご指導をいただきながら、平成28年度の4月、正式に沖縄県高等学校高校文化連盟に加入いたしました。部員は少人数ながら、各学期で定期的な活動を行っており、主体性を持たせるためにも活動計画に関しましては、生徒達自身が立案するよう指導しております。

本写真部の活動を通して生徒、教師が親睦や信頼関係を深め、地域そして沖縄の歴史・文化に触れる機会になればと考えております。

② 活動の様子



参加者集合写真



かつては賑わいを見せていたコザ・一番街

③ 生徒の感想文

○ 平成29年7月21日に写真部の活動として、コザ一番街・中央パークアベニューを散策しながらの撮影会が行われました。学校のすぐ隣ですが、なかなか行く機会がなく、昔は沖縄県内有数の繁華街だったと言う印象だけしかありませんでした。行ってみると土曜日の午前中でしたが、人通りが少なく、空き店舗があり、シャッター街になってしまったことに少しショックを受けました。それでも新しくできた雰囲気の良い店が数軒あり、少しずつ変わろうとしているんだなと観察しながら写真を撮りました。

今回の撮影会は各自のスマートフォンで行いました。最新の機種は性能が高く、カメラの明暗を変えたり、フィルターを入れたり一眼レフなどの本格的なカメラとはまた違った良い写真が撮れたと思います。

今回の撮影会は当日が7月下旬ということもあり気温が高く、更には天候が不安定で途中雨が降ったりしました。気分不良になる人がいたり、外での撮影は天候に左右され、体調管理の難しさを教えられました。これからの課題はまだ部員が少ないので、認知度を上げて部員を増やしていけるようにしたいです。

今後の活動として、学校のある沖縄市だけではなく各地にある遺跡などを撮影して沖縄の歴史に触れてみたいですね。(T・Yさん)

- 最初に訪れた場所は、「沖縄市一番街」です。1975年に沖縄で初めてアーケード化された商店街として知られていたそうです。老朽化した店舗も存在しますが、最近ではリニューアルされた店舗も多く誕生するなど新旧が入れ混じった、市民に愛される場所です。私は店番をしているお婆さんと少しの会話をしながら撮影をしました。途中、沖縄市戦後文化資料展示室の「コザ・ヒストリート」を見学。そこには沖縄戦直後のコザの街や、人々の様子が展示されています。私たちにとっては、嘉手納基地に隣り合う「基地の街」として形成された沖縄市の歴史に触れることができる、良い機会となりました。

次の目的地は、「中央パークアベニュー」です。先生のお話では、ここはかつて、県内有数の繁華街として知られていた通りなのだそう。でも、今は影を潜めているように感じました。

今回の活動でコザの歴史を感じ取ることができましたし、大変暑い中でしたが、本当に素晴らしい撮影会となりました。(M・Mさん)

(10) 平成29年度全国高等学校定時制・通信制体育大会 第27回サッカー大会 8月4日(金)～9日

① 担当者による状況報告「監督：城間」

＜開会式の様子＞ 開催地；静岡県

遠方より、ご支援ご指導いただきました校長先生をはじめ、諸先生方のお蔭で今年も全国大会に出場することができた事に感謝とお礼を申し上げます。また、大会につきましては、「去年の成績を1つでも上回りたい」を目標に取り組んできました。残念ながら2回戦で、前年度優勝校に大敗し涙を呑むことになりましたが、一勝できたことは本ILC沖縄サッカー部の大きな一歩となりました。



② 大会結果及びスナップ

「8月5日(土)」(大会1日目)

1回戦 ILC沖縄 6 対 0 武生(福井)



「8月6日(日)」(大会2日目)

2回戦 ILC沖縄 1 対 6 八王子拓真



③ 生徒の感想文(大会を終えて)

去年より一つでも多くの試合を戦いたいと挑んだ大会であり、去年より1日多く滞在することで、環境や大会の雰囲気、そしてチーム作りに取り組めた大会となりました。

遠征初日の沼津商業との練習試合では、全体的にぎくしゃくした中で試合が終了し、試合に対する気持ちや取り組みの差を強く感じた試合になりました。しかし、日頃から全員揃っての練習や生活を共にしていないメンバーも、大会を通して寝食を共にすることや、練習を重ねることで少しずつ打ち解け、一つのチームになった大会でした。



(11) 沖縄校前期卒業式 10月20日(金) 11:00～

① 卒業式の状況報告文「H27年度生担任：平田」

平成29年10月20日、天候にも恵まれ、仙台育英学園高等学校広域通信制課程ILC沖縄前期第4回卒業式が举行されました。これまでの努力を胸に晴れやかな卒業生たちは、緊張した面持ちで校長先生から卒業証書を受け取っていました。式典後は緊張もほぐれ、友人たちや先生達との交流を楽しんでいました。

② 卒業式、卒業生、集合写真等



③ 生徒の感想文（入学式の感想及び今後の目標等に関する作文）

○ 自分は前籍校から転入学して、この学校に入りました。友達も多くでき、勉強を頑張ることができました。先生達も分かり易く勉強を教えてくれて色々な事を学ぶことができました。この学校に転入学して本当によかったです。卒業後は、今の仕事を続けて頑張っていきたいです。(M・Tさん)

○ 私は以前、全日制の高校に通っていましたが、途中で目標を見失ってしまい働くという道を選び中退してしまいました。その頃は自分でお金を稼ぎ好きなことに使うのが次第に周りに負けじと、アルバイトを掛け持ちし忙しい毎日を過ごしていました。そんな生活が続き、「いつまでもこのままじゃだめだ」と思い、将来のことを本格的に考えるようになり、もう一度しっかり高校に行きたいと思い、友達の紹介で仙台育英学園ILC沖縄を受検し2度目の高校生活が始まりました。最初の頃は、全日制と違い行けるときに学校に行けばいいし、自分のペースでやっていけるので余裕を持って進めていくことができましたが、次第に怠けてしまう自分が出始めて、気づけばレポートが全く追いついていかず焦りながらギリギリになってしまう事が多くなっていきました。

何度も諦めてしまいそうになりましたが、そのたびに学校の先生方が声をかけてくれて、「Nさんが諦めなければ、先生たちも諦めないよ。」と言ってくれ、「よし、ならば頑張ろう。」という気持ちになり、どんな時でも粘り強く頑張ることができました。

この経験から、私は諦めない強い心を先生達から学ぶことができました。ダメになりそうな時でも、そこで諦めなければ、どんなに時間がかかろうともゴールにはたどりつくことができる、いつでも逆転できるんだと思います。「逆転の仙台育英、最後まであきらめない。」今こうして卒業できたことも、それを教えてくれた先生方がいてくれたからだと思います。いつでもアットホームな仙台育英学園ILC沖縄で高校生活を送れたことを忘れません。学力よりも人間性が高まりました。社会に出ても学ぶ姿勢を忘れず、どんどん目標に向かって頑張っていこうと思います。(N・Aさん)

(12) 沖縄校後期入学式 10月20日(金) 14:00～

① 入学式の状況報告文「H29年度生担任：與那城」

平成29年10月20日(金)にコザスクーリング会場において、「仙台育英学園高等学校広域通信制課程 ILC 沖縄第四回後期入学式」が行われた。20名の生徒が夢と希望をもって本校に入学してきた。本校で新たなチャレンジに取り組もうとしている生徒、勉強を頑張ろうと学習意欲が高い子、様々な目標や夢を抱いて本校に入学してきたことをILC沖縄職員一同、心から歓迎したい。これからの学校生活をより充実したものにできるよう、ILC沖縄職員一同、精一杯サポートしていきたい。

② 入学式(新入生との集合写真及び校長先生による職員紹介)



③ 生徒の感想文(入学式の感想及び今後の目標等に関する作文)

自分の夢を叶えるためにILC沖縄に転学を決めた。自分でやると決めたからには、最後まであきらめず、一生懸命頑張ります。(Y・Rさん)

(13) 平成28年度の研修旅行について

① 研修旅行の状況報告文「H28年度生担任：池村」

ILC沖縄の研修旅行は、今回をもちまして3回目を数えることとなりました。この間、加藤雄彦理事長・校長先生をはじめ、たくさんの先生方、関係者のお力添えがあり、年々充実したものとなっております。

平成29年2月14(火)～2月17日(金)、3泊4日の内容で東北・東京研修旅行を実施致しました。

那覇から仙台空港に到着したのは夕方5時頃。既に仙台は暗く、私たちの顔には仙台の風がとても冷たく感じました。伯山交通ドライバーの方のお出迎えや学生寮の先生方の手厚いおもてなしがあり、初日を何事もなく終えることができました。

2日目の朝、宮城野校舎を見学させて頂いた後、3ILC合同で大型バスに乗車し、山形県蔵王温泉スキー場へ。蔵王の雪質は格段に素晴らしく、ゲレンデは幻想的な様子に包まれていました。ILC宮城の中嶋教頭先生、ILC青森の加藤先生、竹の子先生のご指導の下、スキー・スノーボード実習が行われました。生徒たちは終始興奮気味の様子でしたが、慣れてきますとリフトを利用し、思い思いにゲレンデを滑っていました。

彼らにとって幸せな一時だったに違いありません。その晩、加藤校長先生が駆けつけて下さり、夕食会が開催されました。生徒たちは山形牛を美味しく頬張りながら、本研修旅行の目的でもある、3ILCの交流を楽しんでいました。

明朝、蔵王温泉から仙台駅へ向けて出発。到着後、3ILCの解団式を行い、ILC沖縄は次の目的地である東京ディズニーリゾートまで約5時間の大移動。伯山交通和光様の運転で安全に送り届けていただきました。

この経験は沖縄の生徒たちにとって、貴重なものになったと思います。そして心待ちにしていたディズニー研修では、寒空の中、生徒、職員も時間を忘れて夢の時間に浸ることができました。

研修旅行最終日は東京散策です。生徒たちが自由に街中を散策し、集合場所の羽田空港に集合するという自主研修です。途中、生徒1人が道に迷うというハプニングがありましたが、誰一人として遅れることなく集まることができました。そして、旅行団は疲れを知らぬまま那覇空港へ到着。そこでは、ILC沖縄浦崎教頭先生を始め、多くの先生方や、保護者の方々の心温まるお出迎えがありました。

今年度の研修旅行を実施するにあたり、加藤雄彦理事長・校長先生の多大なるご高配を賜りました。また、参加者が本研修から大きな収穫を得たとともに、無事に終わることができたのも、ILC宮城、ILC青森の先生方、伯山交通の皆さま、学生寮の先生方のご理解とご協力があったからだと思っております。この場をおかりしまして、厚く御礼申し上げます。

② 活動の様子



伯山交通にて



宮城野校舎見学



スキー・スノーボード実習



夕食会の様子



校長先生へサプライズプレゼント



東京ディズニーリゾート研修



蔵王で集合写真



東京スカイツリーにて

③ 生徒の感想文（研修旅行の感想及び今後の目標等に関する作文）

- 出発する朝は、すごくワクワクした気持ちでした。飛行機から見えた仙台は津波の跡があり、驚きました。初めて過ごす仙台での夜は、白い息が出て興奮しました。

次の日の朝、宿泊した寮の窓から空を見るととてもきれいで沖縄で見たことのない朝の空でした。この日は、ICL宮城、ICL青森と合流して山形県の蔵王へ出発しました。初めての雪とスキー体験でした。スキーの靴は歩きにくくて、スキー用具を持って上に登っていくことに必死になりました。宮城、青森の人たちは雪の中でもみんな慣れた足取りで歩いていました。私はうまく滑れず、寒くて途中で諦めてしまいましたが、積もった雪で雪だるまを作りました。雪はとても冷たかったけど、手袋をしたままだとうまく固まらなくて、すごく手が痛くて赤くなってしまったけど、うまくミニ雪だるまを作ることができて楽しかったです。夕飯はホテルで宮城、青森の人たちと交流して友達も出来たのでうれしかったです。初めて温泉にも入れて、スキーでの疲れもとれて良かったです。

三日目は山形から東京への移動時間が長く、とても疲れました。途中何度もサービスエリアで休憩をとったりしながら向かいましたが、時間がとても長く感じました。ディズニーランドに着いてすぐに、友達と一回転する乗り物に70分も待って乗ったけれど、とても怖くて、今までに出したことのないくらい大声で叫びました。遊ぶ時間もあつという間で楽しかったです。

最終日は東京散策で自分たちで電車に乗って移動しました。渋谷で行きたかったお店に行けて、買い物もできたので楽しめました。羽田空港までの電車もわからなかったけれど、駅員さんに聞いて無事にたどり着きました。

加藤校長先生、泊めてくださった寮の皆さま、送迎をしてくださった伯山交通のドライバーの皆さま、本当にありがとうございました。(J・Kさん)

(14) 「世界津波の日」2017 高校生島サミット in 沖縄」について

① 開催趣旨

11月5日の「世界津波の日」は、津波の脅威と対策への国際的な意思向上を目的に2015年12月の国連総会において日本が提唱して日本を含む142カ国が共同で提案し、全会一致で採択された共通国際デーである。

日本では、2011年3月の東日本大震災を教訓として、同年6月に11月5日を「津波防災の日」と決めました。

これは、1854年旧暦11月5日に起きた安政南海地震の際、和歌山県広川町の庄屋だった濱口梧陵（はまぐちごりょう）が稲わらに火をつけ、村人を高台に導いて大津波から命を救った逸話「稲村の火」に由来しています。「世界津波の日」制定元年の2016年11月、次世代を担う世界中の子ども達に津波の脅威と対策について学んでもらうため、高知県黒潮町で11月25日から26日まで、「世界津波の日」高校生サミット in 黒潮が開催されました。

昨年に引き続き、今年は「世界津波の日」2017年高校生島サミット in 沖縄として沖縄県で開催されました。沖縄県は、1771年に八重山地震による「明和の大津波」で多くの犠牲者をだしました。この大津波は、世界でも最大級といわれ、今でも各地に津波石と呼ばれる歴史的遺産があります。

また沖縄県は、多くの有人離島をもつ我が国唯一の島しょ県です。

今回の高校生サミットでは、沖縄県と同じような自然環境を有する島しょ国の若者がそれぞれの地域での防災の知見と地震津波の脅威を後世へ語り継ぎ、必要な防災、減災、迅速な復旧復興、国際連携に資する施策を総合的かつ計画的に実行することで、地震津波から国民の生命、身体、財産の保護、国民生活及び国民経済に及ぼす影響を最小化できる国土強靱化を担う将来のリーダーを育成することを目的に開催されました。

② パプアニューギニア 国立ソグレイ高校の生徒たち

国立ソグレイ高校の生徒たち（6名）、その中のリーダー男女各1名はグループ発表及び協議会における司会を任せ、緊張した様子は見られたものの滞りなくその大役を全うしました。また発表においては、パプアニューギニアにおける津波の実態や今後の課題と対策についての発表がなされ、各国の生徒たちから賞賛の拍手を貰っていました。堂々とした大変素晴らしい発表でした。

発表終了後の昼食時、少しの時間ではありましたが、ILC沖縄の生徒・職員との交流を持つことができました。その中で、ソグレイ高校の生徒たちと本校の生徒たちは、本校英語教諭（池村先生）のアドバイスを受けながら、片言の英語ではありましたが、にこやかに会話を楽しんでいました。

また、加藤雄彦校長先生から送って頂いた仙台育英学園「タオルマフラー」を、本校の生徒たちからソグレイ高校の生徒一人一人にプレゼントしたところ、大変喜び感謝の言葉を述べていました。

本校の生徒たちにとっても貴重な体験であり、とても素敵な交流会でした。

③ 参加者への激励及びILC沖縄の生徒との交流の様子



④ 生徒の感想文

○ 今回の「高校生津波サミット」の見学で、英語は世界の人々を繋げることのできる、大切な言葉だと改めて感じました。いただいた資料は英語で表記され、読んでみて「私なりに理解しよう」と頑張ってみましたが大変でした。海外の生徒と国内の生徒たち、皆さんが英語で堂々と意見を発表しあう姿は、私の目に本当にかっこ良く映りました。

津波についても学ぶことができました。会場には津波を再現したブースがあり、津波発生の原理や恐ろしさが分かりました。どちらかという英語の苦手な私にとって、討論の内容に関して詳しくは理解できませんでした。でも、スクリーンに写真やグラフが多く使われていたので、その分伝わりやすいと思いました。私たちの姉妹校であるパプアニューギニア国立ソゲリ高校のジョセフ先生や生徒の皆さんは、いい人たちばかりで、記念撮影に快く応じてくれましたし、私たちからの贈り物をとても喜んでくれました。

改めて、英語はコミュニケーションに必要な言葉だと感じました。私は英語を得意な教科にできるよう努力しようと思います。今回は貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました。(Y・Cさん)

○ 「津波サミットっていう国際会議があるんだけど、見学に行ってみない？」と、登校したある日、英語を担当されている先生に言われました。最初はピンときませんでした。津波サミット参加校の中に、本校の姉妹校である、ソゲリ高校の生徒たちが発表をする事を聞かされました。彼らを激励しに行く事が大きな目的だと知り、面白そうだったので見学に行くことにしました。

先生との事前学習で分かってきたのは、津波サミットが採択された経緯、津波の脅威だけでなく、各国の高校生がそれに対してどのように対策を考えようとしているのか。また、彼らが研究成果を英語で発表し合うのが、今回の『津波サミット』なのだ、と言う事です。正直、英語が苦手な私にとって、「その場に行っても、理解できるのかな。」と、とても不安でした。

当日、会場では津波体験ブースがあり、津波発生の原理がわかりました。津波はいつ、どこで、起こるのかわからないんだ、と考えたらとても恐ろしい、と思いました。

観覧席からソゲリ高校の生徒たちにエールを送ったら、笑顔で返してくれてとてもうれしかったです。海外の生徒や国内の生徒がプレゼンしているのを見て、とてもハキハキとしていもっと英語を学んでいたら理解することもできたのかなと思いました。とても英語が魅力的になり、しっかり学習して行きたいと感じました。

引率のジョセフ先生に英語で自己紹介した時は、英会話が身に付いていない私にとって、とても緊張の瞬間でしたし、ソゲリ高校の生徒の皆さんに贈り物を手渡した時は、とても嬉しそうに「Thank you very much!」と笑顔で答えてくれてとても嬉しかったです。

今回、事前の学習を含めて津波について知ることもできましたし、海外の皆さんとも交流ができたので、とても良い経験ができたと思っています。

今回のサミット見学は、自分にとって、津波の体験ブースをもとに津波の被害や恐怖、対策について触れることができました。

このような場を心から楽しむためにも、コミュニケーションツールとしての英語をもっと勉強して自分にとって大切なものが感じられました。(A・Cさん)

5. 平成26年度から平成29年度までの入学者・編入者・卒業生の推移

平成29年度10月現在

	新入学・転入・編入等			除籍・退学・転出等			休学			卒業生			在校生		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
平成26年度 前期	39	34	73	12	7	19	2	0	2	16	22	38	11	5	16
平成26年度 後期	3	6	9	0	1	1	0	0	0	1	5	6	2	0	2
平成27年度 前期	37	49	86	15	8	23	1	1	2	7	11	18	15	30	45
平成27年度 後期	15	12	27	2	3	5	0	1	1	3	3	6	16	6	16
平成28年度 前期	51	45	96	12	3	15	1	3	4	6	1	7	33	41	74
平成28年度 後期	14	12	26	0	1	1	1	0	1	0	1	1	14	10	24
平成29年度 前期	41	48	89	1	1	2	0	0	0	0	0	0	40	47	87
平成29年度 後期	14	6	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	6	20
合計	214	212	426	42	24	66	5	5	10	33	43	76	139	145	284
	男	女	男女	男	女	男女	男	女	男女	男	女	男女	男	女	男女
%	50.2%	49.8%	100%	19.6%	11.3%	15.5%	2.3%	2.4%	2.3%	15.4%	20.3%	17.8%	48.9%	51.1%	100%

※ 本ILC沖縄は、これまで熱意をもって関わっていただいた先生方のご尽力により、開校初年度の平成26年度から現在までの4年間に於いて426名（新入生・転入生・編入生）の生徒を受け入れ、今年度の前期卒業生10名を加えると76名の生徒たちを卒業へと導くことができました。

今年度は前・後期新入生（転入・編入生を含む）107名が新たに加わり、全生徒数284名が各自の将来に夢と希望を見出し、「夢の実現」に向け勉学や部活動に励んでいるところではありません。

しかしながら、急激な家庭環境の変化や生徒の心身の状況変化等、こころざし半ばでリタイヤしてしまうケースも多くみられ、これらの生徒及び家庭に対する支援の在り方等についても今後の課題とし、根気強く関わっていきたいと考えます。

6. 終わりに

私は今年度の4月1日付で所長に就任し、これまでに50校余の中学校・高等学校及び県・市町村教育委員会等を訪問し、本ILC沖縄の現状報告と宣伝活動に従事して参りました。ここで強く感じたことは多くの学校長や進路指導主任、そして各市町村の教育長をはじめ、多くの先生方が「ILC沖縄」の必要性を理解し、個性あふれる子どもたちの受け入れに対し感謝の意を表してくださっているということです。

この場を借りまして、快く迎えていただいた各校の校長先生をはじめ諸先生方、各市町村教育委員会教育長に対し衷心より感謝申し上げます。

また、研究紀要作成に際しご協力いただいた生徒・先生方に心より感謝致します。

私たち「ILC沖縄職員一同」は、如何なる社会情勢化においても仙台育英学園高等学校の一員として課題意識を持って個々の子どもたちの「夢の実現」をサポートできるよう頑張っていく所存です。

終わりに、記載の機会を与えていただいた加藤雄彦理事長・校長先生はじめ諸先生方に感謝致します。

沖縄の格言・・・「いちゃりば ちようでー」

・・・縁あって出会った人は、全て兄弟と同じである。その出会いを大切にしよう！



The poster features the ILC Okinawa logo at the top left, which includes a shield with a yellow lion and the text 'SENDAI IKUEI GAKUEN'. To the right of the logo, the text reads '嬉しい! 楽しい!!' in large, colorful characters, followed by '仙台育英学園高等学校 広域通信制課程' and 'ILC沖縄' in very large, bold, yellow characters with a black outline. Below this, it says 'Ikuei Learning Center Okinawa' in white text on a blue background. The main body of the poster is a collage of images: a modern school building, a mascot character, a group of students sitting on the grass, a student in a classroom, and a sports team on a field. A yellow speech bubble with the text '仲間と一緒にだから頑張れる!' is overlaid on the collage. At the bottom, a red banner with white text reads '2018年春入学・秋入学生徒募集!'.

(2) 演劇部の活動について

特別進学コース 赤間 ゆき

1. はじめに

演劇部にも大会があると言うと驚かれることがあります。あまり目立たない部ではあるかもしれませんが、実は演劇への情熱を持った生徒たちが“熱い”活動を日々地道に行っております。今回の研究報告を通して、演劇部が何を目指し、普段どんな活動をしているのかをご紹介します。よろしくお願いいたします。



発声練習

2. 部の人数、活動場所等について

(1) 平成29年度 部員数

コース	学年	男	女	男女総計
特進	1	1	3	4
情報科学	1		1	1
	2		2	2
外国語	2		2	2
	3		2	2
英進	2	3		3
	3	1		1
フレックス	2		1	1
技能開発	2	1	2	3
合計		6	13	19

【顧問 安部宏紀、赤間ゆき】

部員の所属コースに大きな偏りはなく、様々なコースから演劇に興味を持った生徒たちが集まって活動しています。

(2) 活動場所等

宮城野校舎の北辰5階にある体育実習室Ⅲをお借りして、活動を行っています。鏡張りの大きな部屋で、発声練習やストレッチ、体幹トレーニング、演技練習等を思う存分に行うことができます。活動は月～金の放課後に行っていて、公演が近くなると土日を使って準備にあたりました。



台本読み



シーン練習

3. 平成29年度活動内容

(1) 新入生歓迎公演 4月22日（宮城野校舎 ゼルコバホール）

新入部員勧誘の時期に新入生歓迎公演を行い、鴻上尚史作「エゴサーチ」という作品を上演しました。この劇は元々、3月に宮城野区文化センターで行った単独公演のために練習してきたもので、再演となりました。上演時間は2時間で、私が顧問になってから上演した作品の中で最長の劇でした。12月頃から稽古を始め、冬休みや春休みも練習を行いました。長編の劇に取り組むことで、部員たちも様々な面で鍛えられ、技術を向上させることができました。



単独公演

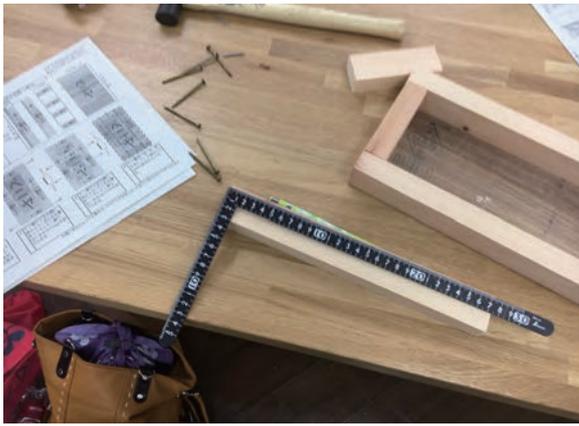


新入生歓迎公演

(2) 宮城県高等学校演劇総合研修会 7月15日～17日（宮城野区文化センター）

この研修会は宮城県高等学校演劇協議会が主催しているもので、演劇界の色々な分野で活躍している講師の方々にお越しいただき、演劇に関する様々な技術の基礎を学びます。講座の種類は、身体訓練、ボイス講座、演技入門、舞台技術基礎、照明、音響、装置、メイクアップ、創作脚本入門、舞台監督、演出術と多岐に渡ります。生徒たちは自分が学びたい講座を選択し、それぞれの研修会に参加します。

演劇部の活動というと、役者の演技練習が真っ先に思い浮かぶかもしれませんが、一つの劇を創り上げるには、これらの講座のように様々な技術が必要となります。研修会終了後の部活では、それぞれの講座を通してどんなことを学んできたかをお互いに共有し合いました。



装置の講座



ミニパネル完成

(3) 第41回全国高等学校総合文化祭演劇部門 7月28日～8月4日(仙台銀行ホール イズミティ 21)

平成29年度の総合文化祭は宮城県で開催されました。総合文化祭とは文化部にとってのインターハイのようなものです。3年生の部員は1年生の頃から、生徒実行委員として大会運営に携わってきました。また、大会期間中は部員全員で会場係や総務等の担当にあたりました。生徒交流会では仙台伝統舞踊のすずめ踊りを全国の高校生に披露しました。

7月31日にサンプラザホールにて行われた各部門合同の総合開会式には、生徒実行委員副委員長を務めていた本校の生徒が、演劇部門の代表として式典に参加しました。

47年に1回のみ宮城県で開催される総文祭の運営に携わることができ、部員たち、そして私自身とても貴重な体験をさせていただきました。全国大会レベルの日本各地の演劇部の公演を観劇し、その技術の高さに胸が震え、多くのことを学ぶことができました。



総合開会式



総合文化祭



すずめ踊りの練習

(4) 育英祭 10月7日 (多賀城校舎 グローリーホール)

育英祭2日目に中ステージで劇の上演をしました。脚本は宮城県出身の若手劇作家である三浦直之氏の「校舎、ナイトクルージング」という作品で、一週間後の地区大会に向けて練習を重ねてきたものです。舞台は夜の教室。大道具は夏休みから制作を開始し、舞台美術にも力を入れました。



大道具制作



音響操作



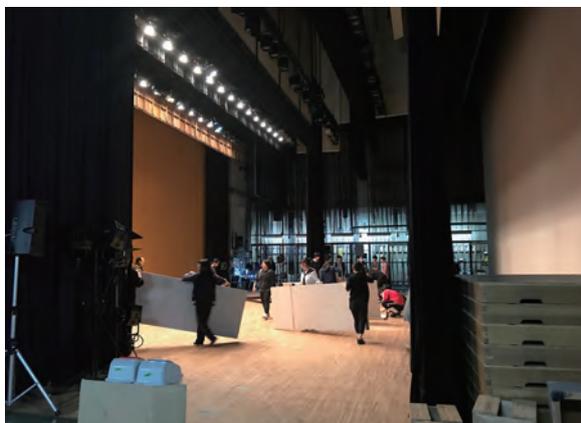
育英祭終演後

(5) 第55回宮城県高等学校演劇コンクール泉・宮城野地区大会 10月14日～15日 (広瀬文化センター)

県内には演劇部がある学校が45校あり、青葉地区、若林・太白地区、泉・宮城野地区、南部地区、東部地区、北部地区の6つの地区に分かれて地区大会が行われます。本校は泉・宮城野地区に所属しており、8校のうち上位2校が県大会に進むことができます。

大会で上演する劇は1時間以内であることが条件で、脚本は創作でも既成でもどちらでもかまいません。本校演劇部は育英祭で上演した「校舎、ナイトクルージング」という既成の脚本でコンクールに臨みました。

結果は優秀賞1席をいただき、県大会に進むことができました。演劇は総合芸術であり、演技だけではなく、照明や音響、舞台美術にもこだわって作品を創り上げた点を評価していただきました。



舞台仕込み①



県大会進出!



舞台仕込み②

(6) 第55回宮城県高等学校演劇コンクール県中央大会 11月11日～12日(栗原市若柳総合文化センター)

県大会では各地区を勝ち抜いてきた12校で、劇の上演を行います。作品は地区大会と同様のものである必要がありますが、それぞれの学校がより劇に磨きをかけてコンクールに臨みます。県大会の上位2校が東北大会に進出することができます。

地区大会の審査員の先生に、教室の廊下の舞台美術についてご指摘いただいたので、県大会に向け、舞台監督が中心となり舞台装置を一部作り変えました。音響も音源を増やし、照明は栗原の会館に合わせて新たなプランを練りました。役者たちも、何度も立ち稽古を重ね、それぞれの役作りに励みました。

県大会の結果は優良賞ということで、東北大会に進むことはできませんでしたが、今回県大会に参加することができ、他校と切磋琢磨し、部の士気を大いに高めることができました。



県大会①



県大会②



県大会③

4. 終わりに

平成29年度は総合文化祭の運営や、県大会出場と今までにない貴重な経験をすることができ、例年以上に充実した活動をすることができました。

現在は新入生歓迎公演に向けて、安部宏紀先生と生徒の合作で創作脚本に取り組んでいます。創作脚本は新たな挑戦となりますが、より育英演劇部としてのオリジナリティを育てていくことができると考えます。今後も活躍の場を広げて、部員たちにはますます成長を続けていってほしいと思います。

以上で演劇部の活動の報告を終わらせていただきます。



全員集合

総目録(第1号～32号)

1986年3月 第1号

巻頭言……………加藤 昭

I. 各種研修会・研修講座に参加して

・全国私立中高全国私学教育研究集会……………2

第33回 全国私立中学高等学校
全国私学教育研究集会山口大会参加報告(1)
柏倉 拓
全国私学教育研究集会山口大会参加報告(2) 国語部会
—新学習指導要領における文学教育— 青野 宏一

・全国私立中高国際教育研修会……………7

第7回全国私立中学高等学校
国際教育研修会に参加して 教諭 宝槻 隆史

・第12回「米国における社会研修講座」……………10

第12回アメリカ社会研修講座に参加して
副題日米社会の相違と文化摩擦 佐々木 豊

・第7回「私学の新任若手教員の研修講座」……………12

第7回私学の新任・若手教員研修講座に参加して
渡部 進

・「名取平野の文化財」史跡見学会の記録より……………14

渡邊 泰伸

II. 昭和60年度職員研修会

・授業研究・各科研究会……………27

国語科(現代文)学習指導案 遣水 満雄
社会科(日本史)学習指導案 駒板 泰吉
数学科(数学I)学習指導案 乾 敬
数学科学習指導案 鈴木 豊治
理科学習指導案 丸山 実信
TEACHING PLAN By Akiyoshi Ohmi

情報処理科 研修のまとめ
公開授業 教科:ベーシック
担当者:野村コンピューターシステム(株) 西村 昌郎
保健体育科柔道学習指導案 佐々木 豊
芸術科研修のまとめ

編集後記

1987年3月 第2号

巻頭言……………加藤 昭

I. 研究

・宮城県加美郡中新田町熊野堂遺跡調査略報……………2
渡邊 泰伸

・コンピュータによる学業成績処理……………28

瀬戸 信男
佐々木一郎

II. 各種研修会・研修講座に参加して

・第13回米国における社会研修講座に参加して……………39
沢田 敏明

・英語教師のための夏期セミナー講演会報告……………42
山田 昇

・第24回全国私立中学高等学校
保健体育科研修会に参加して……………50
阿部 俊英

・第28回全国私立中学高等学校
理科(生物)研修会に参加して……………52
今野 良裕

・第1回全国私立中学高等学校
ニューメディア教育研修会に参加して……………54
瀬戸 信男

III. 昭和61年度職員研修会

・授業研究・各科研究会……………59

国語科研究会報告 遣水 満雄
社会科研究会報告 渡邊 泰伸
数学I C不等式の表す領域 中川 良雄
代数幾何学習指導案 渡部 進
数学科研究会報告 中川 良雄
理科I 学習指導案 砂沢 準助
英語科研究会報告 宝槻 隆史
芸術科研究会報告 安倍 一男
情報処理I (BASIC) 小林 慶三

保健学習指導案 佐々木一郎
佐々木松治

編集後記

1988年3月 第3号

巻頭言……………加藤 昭

I. 研究

・仙台市安養寺下窯跡……………2
渡邊 泰伸

研究発表
・大学入試に取り扱われたカテナリー・サイクロイド・
インボリュート曲線について……………22
鈴木 弘

II. 各種研修会・研修講座に参加して

・第十四回 米国における社会研修講座(CIAA主催)
に参加して……………29
今野 良裕

・アメリカテキサス大学語学研修報告……………60
柏倉 拓

・第二十五回全国私立中学高等学校
保健・体育科研修会報告……………71
沢田 敏明

・第二十一回全国私立中学高等学校 生徒指導研修会報告	76	佐々木 豊
・第二十三回全国私立中学高等学校 道徳宗教教育研修会報告	78	及川千一郎
・第二回全国私立中学高等学校 ニューメディア教育研修会報告	81	大場 幸
・第九回国際教育研修会報告	86	出井まち子
・ジェラルド・ロビンス ピアノリサイタル報告	89	荒井 恵子

III. 昭和62年度職員研修会

・授業研究・各科研究会	91	
・短歌教材指導について		高橋 正幸
・社会科研究会報告		柏倉 拓
・数学科（基礎解析）学習指導案		乾 敬
・校内公開授業		中川 良雄
・数学科研究会報告		佐藤 亘 松尾 勝郎
・理科（化学）学習指導案		櫻井 忠良
・理科研究会報告		砂沢 準助
・英語科研究会報告		小野 明夫
・書道Ⅱの学習指導について		安倍 一男
・ワープロ学習指導案		遠藤 卓 大場 幸
・保健体育指導		阿部 由晴

編集後記

1989年3月 第4号

巻頭言

I. 研究発表	1	加藤 昭
1. 安養寺下窯跡第3次調査	2	渡邊 泰伸
2. 同一素材の外国語翻訳を試みて	28	波里 光彦
II. 海外研修	45	
1. アメリカ夏期語学研修についての報告と所感	46	坂爪 英夫
2. 地球の裏から「オブリガード」	51	宮本 昇
III. 全国私学研修報告	63	
1. ニューメディア教育研修会報告	64	大場 幸
2. 現代社会とこれからの体育	96	丹野 博太

IV. 第36回全国私学教育研究集会新潟大会	99	
1. 特色教育部会報告	100	高山 直光
2. 福祉活動を中心として	110	小林 慶三
3. 教育課程部会報告	114	庄司 均
4. 国語分科会	121	笠岡 庸志
5. 英語分科会	134	宝槻 隆史
6. 商業部会報告	138	遠藤 卓

V. 校内公開授業各科研究会

・国語科研究会報告		遣水 満雄
・国語研究会報告		ソビエト連邦の教育事情と日本 中津川清風
・社会科研究会報告		小野寺文雄
・数学科研究会報告		校内研究授業〔数学Ⅰ〕学習指導案 岩渕 定義 校内研究授業〔確率・統計〕学習指導案 鈴木 弘
・理科研究会報告		砂沢 準助
・理科授業研究“ヒトの生殖と発生”を行うにあたって		横澤 秀夫
・英語科研究会報告		宝槻 隆史 谷津 繁勝 小野 明夫 大沼 洋二
・芸術科研究会報告		時代に即した音楽教育 武藤 信子
・保健体育科研究会報告		保健体育「柔道」指導案 沢田 敏明
・情報処理科研究会報告		「進化する紙」 佐々木一郎

VI. 編集後記・奥付

1990年3月 第5号

巻頭言		加藤 昭
I. 研究		
・仙台市安養寺下窯跡 第4次調査概報	1	渡邊 泰伸
II. 各種研修会・研修講座に参加して		
・全国私学教育研究集会講演（教育課程部会）より	25	小林 慶三
・平成元年度 高等学校学習指導研修会	27	渡部 進
・私学経営研究会教員研修セミナー		

第11回私学の新任・若手教員研修講座報告	35
若澤 幸弘・及川 隆夫	
・第37回全国私学教育研究会大阪大会	
岩淵 定義	
〔1〕 数学分科会報告	49
〔2〕 進路指導部会報	63
・全国私立中学高等学校	
第4回ニューメディア研修会に参加して	74
渡部 進	
・第30回東北地区私学教育研究会に参加して	86
山田 昇	
・第25回全国私立中学高等学校家庭科研修会	90
庄司 均	
・カナダ語学研修について	93
佐々木清彦	
・英国語学研修報告	102
阿部 徹・出井まち子	
・カー先生の日本体験記	117
波里 光彦	
Ⅲ. 授業研究・各科研究会	
・国語科学習指導案	143
千田 亥彦	
・数学科学習指導案	146
渡部 進	
・数学科学習指導案	152
菅井 了	
・数学科研究会報告	157
・理科(化学)学習指導案	161
半澤 健	
・化学実験の一考察	167
半澤 健	
・情報処理科(簿記会計)学習指導案	173
佐々木英明	
・保健体育科学習指導案	177
丹野 博太	

編集後記

1991年3月 第6号

巻頭言	加藤 昭
Ⅰ. 国際化教育への模索	
・日本の「国際化」に思う	1
波里 光彦	
・創立85周年記念事業 国際理解のための講演会	17
研修課	
・全国私立中学高等学校	
第12回国際教育研修会に参加して	34
佐々木清彦	
・夏期イギリス語学研修(女子)	60
関谷 照夫	
・夏期イギリス語学研修(男子)	73
桜井 忠良	

・女子卓球部中国遠征報告	85
若澤 幸弘	
・仙台育英学園高等学校創立85周年記念	
日本, カナダ国際親善ラグビー遠征記	89
伊藤挺一郎	
・第31回東北地区私学教育研修会 英語分科会	
「How to give the motivation to the students」	
キヤム・カー	104
Ⅱ. 多賀城フォーラム	
・「多賀城フォーラム21」行わる	121
加藤 雄彦	
Ⅲ. 研究・研修	
・第25回全国高等学校体育学科連絡協議会に参加して	137
丹野 博太	
・平成2年度 研修課年間計画	
情報処理研修報告	144
佐藤 正行	
・平成2年度全国私立中学高等学校	
第5回ニューメディア教育研修会報告	167
佐藤 正行	
・私学経営研修会教員研修セミナー	
第12回私学の新任・若手教員研修講座報告	222
佐藤 正行	
・第12回私学の新任・若手教員研修講座	227
佐々木英明	
・西多賀養護学校を訪問して	228
若澤 幸弘	
・宮城県生徒指導研修会に参加して	230
佐々木英明	
・国語科(漢文)公開授業並びに教育研究会	241
寺尾 幸吉	
・数学科公開授業並びに教科研究会	248
近藤 精宏	
・英語科公開授業並びに英語科教科研究会	255
立谷 梨	
・理科科公開授業並びに教科研究会	260
男澤 文義	
・社会科教科研究会	263
阿部 徹	
・保健体育科(保健)公開授業並びに教科研究会	266
沢田 敏明	
編集後記	269

1992年3月 第7号

巻頭言	加藤 昭
Ⅰ 研究	
・仙台市安養寺下窯跡	1
渡邊 泰伸	

II 多賀城フォーラム	
・第2回多賀城フォーラム	37 加藤 雄彦
III 講演「山形の一教師の実践論」	55 山形県生涯学習人材育成機構専務理事 打田 早苗
IV 研修報告	
・平成3年度高等学校教育課程講習会	75 凌 時哉
・東北国語教育研究会	83 佐々木隆男・板橋 敏男
・平成3年度宮城県高等学校教育課程講習会外国語部会	94 関谷 照夫
・第13回私学の新任・若手教員研修会	120 佐藤 弘
V 海外遠征報告（平成3年度）	
・夏期カナダ語学研修	125 関谷 照夫
・夏期イギリス語学研修（男子）	135 山田 紀英
・夏期イギリス語学研修（女子）	150 砂金 紀
・オックスフォード紀行	162 高平たつみ
・軟式庭球部台湾遠征	172 佐藤 正行
・女子卓球部スウェーデン遠征	176 大岡多津子
・イタリア知識旅行事前調査	180 小林 慶三・渡部 進・佐々木順子 武田 美法・加藤 晃孝
・女子卓球部中国（上海市）遠征	191 若澤 幸弘
VI 研究・研修	
・校内研修会実施要	193
・国語科公開授業並びに教科研究会	194 及川千一郎
・数学科公開授業並びに教科研究会	224 佐藤 孝
・英語科公開授業並びに教科研究会	230 秋山なみ江・出井まち子
・理学科公開授業並びに教科研究会	232 渡辺 重隆
・社会科教育研究会	238 加藤 晃孝
VII 論文	
・国語科短歌鑑賞会 一高校生の読み物として一名歌少考	245 高橋 正幸

・「うたごころ」	256 加藤 武夫
編集後記	259

1993年3月 第8号

巻頭言	加藤 昭
I 研究	
・仙台市安養寺下窯跡（第7次調査概報）	1 渡邊 泰伸
II 研修・遠征報告	
・第14回私学の新任・若手教員研修講座	47 槇 統
・全国高等学校選抜卓球大会二連覇を達成して	50 大岡 巖
・オーストラリア英語に接して	52 庄子春一郎
・平成4年度夏期イギリス語学研修	54 渡邊 泰伸
・男子陸上チームのカナダ・バンクーバー遠征	106 二階堂 進
III 校内研修会	
・平成4年度校内研修会実施要項	109
・国語科教科研究会	110 佐藤 秀一
・数学科公開授業並びに教科研究会	154 加藤 晃孝
・理学科教科研究会	163 八木 浩
・社会科教科研究会	203 佐藤 林平
・保健体育科公開授業並びに教科研究会	212 槇 統
・情報処理科公開授業並びに教科研究会	217 佐々木英明
編集後記	223

1994年3月 第9号

巻頭言	加藤 昭
I. 加藤利吉先生生誕111年 学園創立88周年記念 事業	
・多賀城校舎グロリーホール落成を記念して	1 半沢 健
・記念講演—大きく変わりつつある世界そして学校の ゆくえは	7 ロバート・カークナー
・平成5年度父母教師会総会講演	26 トミー植松

II 研究	・地学学習指導案……………276	武田 要吉
・仙台市安養寺下窯跡（第8次調査概報）……………37		
渡邊 泰伸	・英語科研究会……………285	武田 美法
・宮城県志田郡松山町下伊場野窯跡調査略報……………58		
渡邊 泰伸	・総合実践業務処理システム実習概要……………293	瀬戸 信男
III 海外研修・遠征報告	・保健体育科学習指導案……………325	庄司 和良
・女子バレー部韓国研修旅行……………105		
佐藤 幸雄	・保健体育科柔道学習指導案……………327	松原潤一郎
・サッカー部ドイツ遠征……………107		
佐藤 脩	編集後記……………330	
・中国グランプリ国際大会報告書……………123		
大岡 巖	1995年3月 第10号	
・ポーンマス再訪……………124	巻頭言……………加藤 昭	
渡邊 泰伸	I 研究	
・平成5年度イギリス語学研修に参加して……………180	・仙台市安養寺下窯跡（第9次調査概報）……………1	渡邊 泰伸
高谷 功	II 海外研修・語学研修	
・平成5年度カナダ研修旅行……………195	・英国語学研修 [ポーンマス] の記録……………31	渡邊 泰伸
今野 仁	・カナダ語学研修旅行を共にして……………93	日下 英夫
・クリスマスをアメリカの一家庭で過ごして……………206		
庄子春一郎	・カナダ語学研修報告……………105	柏倉 拓
IV 研修報告	・CBS杯招待遠征報告（韓国（ソウル）雑感）……………115	丸山 博史
・平成5年度私立学校初任者研修全国研修会（第2回）……………209		
庄司 和良	・韓国CBS杯全国高等学校バレーボール大会に参加して……………121	藤屋 秀人
・平成5年度私立学校初任者研修全国研修会（第2回）……………214		
寺内るみ子	・ニュージーランド語学研修／姉妹校訪問……………124	二階堂 勉
・第15回私学の新任・若手教員研修講座……………219		
寺内るみ子	・ニュージーランド語学研修……………129	小野 裕子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座を受講しての報告……………223		
松原潤一郎	・ハワイ修学旅行下見についての報告と雑感……………131	坂爪 英夫
・全国私立中学高等学校性教育研修会参加報告……………226		
柏倉 拓	・ラグビー部ニュージーランド遠征についての報告……………136	丹野 博太
・平成5年度全国私立中学高等学校生徒指導研修会……………230		
宝槻 隆史	・ヨーロッパ・橋紀行……………145	関根 一郎
・私学の特色ある教育課程の実践に向けてII……………233		
佐々木 豊	・オーストラリアの高校生活—公立キルコイ高校の場合……………154	庄子春一郎
・平成5年度全国私立中学高等学校数学科研修会報告……………248		
加藤 晃孝・鈴木 孝司	V 校内研修会	
・全国私立中学高等学校英語科研修会……………252	・平成5年度校内研修会実施要項……………255	
武田 美法	・効果的国語指導の在り方……………256	及川千一郎・清水 初治
V 校内研修会	・社会科教育研究会……………266	高谷 功・渡邊 泰伸
・平成5年度校内研修会実施要項……………255		
・効果的国語指導の在り方……………256		
及川千一郎・清水 初治	・数学科研究会記録……………271	佐々木順子
・社会科教育研究会……………266		
高谷 功・渡邊 泰伸	III 研修報告	
・数学科研究会記録……………271	・平成6年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修会報告……………163	引地 由佳
佐々木順子	・平成6年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修報告……………167	中村 千恵

・第35回東北地区私学教育研修会	171
今野 仁	
・第35回東北地区私学教育研修会参加の報告	180
佐藤 林平	
・第35回東北地区私学教育研修会進路指導部会	199
大場 幸	
・第35回東北地区私学教育研修会学習指導部会理科分科会	205
大沼 正行	

IV 校内研修会

・平成6年度校内研修会実施要項	209
・「国語科」研究会	210
鎌田 敬	
・数学科研究会記録	215
佐藤 孝	
・英語科研究会	220
砂金 紀	
・理科研究会	226
横澤 秀夫	
・社会科研究会	235
阿部 徹	
・情報処理科研究会	242
佐藤 正行・内海 利男	
・保健体育科指導計画	256
中村 光男	

1996年3月 第11号

創立90周年特別号

巻頭言	加藤 昭
-----	------

I 研究

・「世界史」探訪の旅	1
武田 義之	
・不登校児への対応を探る	8
半澤 健	
・宗教と人生	20
小柳 俊夫	
・文学教材指導法雑感	34
伊藤源太郎	
・補助教材として授業中に使用した参考作品集	48
丹野 将範	
・生活史に反映する伝承音楽の役割	94
鎌田 敬	

II 海外研修

・カナダ研修旅行	111
太宰 芳郎	
・イートン校サマースクールを終えて	121
加藤 晃孝	
・オーストラリアの中学生活 公立モーソン中学の場合	125
庄子春一郎	

III 研修報告

・平成7年度『財政経済セミナー』に参加して 我が国財政の現状と課題	129
小嶋 聡悦	
・全国私立中学高等学校国語科研修会研修報告書	170
引地 由佳	
・「性教育研修会」に参加しての報告	174
出井まち子	

編集後記	177
------	-----

1997年3月 第12号

巻頭言	加藤 雄彦
・授業の活性化	1
半澤 健	
・世界史探訪の旅II	6
武田 義之	
・修学旅行事前調査報告	21
沼田嘉一郎	
・韓国スポーツ交流団へ参加して	26
坂爪 英夫	
・韓国修学旅行事前調査に参加して	53
宝槻 隆史	
・Memories of Canada	59
清水 初次	
・学校茶道の果たす役割	63
佐藤 宗秀	
・茶事の研修	69
岡崎 宗豊	
・裏千家今日庵を訪ねて	71
馬淵 宗友	
・21世紀にお茶の心をつなごう	74
木村 宗智	
・カナダ研修旅行報告	78
山田 昇	
・イギリスアップランズカレッジ語学研修事前調査に いって	82
小嶋 哲朗	
・「私学教員のめざすもの」についての一考察	85
下平 孝富	
・北海道・東北地区研修会	88
富澤 良江	
・当世イングランド南西地区環境状況	91
内海 利男	
・宮城野校舎での「LD学習」の利用の現状について	94
工藤 敏夫	
・『第1回実用英語技能検定』の結果を振り返って	100
尾形 照子	
・異文化体験	102
庄子春一郎	
・『ライオンの晴』発行について	108
山本吉之助	

- ・CS向上めざして教養コースからの提案 ……113
坂爪 英夫
- ・多賀城セクション生徒寮保護者懇談会概要報告…126
守 喜美夫・加藤 晃孝
- ・教育実習（養護教諭）期間中に行った研究について
……………137
指導 木村 保子・佐藤 雅美
- ・KOREA旅行雑感・1996年 ……145
阿部 俊徳
- ・長春外国語学校との姉妹校締結記念
中国訪問親善交流・研修の記録……………152
曾我 道雄
- ・那須研修の現状について……………166
藤岡 昌之
- 編集後記……………186

1998年3月 第13号

- 巻頭言……………加藤 雄彦
- ・演題「180°変わる進学英語」……………1
佐藤 良明
- ・世界史探訪の旅Ⅲーチュニジア共和国とカルタゴの
遺跡ー……………10
武田 義之
- ・雄と雌の話……………25
半沢 健
- ・高校生の喫煙についての一考察……………52
富澤 良江
- ・平成8年度教養コースにおける生徒指導の一つの試み
……………59
沼田嘉一郎
- ・平成8年度修学旅行……………75
瀬戸 信男・小川 久松・渡邊 泰伸
- ・カナダ日記 1997年夏……………84
阿部 俊徳
- ・アンコール・ワットへの旅……………94
佐藤 雄三
- ・CS向上をめざす物理教育の一試案……………102
高橋 明
- ・英国語学研修実施報告……………121
千代窪敏光
- ・平成9年イギリス夏期語学研修（ボーンマス団）
……………125
遊佐 隆司
- ・松島研修センターの概要……………133
榊井 庸彦・渡辺 章紀・佐々木英明
千葉 浩・青木 康博
- ・オーストラリアのハイスクール……………149
庄子春一郎
- ・ペルシアの風ーイラン旅情……………158
伊藤源太郎
- ・授業における吹奏楽の試み……………212
牛渡 純

- ・はじめてのクロアチア国際交流……………218
澤口 衛・藤屋 秀人
郷古 武・木村 美知
- ・国際ゆめ交流博覧会の報告……………230
ジェシタ ワンジロ ムタヒ

編集後記

1999年3月 第14号

- 巻頭言……………加藤 雄彦
- ・初任者研修……………1
PART I 宮城野中学校での中高連携授業研究会に
参加して
日比野曜子 鈴木 暁子 佐々木順子
引地 由佳 下平 孝富 佐々木順一郎
富澤 良江 箱島 道泰 榎 統
藤屋 秀人 千葉 浩 岡崎 由起
古宮 紀子 池口真理子 鈴木 保恵
松原潤一郎 吉田 淳 郷古 武
望月久美子
PART II 三色最中を訪ねて
望月久美子 下平 孝富 古宮 紀子
池口真理子 榎 統 鈴木 暁子
松原潤一郎 佐々木順子 鈴木 孝司
鈴木 保恵 岡崎 由起 引地 由佳
- ・数学嫌いをつくり出す原因を本校生徒よりさぐる
……………33
渡部 進
- ・Message from Mahurangi College, NZ……………45
ジョン・スコベル
- ・ニュージーランド修学旅行……………48
庄子春一郎
- ・ドイツ滞在3年あれこれ……………54
佐々木芳輝
- ・高等学校におけるコンピュータ事情……………63
高階 公・若松 武徳
- ・我が国の人名習俗ー複名習俗としてのー……………74
新関 昌利
- ・ヨーロッパ知識旅行……………84
藤岡 昌之
- ・簿記会計1級合格を目指して……………91
坂爪 英夫
- ・シリーズPART IV「中国」……………93
北京・長春の見聞
中国の近代史をみる
坂爪 英夫

編集後記

2000年3月 第15号

巻頭言	加藤 雄彦	
I 研究報告		
(1)平成7,8年度帰国子女教育研究	1 千葉 浩	
(2)高校生時代の「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱と、その人格形成への影響について－「日の丸」「君が代」に関する一考察－	30 若松 武徳	
(3)わが育英における語学教育－中国語教育について－	44 張 言行	
II 平成11年度新任者研修の記録		
(1)「講演会」	49 大学から見た、これからの青少年への期待 期 日 H.11年3月8日(月)16時より 講 師 東北大学総長・工学博士 阿部 博之先生 会 場 宮城野校舎 大会議堂	
(2)「講演会」	コーチング科学について 期 日 H.11年6月18日(月) 16:30～17:50 講 師 順天堂大学スポーツ健康科学部、 コーチ学バレーボール研究室 河合 武司 先生	
(3)平成11年度体育会運動部校内研修会	－コーチング科学講演会をきいて－	71 杉本 真・進藤由里子
(4)北海道・東北地区私学学校初任者研修会に参加して	－職業人である私学教員として「私学」というものをきちんと理解し、認識する－	74 鎌田千佳子
(5)北海道・東北地区私立学校初任者研修に参加して	－21世紀が求める学力を育む学習とその指導－	80 佐藤 恵美
III 研修旅行		
(1)イギリス・アップランズカレッジ語学研修	85 千葉 浩	
(2)カナダ研修旅行記	96 秋山なみ江	
(3)イギリス語学研修	104 武田由紀子	
(4)1998年教養コース修学旅行下見報告(瀬戸内班)	113 渡邊 泰伸	
IV 歳時記		
(1)NewYork Symphonic Ensemble	－Japan Concert Program 1998－	
1.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルと仙台育英高等学校混声合唱団・仙台育英学園秀光コース・秀光中学校オーケストラ・ジョイントコン		

サートを終えて」	122 牛渡 純
2.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルジョイントコンサートに参加して」	126 中村 桂子
3.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルジョイントコンサートの合唱指導」	129 横山 功
(2)ケニヤからのメッセージ	135 エライジャ・J・ギタオ
(3)オランダからきた柔道人－オランダからやって来た柔道家たちとの交流記－	139 箱島 道泰
V 英文中文目次要旨	142
編集後記	

2001年3月 第16号

巻頭言	加藤 雄彦	
「トピックス」		
「一瞬に賭けたエアピストル」	－シドニーオリンピック・エアピストル競技出場 稲田容子先生応援記－	1 沼田嘉一郎
I 研究報告		
(1)「開かれた学校経営」	～集めるPTAから、集まるPTAをめざして～	6 沼田嘉一郎
II 平成12年度研修の記録		
(1)「第1回教職員研修会」	「社会に背を向ける青少年の心の問題」 講 師 宮城県中央児童相談所次長 本間 博彰氏	13
(2)「進学CLUB講演会」	「生きる喜び」－ガンとの戦いにうち勝って－ 講 師 千葉 勇作 氏	27
(3)「第2回教職員研修会」	「オリンピックの活躍とキューバスポーツ」 講 師 キューバスポーツ省 ロベルト・ゴンザレス 氏	44
(4)「指導者講習会」	「中国のスポーツ事情」 講 師 孫 国華 氏	
III 研修旅行		
(1)教養コース 中華人民共和国 中国研修旅行の記	「大きな一歩－中国5日間の旅」	57 佐藤 學
(2)教養コース 英語語学研修	「英語での初めての生活はスケッチブックと」	70 佐々木仁志

(3)英進コース カナダ語学研修 「語学研修 犬ですら英語でしか反応しない」	82	芳賀 良光
(4)韓国研修「韓国の古都慶州を駆けぬける」 第16回コーロン杯高校区間マラソン大会招待参加 記録	90	遊佐 隆司
(5)外国語コース ヨーロッパ語学研修 「すばらしき体験」 「What a LOVELY experience !」 ーイギリス(チャタム)語学研修を終えてー	97	渡辺有紀子
(6)特別進学コース 英語語学研修 「心豊かな日々」ーイギリス・アップランズ・コ ミュニティ・カレッジ語学研修ー	111	佐伯 達二
IV 英文・中文目次要旨	129	
編集後記		

2002年3月 第17号

巻頭言		加藤 雄彦
「トピック」 「キューバ訪問」 訪問の記録	1	
I 研究報告 イギリスの教育改革	14	若松 武徳
II 平成13年度研修の記録 (1)講演 こころの担任	22	仙台市教育長 阿部 芳吉
指導者のあるべき姿勢と今日の日本スポーツ現状	32	帖佐 寛章
(2)研修記録 「本校における国際交流」 ー平成13年度第41回東北地区私学教育研修会国際 教育部会ー	49	大場 幸
(3)開放講座「生き生き学級」の実践	63	船島 敏之
III 研修旅行 (1)教養コース ニュージーランド研修旅行 「育英学園の教師であればこそ」	67	佐々木 功
(2)英進コース 英国語学研修 「貴重な経験」	76	山川真理子

IV 歳時記 「少林寺拳法国際大会2001」出場実施報告書	88	佐々木英明
V 英文中文目次・要旨	92	
編集後記		

2003年3月 第18号

巻頭言		加藤 雄彦
「トピック」 「全国制覇」夢達成に胸を張り。	1	佐藤 達雄
「～千人の思いよ届け！～バンブーオーケストラ」	3	相良 信恵
I 平成14年度 研修の記録 (1)「21世紀の情報教育」ー図形と画像処理ー	10	小林 祐喜
(2)仙台育英学園高等学校における公文式英語学習の導 入について～ The report on the introduction of Kumon English Method at SENDAI IKUEI GAKUEN HIGH SCHOOL ～	26	日野 彰
(3)平成14年度私立学校初任者研修 北海道・東北地区研修会参加報告	32	石山かおり
II 研究報告 (1)文章指導についての一考察 ー小論文入門編としてー	41	齋藤 典子
III 研修報告 (1)教養コース 中国研修旅行 研修旅行で学んだもの	66	佐竹 伸彦
(2)英進コース イギリス語学研修 Letters From Cambridge (ケンブリッジからの便り)	82	進藤 満
IV 英文目次・要旨		
編集後記		

2004年3月 第19号

巻頭言		加藤 雄彦
トピック クローチアからの手紙	1	ドリカ・グロシニッチ

I 研究報告

- (1)通信制課程における教科指導—ビデオを利用した地球環境と生物界の変化について—……………3
金田 敏宏

- (2)投球速度の異なる投手の投動作の比較研究
—高校野球選手を対象として—……………7
佐々木順一郎

平成15年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究所
スポーツ科学領域コーチング科学専門分野修士論文
指導教官 川合 武司 教授

- (3)第3期(社)日本経済団体連合会
キャリア・アドバイザー養成講座受講報告書……………37
佐々木 豊

II 研修旅行

- (1)外国語コース ニュージーランド語学研修旅行
ENCOUNTERING A DIFFERENT CULTURE
「異文化との出会い」……………47
永井 惇

- (2)英進進学コース ニュージーランド語学研修旅行
「はじめてのニュージーランド語学研修」……………54
石田 昌彦

編集後記

2005年3月 第20号

- 巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

- ケニアからの留学生 サムエル・ワンジル (Samuel Kamau Wanjyu) 君と書道の出会い—心の修行に—
……………1
渡邊 章紀

I 研究報告

- (1)心豊かな生徒の育成をめざして
—合同LHRをとおして—……………5
秀光中等教育学校 ホームルーム委員会 代表
高橋 守雄

- (2)宮城県高等学校商業教育研究会平成16年実務演習
講習会受講報告……………15
佐々木英明・日野 彰

- (3)フォローアップ講座についての考察……………24
小野 仁也・櫻井 順

- (4)スピン軸は公転軸を目指す……………51
原 憲之介

- (5)1年生の試行錯誤……………62
本木 真人

- (6)宮城県加美郡色麻町 土器坂瓦窯跡の調査
—雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦を出土する色麻柵付
属瓦窯跡の調査—……………78
仙台育英学園高等学校考古学研究部 古窯跡研究会

II 平成16年度 研修旅行報告

- (1)教養コース 北海道研修旅行
—有意義で事故の無い研修旅行の実践—……………182
船島 敏之

- (2)教養コース 中国研修旅行報告……………187
瀬戸 信男

- (3)秀光中等教育学校 スイスの自然環境保護への取り
組み—ユーロスクールを通して感じたこと—……………193
小林 祐喜

- (4)英進進学コース ニュージーランド留学研修
—新たな発見を求めて in New Zealand—……………199
高橋 美保

- (5)英進進学コース カナダ語学研修旅行……………207
木村 啓子

- (6)特別進学コース カナダ語学研修
—自然を愛する国—……………212
高根 司

2006年3月 第21号

- 編集後記

- 巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

- 青い目の剣士たち—スウェーデン研修から—……………1
田中 裕子

I 研究報告

- (1)スペイン語の指導法の研究……………11
コレテス・レオン

- (2)憲政初期の選挙運動の一形態……………23
井上 祥

- (3)トリプルA委員会の計画と取り組みについて……………31
トリプルA委員会委員長 佐々木英明

- (4)MBPとKBPの比較
—国際収支理論を中心に—……………35
雫石 誠孝

- (5)平成17年度
公文英語・英語Iの関連性における考察……………46
高橋 美保

- (6)部活動指導における一考察
—サッカー部三年間の歩み—……………70
吉井 秀邦

- (7)創作脚本講習テキスト
—宮城県高等学校演劇総合研修会—……………76
渡部 進

- (8)古代東北における古瓦の研究……………83
渡邊 泰伸

II 平成17年度 研修旅行報告

- (1)特進コース
アイルランド・オーストラリア語学研修……………122
日比野曜子

- (2)英進コース 北海道研修旅行……………134
伊藤 寿展・桜井 順

(3)英進コース イタリア研修旅行	148	池口真利子
(4)英進進学コース カナダ語学研修旅行	159	石田 昌彦
(5)外国語コース アイルランド語学研修	173	岡崎 由起
(6)フレックスコース 北海道研修旅行	180	大友 健一

編集後記

2007年3月 第22号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

毎日書道宮城県高校生選抜書展団体賞 —第12回展～第16回展(2002～2006) 5連覇を叶えた仲間たち—	1	渡邊 章紀
--	---	-------

I 研究報告

(1)フォローアップ講座についての一考察	13	加藤 美穂
(2)TOEIC/TOEIC Bridge教員向けセミナー —「高校における活用事例」—2006—仙台に参加 して—	34	小野寺朋子・日比野真奈
(3)法学の学問的特殊性 —その概念形成の仕方に注目しつつ—	37	伊藤 剛
(4)特別進学コース プラン2000実施報告 —平成16年～18年度の取組について—	44	倉橋 真司

II 平成18年度 研修報告

(1)英進進学コース カナダ語学研修	61	相良 信恵
(2)英進進学コース 北海道研修報告	69	渡邊 章紀・文屋 祐介
(3)英進進学コース 英進コース研修 —膨大な歴史・文化の都イタリアを訪ねて—	94	佐竹 伸彦
(4)外国語コース アイルランド・ドイツ 語学研修	109	岡崎 由起
(5)フレックスコース 北海道学研修	117	1班(男子) 富栄 博行 2班(女子) 島倉 尚子
(6)秀光中等教育学校 「2006ユーロスクール」実施報告	127	前半 船越 總眞 後半 ダブリン班 千葉 浩 レンヌ班 石田真理子 エジンバラ班 脇 淳

(7)通信制課程 異文化体験ハワイ研修	156	大竹 聡美
---------------------	-----	-------

編集後記

2008年3月 第23号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

「仙台育英中学校創立記念誌」の発見とその内容について —戦火を超えて残った大正12年2月発行の記念誌—	1	渡邊理律子
--	---	-------

I 研究報告

(1)高等学校における日本思想を扱った学習指導について —保科正之の思想と会津を事例として—	7	倉橋 真司
(2)外国語コース1年生におけるPLPへの意識調査と家庭学習について	18	北村 悦子

II 平成19年度 研修報告

(1)英進コース 北海道研修旅行報告	44	小野 仁也・及川 尚彰
(2)特進・外国語コース 2007年アイルランド・ドイツ語学研修	48	浅利 正雄
(3)フレックスコース 北海道学研修報告	55	大岩 和良
(4)秀光中等教育学校 ①グリーンスクール研修報告	60	千葉 広高
②—1 2007ユーロスクール実施報告(前半)	66	千葉 浩
—2 アイルランド・ダブリン班(後半)	松田 万理	
—3 フランス・レンヌ班	小林 祐喜	
—4 参加生徒レポート (1)初めてのヨーロッパ	岩本 怜央	
(2)私が感じたヨーロッパ	川岸 瑞歩	
③第4学年自由研究論文 京都実地研修報告	103	芦立 俊雄・他
(5)通信制課程 異文化体験ハワイ研修	131	新田 玲子

編集後記

2009年3月 第24号

巻頭言	加藤 雄彦
-----	-------

トピック

「グリーンフィールド」	1	吉井 秀邦
-------------	---	-------

I 研究報告	
(1)平成20年度 第47回東北地区私学教育研修会報告	4
	石田 昌彦
(2)第47回東北地区私学教育研修会報告	7
	小林 祐喜
(3)小論文指導の着地点はどこに設定すべきか	12
	三浦 宗隆
(4)全国音楽教育研究会高等学校部会全国大会宮城大会報告	19
	熊原 裕美
(5)国語教育における課題	
－国語教育研修会に参加して－	22
	島倉 尚子
(6)日本史の教材研究の試み	
－「城下町」の場合を例として－	37
	作間 克彦
(7)高校生における携帯電話の利用について	
－フレックスコース1年生の調査から－	43
	後藤 有希
(8)仙台市安養寺下瓦窯跡調査報告	
－陸奥国分寺・同尼寺創建期の瓦窯跡－	47
	渡邊 泰伸
II 平成20年度 研修報告	
(1)英進コース 北海道研修旅行報告	245
	(前班) 赤間由樹子
	(後班) 秋葉寿太郎
(2)特進・外国語コース	
2008年アイルランド・ドイツ語学研修	263
	小岩久美子
(3)フレックスコース	
①北海道学研修報告	280
	(男子) 高階 公
	(女子) 高橋 葉子
(4)秀光中等教育学校	
①グリーンスクール研修報告	296
	田添万智子
②ユーロスクール実施報告	301
	前半(スイス・ジュネーブ) 庄司 昌弘
	後半(アイルランド・ダブリン) 木田智恵美
	前半(イタリア・ローマ) 本木 真人
	後半(フランス・レンヌ) 牛渡 純
(5)通信制課程 異文化体験ハワイ研修	333
	新田 玲子

編集後記

2010年3月 第25号

巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

2009年「長春第十一高校」姉妹校締結訪問……………1
赤間由樹子

I 研究報告	
(1)伝統芸能の継承に見られる教育のあり方	
－ハワイ・フラにおける一考察－	5
	安住 陽子
(2)日中交流の架け橋に… 中国人就学生への取り組み	27
	岩渕 奈央
(3)理科教育の現状と今後の課題	
－BU(理科)を通して－	35
	寒河江華菜
(4)ニュース時事能力検定の授業への導入について	38
	秋葉寿太郎
(5)仙台育英学園陸上競技部(短距離ブロック)の活動報告と今後の展望	43
	菅原 新
(6)アブソープション・アプローチについて	47
	雫石 誠孝
(7)書の楽しみ方 ～いろいろな書の在り方の一考察～	50
	渡邊 章紀

II 平成21年度 研修報告

(1)英進コース 北海道研修旅行報告	71
	早坂 憲人・高根 司
(2)外国語コース 韓国ソウル研修報告	79
	青木 康博
(3)特別進学コース・外国語コース	
ハワイ語学研修旅行報告	84
	庄司 昌弘
(4)フレックスコース(多賀城校舎)	
韓国ソウル研修旅行報告	95
	阿部 綾子
(5)フレックスコース(宮城野校舎)	
①北海道学研修旅行報告(女子)	104
	池口真利子
②北海道学研修旅行報告(男子)	110
	寺澤 信枝
(6)秀光中等教育学校	
①第3学年ユーロスクール実施報告(前半)	118
	倉橋 真司
②第3学年ユーロスクール実施報告(後半)	128
	小岩久美子
(7)通信制課程 異文化体験ハワイ研修	131
	新田 玲子

編集後記

2011年3月 第26号

巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

I-LION HAWAII SCHOOLにおける
ソーシャルスタディーズがめざすもの……………1
安住 陽子

I 研究報告

(1)西洋倫理思想史におけるプラトニック・ラブ(エロス論)の系譜 —アンリ・ベルクソンの説を中心に—
土屋 靖明10

(2)高校野球の犠牲バントに関する一考察15
横山 将

(3)育英祭での第2学年演劇上演報告22
河内 実華

(4)私の考える理想的な授業
～Brush Upを通じて感じたこと～32
高橋こずえ

(5)気化熱を利用した燃焼実験と冷却実験36
相原ゆり子

II 平成22年度 研修報告

(1)英進進学コース 第2学年北海道研修旅行報告
山本 尚武39

(2)外国語コース 2010年度TOEICエッセイコンテスト3位入賞について —報告—49
鹿野 洋・高橋 智子

(3)特別進学コース ハワイILHA語学研修51
石山かおり

(4)フレックスコース(多賀城校舎)
北海道学研修旅行報告62
千葉 陽子

(5)フレックスコース(宮城野校舎)
①北海道学研修旅行報告96
千葉絵美子・庄子 由美
②沖縄学研修旅行報告101
小石純之介・佐藤 飛鳥

(6)秀光中等教育学校
第3学年ユーロスクール2010報告
①前半(9月6日～10日) スイス～イギリス105
石田真理子
②後半(9月11日～17日) フランス117
脇 淳

(7)通信制課程 異文化体験ハワイ校研修報告134
新田 玲子

編集後記

2012年3月 第27号

巻頭言加藤 雄彦

トピック

仙台育英獅子太鼓部 —ダボス会議に参加して—1
高橋 葉子

I 研究報告

(1)教育リーダーシップ理論における「同僚性」の理論とその実践的意義7
石田真理子

(2)国語教育における文学的文章の読解

—短歌を題材として—17
鈴木 正明

(3)外国語コースにおける外国語指導についての考察20
小野 真弓

(4)本校における理科の指導について
—Brush Upを通しての一考察—26
井上 晶子

II 平成23年度 研修報告

(1)英進進学コース
①第2学年北海道研修旅行報告29
高橋 麻憂
②2011年度TOEICエッセイコンテスト特別賞受賞について(報告)39
鹿野 洋・岩渕 奈央

(2)外国語コース ILHA研修に向けての準備と研修報告41
高橋 美保・安住 陽子

(3)特別進学コース
①PLAN2000 山形疎開学習報告65
高橋 真理
②第2学年校外研修旅行報告73
鈴木 和弘・伊藤 信男
山下 秀範・小山 格

(4)Tフレックスコース(多賀城)北海道学研修旅行報告82
後藤 有希

(5)Mフレックスコース(宮城野)沖縄学研修旅行報告89
佐藤 絢

(6)秀光中等教育学校 第2学年ILHA研修報告96
安住 陽子・須江 航・前澤 絵菜

(7)通信制課程 異文化体験ハワイ研修報告106
安藤 清一

編集後記

2013年3月 第28号

巻頭言加藤 雄彦

トピック

秀光・特進共同理科実験講座「サイエンス・コ・ラボ」1
千田 芳文

第1回New York Shukoh Academy (NYSА) 実施報告12
小林 祐喜

I 研究報告

(1)地理の授業での工夫21
鈴木 和雄

(2)英進進学コースⅡ類における高度IT教育について	29
日野 彰	
(3)外国語コースの特色を生かした授業 ～日本伝統文化の発表活動を通して～	34
松田 万里	

Ⅱ 平成24年度 研修報告

(1)英進進学コース 第2学年北海道研修旅行報告	45
三浦 宏明	
(2)特別進学コース	
①ILHA研修	58
河内 実華	
②京都研修旅行	69
神谷 章嗣・三浦 仁志	
(3)Tフレックスコース(多賀城)沖縄研修旅行	75
伊藤 寛・千葉 陽子	
(4)Mフレックスコース(宮城野)沖縄学研修旅行	80
安部 恒俊	
(5)秀光中等教育学校 第2学年 ILHA研修	94
遠藤 祐太	
(6)日中国交正常化40周年記念事業 仙台育英学園 高等学校通信制課程 北京研修報告	99
安藤 清一	

編集後記

2014年3月 第29号

巻頭言	加藤 雄彦
-----------	-------

トピック

インドネシア研修生の本校での短期研修について	1
新井 真未	
第4学年 NYSA2013実施報告	12
小岩久美子	

I 研究報告

(1)化学部の活動	23
讃岐 果林	
(2)情報科学コースに向けての取り組みについて	33
島倉 尚子・庄司 邦彰	
遠藤 誠・日野 彰	

Ⅱ 平成25年度 研修報告

(1)英進進学コース	
ILHA研修報告	41
佐々木真野	
第2学年北海道研修旅行報告	54
及川 まり・本多 華菜	
(2)特別進学コース 関西校外研修報告	66
神谷 章嗣	
(3)Tフレックスコース 沖縄研修旅行報告	72
赤間由樹子・林田 茂・芳賀 賢祐	
古田 夕子・二瓶 巧	

(4)Mフレックスコース 沖縄研修旅行報告	76
佐藤 優人	
(5)秀光中等教育学校 ILHA研修	85
下浅 雄大	
(6)通信制課程 広域通信制課程沖縄研修報告	95
戸崎 亮司	

編集後記

2015年3月 第30号

巻頭言	加藤 雄彦
-----------	-------

トピック

広域通信制課程 ILC沖縄東北研修旅行報告	1
ICL沖縄 與那城慧太	
国際バカロレア・デュアルプログラム (IBDP) 導入 について	7
外国語コース 高橋 郁夫	

I 研究報告

(1)イマージョン授業(国際バカロレア準備)	10
外国語コース ジェームズ・ドクターマン	
(2)戦時期における「仙塩地方開発総合計画」(いわゆる 金森構想)の登場と展開	23
特進コース 雲然 祥子	
(3)河川流域における遺跡動態の研究	30
英進コース 佐々木 悟	

Ⅱ 平成26年度 研修報告

(1)特別進学コース	
関西校外研修旅行	46
高橋 真理	
(2)情報科学コース	
第1学年 会津研修報告書	52
正木 智也	
第2学年 校外研修報告	57
千葉 陽子	
(3)外国語コース	
第2学年 ILHA研修報告	63
小野 真弓	
(4)英進進学コース	
ILHA研修報告	72
熊坂 治平	
(5)秀光中等教育学校	
秀光16期生 第4学年NYSA2014実施報告	84
石田真理子	
第2学年(18期生)ILHA研修報告	93
阿部 広大	
(6)通信制課程	
広域通信制課程沖縄研修旅行	105
ILC青森 竹ノ子千春	

Ⅲ その他

- (1)日本・キューバ友好400周年交流事業 ……114
外国語コース 岩渕 奈央
Tフレックス 白岩 幸浩

編集後記

2016年3月 第31号

- 巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

- 創立110周年記念講演
国際人育成のための提言～ILHAの実践を通して …1
ILHA(校長) アール・大川

I 研究報告

- (1)数学同好会の活動 ……9
特別進学コース 佐藤 璽
(2)IB DP(国際バカロレア・ディプロマプログラム)
に関する生徒の振り返り ……14
外国語コース ジェームズ・ドクターマン
ケリー・ウィンター
高橋 郁夫
(3)3DCGゲームソフト作成 ……27
情報科学コース 遠藤 誠
日野 彰

II 平成27年度 研修報告

- (1)特別進学コース 関西校外研修旅行 ……32
菅野 直幸
(2)情報科学コース 沖縄研修旅行報告 ……37
山田 大
(3)外国語コース ハワイ研修報告 ……42
石田真理子
(4)英進進学コース 沖縄研修報告 ……52
北村 悦子
(5)フレックス・技能開発コース
サッカー部女子沖縄遠征・交流会 ……66
林田 茂
(6)秀光中等教育学校
NY研修報告 ……70
本田 朋
ハワイ研修報告 ……77
阿部 広大
(7)広域通信制課程
沖縄研修旅行 ……89
ILC青森 加藤 宏明
職場体験実習報告 ……98
ILC沖縄 照屋 恵美

Ⅲ 東北地区私学教育研修・ブロック別指導者研修報告

- (1)教育課程(私学教育) ……111
秀光中等教育学校 坂内 玲子

- (2)生徒指導(私学教育) ……114
フレックスコース 白岩 幸浩
(3)進路指導(私学教育) ……116
秀光中等教育学校 倉橋 真司
(4)道德教育(ブロック別) ……119
フレックスコース 渡邊 章紀
秀光中等教育学校 小林 祐喜

編集後記

2017年3月 第32号

- 巻頭言……………加藤 雄彦

トピック

- 探究講座TTTチャレンジの成果……………1
特別進学コース 神谷 章嗣
孔子課堂の可能性……………7
外国語コース 鈴木 茂幸
国際バカロレア受講生徒の学術的論文 ……13
外国語コース 石田真理子

I 研究報告

- (1)文芸部の活動について ……23
特別進学コース 下田真奈美
(2)英進進学コース英語科研究報告 ……27
英進進学コース 熊坂 治平
(3)国際バカロレアと日本のカリキュラム:2つは両立
できるのか ……31
秀光中等教育学校 ケリー・ウィンター
笠原 千尋
(4)IB生物におけるアクティブ・ラーニングの事例研
究 ……36
外国語コース ジェームズ・ドクターマン
笠原 千尋

II 平成28年度 研修報告

- (1)特別進学コース 関西校外研修旅行 ……43
齋藤 美咲
(2)外国語コース ハワイ研修報告 ……48
赤間 ゆき
(3)英進進学コース 沖縄研修報告 ……57
佐々木正人
(4)フレックス・技能開発コース
沖縄研修旅行(フレックスコース女子) ……66
杉田 愛
沖縄研修旅行(技能開発コース) ……71
小野 仁也
(5)秀光中等教育学校
NYSA 2016 実施報告 ……75
伊藤 沙絵
ハワイ研修報告 ……81
倉橋 真司
(6)職員研修報告 ……90
多賀 努

Ⅲ その他	
(1)広域通信制課程ILC青森校の状況報告 ……………	104
ILC青森所長 三笠 勝彦	
(2)職業調査とジョブミーティングー12職種の職業に 関する調査とその発表活動を通してー……………	115
情報科学コース 志賀 貞昭	
(3)公文式学習（国語）実践の成果……………	119
フレックスコース 島倉 尚子	

編集後記

編集後記

平成29年度（第33号）の研究紀要が完成しました。原稿をお願いした先生方に心より感謝申し上げます。

今年度も、加藤雄彦理事長校長先生のご指導の下、幅広い分野で研究が進められました。私たち教員の研修として実施された「発達障害に関する研修会」では、改めて多様な生徒を指導する難しさとその重要性を、先進的な取り組みであるIBの報告からは、多くの先生方のご指導と生徒たちの取り組みから実績を積み上げ全国にその存在を知らしめつつあること、沖縄ILCからは、全国的な広域通信制高等学校として、仙台育英がゆるぎない地位を築き上げてきたことなど、詳しくご報告をいただいております。

先生方におかれましては、これらの研究実践と日々の教育活動から、さらなる研究と発展的な教育活動につながるヒントをつかんでほしいと切に願うものです。

さて、この冊子の内容からは少し外れますが、巻頭言にもあります通り、先般の全国駅伝大会において、仙台育英が女子で優勝、男子で第3位という快挙を成し遂げました。監督あるいは部長、コーチとして日々ご指導に当たられた先生方のご苦勞に深甚より感謝申し上げます。もちろん、大会本番で実力を発揮した生徒諸君の努力に、深く感動したことはいうまでもありません。ましてや、現在のチームが出来上がるまで、日々の活動を支えていただいた加藤雄彦理事長校長先生のご配慮にも深く感謝する次第です。

この文を書くに当たり、改めて駅伝大会直前の毎日新聞「学園特集号」を読み直しました。加藤雄彦理事長校長先生のこんな文章がありました。「頂を目指して歩み始めたら、逃げることはできない」「仲間と励まし合うことはできても、自分の足で進むしかない」。これは部活動で日々努力している生徒達へのエールであることは言うまでもありません。しかし、私たち仙台育英の教職員へのメッセージでもあると思います。日々の教育活動をより効果的なものにするために、この冊子が、自分自身の足で前に進むための一助となれば幸いです。

第33号 研究紀要編集担当 雫石利光

発行：秀光中等教育学校・仙台育英学園高等学校

所在地：〒983-0045 宮城県仙台市宮城野区宮城野二丁目4-1

電話：022-256-4141

研究紀要 33 号

巻 頭 言 加藤 雄彦

トピック

- 高等学校通信制教育の質の向上について 村上 淳
剣道部サイパン遠征・文化交流活動報告 加藤 裕之
IBにおける教科指導実践について Kerry Winter
Enabling and Disabling Factors in Implementing International Baccalaureate Programmes
in Japanese Secondary Schools: Curriculum, Pedagogy and Assessment

I 研究報告

- (1) Surface活用に向けた授業における取組について 情報科学コース 坂入 崇紀
日野 彰
(2) IB DP (国際バカロレア・ディプロマプログラム)
デュアルランゲージで行う TOK 授業 外国語コース 石田真理子
(3) 教科BU研修会について 教科教育センター 板垣 徳昭

II 平成29年度 研修報告

- (1) 秀光中等教育学校
カナダ研修報告 小保内陽大
(2) 情報科学コース
沖縄研修旅行報告 加藤 芳己
(3) フレックス・技能開発コース
沖縄研修報告 多賀 努
(4) 英進進学コース
沖縄研修報告 渡邊 光稀
韓国研修報告 狩野 常俊
(5) 外国語コース
ハワイ研修報告 岩渕 奈央
丹野まさよ
(6) 職員研修報告 霰石 利光

III その他

- (1) ILC 沖縄校の状況報告 ILC 沖縄所長 山内 一秀
(2) 演劇部の活動について 特別進学コース 赤間 ゆき

総目録 (第1～32号)

編 集 後 記